

周 山 廃 寺

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一八―六

周山廃寺

2019年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

周 山 廃 寺

2019年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



礎石建物1（北東から）



1 周山廃寺全景（南東上空から）



2 周山廃寺全景（南西上空から）

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、京北地域小中一貫教育校施設整備に伴う周山廃寺の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成31年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 周山廃寺（京都市番号 17 S 734）
- 2 調査所在地 京都市右京区京北周山町中山39番地の4ほか（京都市立周山中学校）
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2018年4月9日～2018年8月23日
- 5 調査面積 1,319.6㎡
- 6 調査担当者 李 銀眞・西田倫子・小檜山一良
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「周山」・「五本松」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 李 銀眞
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 15 協力者 調査・整理にあたっては、以下の方々からご教示をいただいた。記して感謝いたします。
網 伸也、五十川伸矢、上原真人、大脇 潔、菱田哲郎（五十音順、敬称略）

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	4
(1) 地理的環境	4
(2) 歴史的環境	5
(3) 周山廃寺の発掘経緯と石田茂作	7
3. 遺 構	10
(1) 基本層序	10
(2) 遺構の概要	11
(3) 飛鳥時代後期（白鳳期）から奈良時代の遺構	12
(4) 江戸時代の遺構	19
4. 遺 物	21
(1) 遺物の概要	21
(2) 土器類	21
(3) 瓦類	24
(4) 金属製品	33
5. ま と め	34
(1) 調査成果	34
(2) 伽藍配置の復元	36
(3) 出土遺物からみた周山廃寺	38
(4) 小 結	43
付章 石田茂作による周山廃寺発掘調査の出土遺物	45

図 版 目 次

- 巻頭図版1 遺構 礎石建物1（北東から）
- 巻頭図版2 遺構 1 周山廃寺全景（南東上空から）
2 周山廃寺全景（南西上空から）
- 図版1 遺構 1・2区平面図（1：300）
- 図版2 遺構 1区東壁断面図（1：100）
- 図版3 遺構 1区南壁断面図（1：50）
- 図版4 遺構 2区北壁・西壁断面図（1：80）
- 図版5 遺構 3区実測図（1：50）
- 図版6 遺物 瓦類拓影及び実測図1（1：4）
- 図版7 遺物 瓦類拓影及び実測図2（1：4）
- 図版8 遺物 瓦類拓影及び実測図3（1：4）
- 図版9 遺物 瓦類拓影及び実測図4（1：6）
- 図版10 遺物 瓦類拓影及び実測図5（1：6）
- 図版11 遺物 瓦類拓影及び実測図6（1：6）
- 図版12 遺物 瓦類拓影及び実測図7（1：6）
- 図版13 遺物 瓦類拓影及び実測図8（1：6）
- 図版14 遺物 瓦類拓影及び実測図9（1：6）
- 図版15 遺物 瓦類拓影及び実測図10（1：6）
- 図版16 遺物 瓦類拓影及び実測図11（1：6）
- 図版17 遺物 瓦類拓影及び実測図12（1：6）
- 図版18 遺物 瓦類拓影及び実測図13（1：6）
- 図版19 遺物 瓦類拓影及び実測図13（1：6）
- 図版20 遺物 瓦類拓影及び実測図15（1：6）
- 図版21 遺構 1 1区全景（西から）
2 礎石建物1（東から）
- 図版22 遺構 1 1区礎石5・抜取穴2の断ち割り（北東から）
2 礎石2（南から）
3 礎石5（東から）
4 抜取穴1（北から）
5 抜取穴2（東から）
- 図版23 遺構 1 1区排水溝70西部（北から）

- 2 1区塀1・2、竪穴建物100（北東から）
- 3 1区平坦面1・2と瓦溜り20（南東から）
- 4 1区土器溜り2・3（北東から）
- 図版24 遺構 1 2区全景（西から）
- 2 3区全景（西から）
- 図版25 遺物 土器類
- 図版26 遺物 軒瓦類
- 図版27 遺物 丸瓦Ⅰ類
- 図版28 遺物 平瓦Ⅰ類
- 図版29 遺物 平瓦Ⅱ類
- 図版30 遺物 平瓦の広端面叩き・重複叩き、隅切平瓦

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：10,000）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	西堂保存エリア平面図（1：100）	2
図4	1区調査前全景（北西から）	3
図5	2区調査前全景（西から）	3
図6	3区調査前全景（西から）	3
図7	1区作業風景（北東から）	3
図8	1区ドローン撮影作業風景（北西から）	3
図9	1区礎石建物保護状況（北東から）	3
図10	調査見学授業風景（北から）	3
図11	現地説明会風景（南東から）	3
図12	周山廃寺位置図（1：200,000）	4
図13	周辺遺跡位置図（1：50,000）	6
図14	1947・1949年発掘調査時の遺構図面	8
図15	基本層序図（1：50）	10
図16	1区地形測量図（1：300）	12
図17	1・2区の南北・東西断面図（1：150、1：200）	13
図18	礎石建物1実測図（1：80）	15
図19	瓦溜り20断面図（1：100）	16

図20	堀1・2実測図（1：80）	17
図21	竪穴建物100実測図（1：80）	18
図22	ピット126・127実測図（1：50）	19
図23	土器溜り2・3実測図（1：50）	20
図24	土器類実測図（1：4）	22
図25	土器溜り2・3出土土器類実測図（1：4）	23
図26	室町時代から江戸時代の瓦類拓影及び実測図（1：6）	31
図27	金属製品実測図（1：3）	33
図28	周山廃寺の伽藍配置復元と東西・南北断面図（1：1,000）	37
図29	周山廃寺・周山瓦窯跡出土軒瓦型式一覧（1：6）	39
図30	周山瓦窯出土平瓦の型式別比率の推移と操業年代	43
図31	東京国立博物館所蔵 周山廃寺出土遺物拓影及び実測図	45
図32	周山中学校保管 周山廃寺出土遺物拓影及び実測図（1：6）	46
図33	京北合同庁舎保管 周山廃寺出土遺物拓影及び実測図（1：6、1：8、1：4）	47

表 目 次

表1	遺構概要表	11
表2	遺物概要表	21
表3	瓦溜り1・20出土丸瓦・平瓦の型式別数量比較表	24
表4	平瓦型式別数量比較表	28
表5	平瓦Ⅰ類数量比較表	29
表6	平瓦Ⅱ類数量比較表	29
表7	丸瓦の観察表	31
表8	平瓦の観察表	32
表9	周山廃寺・周山瓦窯跡出土軒瓦の出土遺構・保管場所別数量表	39
表10	諸機関保管の周山廃寺出土瓦の観察表	49

周山廃寺

1. 調査経過

本調査は、京北地域小中一貫教育校施設整備に伴う発掘調査である。調査地は、京都市右京区京北周山町中山39番地の4ほか（京都市立周山中学校）に所在し、周山廃寺にあたる。周山廃寺は飛鳥時代後期（白鳳期：7世紀後半）に建立されたと考えられる寺院跡で、1947・1949年、現在の周山中学校の建設に伴う発掘調査により東堂・塔・中堂・西堂の建物跡を確認、南門・北堂の位置が推定されている。現在は東堂・塔・中堂の範囲が京都府指定史跡として保存整備されている。

調査は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が京都市より委託を受け、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）の指導の下、実施した。

調査区は3箇所に分け、西から1区（約1,260㎡）、2区（約50㎡）、3区（約9.6㎡）とした。調査面積は、合計1,319.6㎡である。2018年4月9日に1区から調査を開始し、重機による表土の掘削後、人力により遺構を検出・掘り下げ、実測図の作成、写真撮影などの記録作業を行った。1区の調査は、7月21日に終了した。2区の調査は、同様の手順で7月23日から開始し、8月19日に終了した。3区の調査は、2区の調査と並行して7月31日から開始し、8月22日に終了した。



図1 調査地位置図（1：10,000）

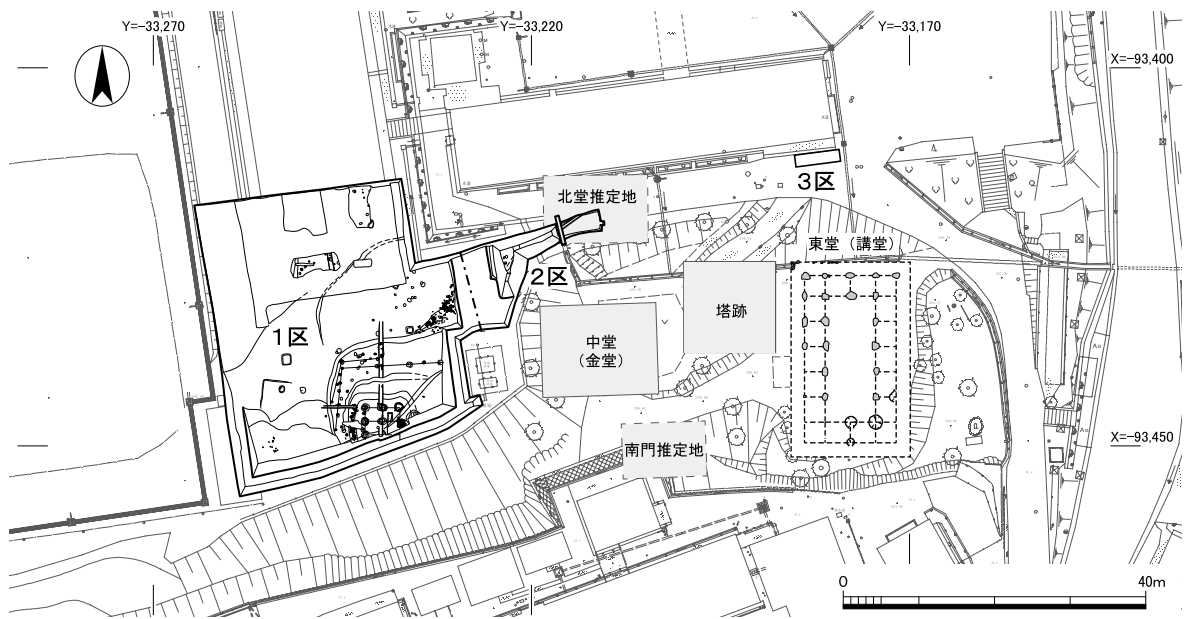


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)

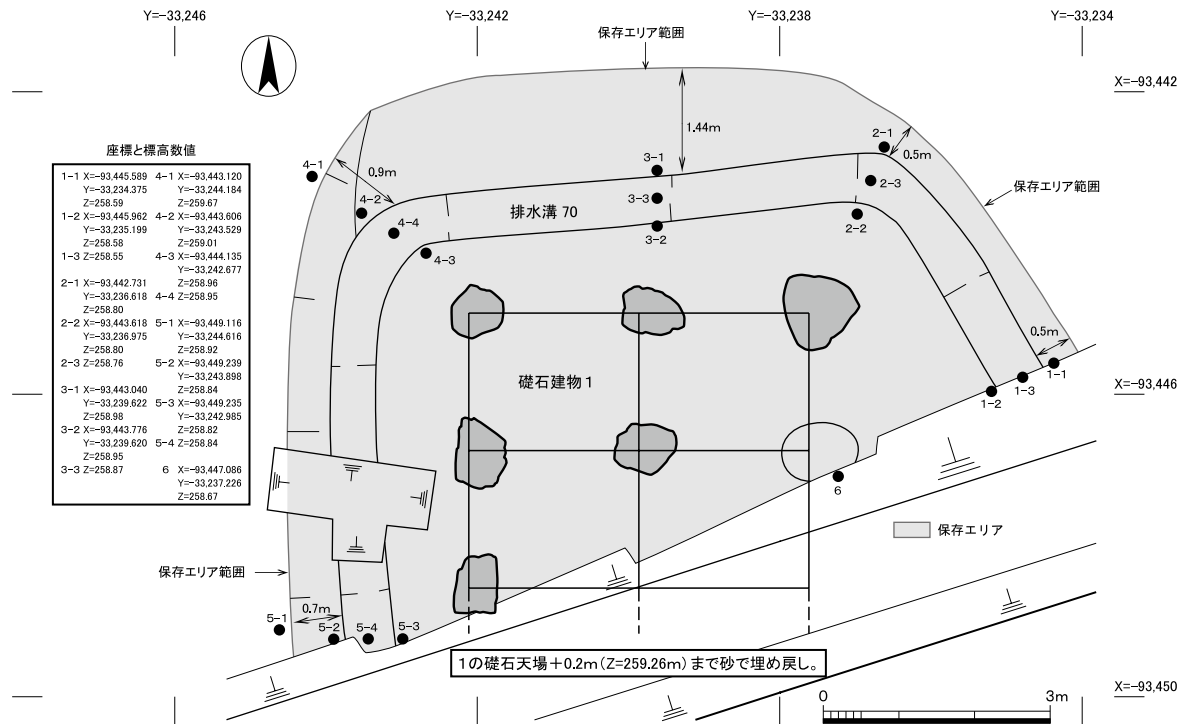


図3 西堂保存エリア平面図 (1 : 100)

調査の結果、1区において、1947・1949年に検出した礎石建物1（西堂跡）の礎石6基を再検出し、それに伴う排水溝や塀、また竪穴建物などを検出した。礎石建物跡と排水溝は、新築工事の設計変更によって保存されることになり、土嚢と砂を使用して保護層を設けた後、埋め戻した。

各調査区では調査の進展に伴い、適宜、文化財保護課の検査指導を受けた。また、当調査における検証委員である立命館大学の木立雅朗教授、龍谷大学の國下多美樹教授の検証を受けた。

調査期間中には、発掘調査の成果を公表するために、2018年6月29日に広報発表、7月1日に現地説明会を開催した。約200名の参加があった。



図4 1区調査前全景（北西から）



図5 2区調査前全景（西から）



図6 3区調査前全景（西から）



図7 1区作業風景（北東から）



図8 1区ドローン撮影作業風景（北西から）



図9 1区礎石建物保護状況（北東から）



図10 調査見学授業風景（北から）



図11 現地説明会風景（南東から）

また、6月13日・14日・19日の3箇日5回にわたり、周山中学校の全学年（参加者約75名）を社会科授業の一環として発掘調査の見学を受け入れた。7月11日には、京北第一・二・三小学校の6年生（参加者約40名）の発掘調査の見学を受け入れ、この遺跡の普及に努めた。

2. 位置と環境

(1) 地理的環境（図12・13）

調査地のある右京区京北地域は、京都府のほぼ中央部にあり、京都市街地中心部から北西方向約20kmに位置する。東西17.7km、南北21.7kmである。



図12 周山廃寺位置図（1：200,000） 国土地理院「京都及大阪」2012年による

地形的には、周囲を標高1000m未満の山々に囲まれ、丹波高地と呼ばれる準平地帯からなる。丹波高地の山頂群を構成している岩石は、丹波層群と呼ばれる硬い基盤岩で、主成分はチャート・頁岩からなる。その山間部を葉脈状に流下する桂川によって形成された小盆地に立地している¹⁾。

当地域の河川は、桂川が町の東部を南西に流れ、弓削川が町の西部を南流する。これらが周山付近で合流し、八木・日吉・園部・亀岡の各市町を貫流して山城盆地へ注ぐ。また、京都から若狭へ抜ける南北方向の街道と、亀岡から近江方面へ抜ける東西方向の街道が交差している。当地域は、かつて長岡京・平安京といった都の宮城や諸寺院の造営のための木材供給地として知られており、周山廃寺はこのように水路・陸路が交差する交通物流の要衝地に立地している。

(2) 歴史的環境 (図13)

京北地域では桂川と弓削川により形成された長細い平坦部と、それらを囲む山の丘陵裾部に多くの遺跡が点在しており、これまで135箇所の遺跡が周知されている²⁾。調査地周辺の歴史的環境について、『京都市遺跡地図台帳』³⁾を基に概観する。

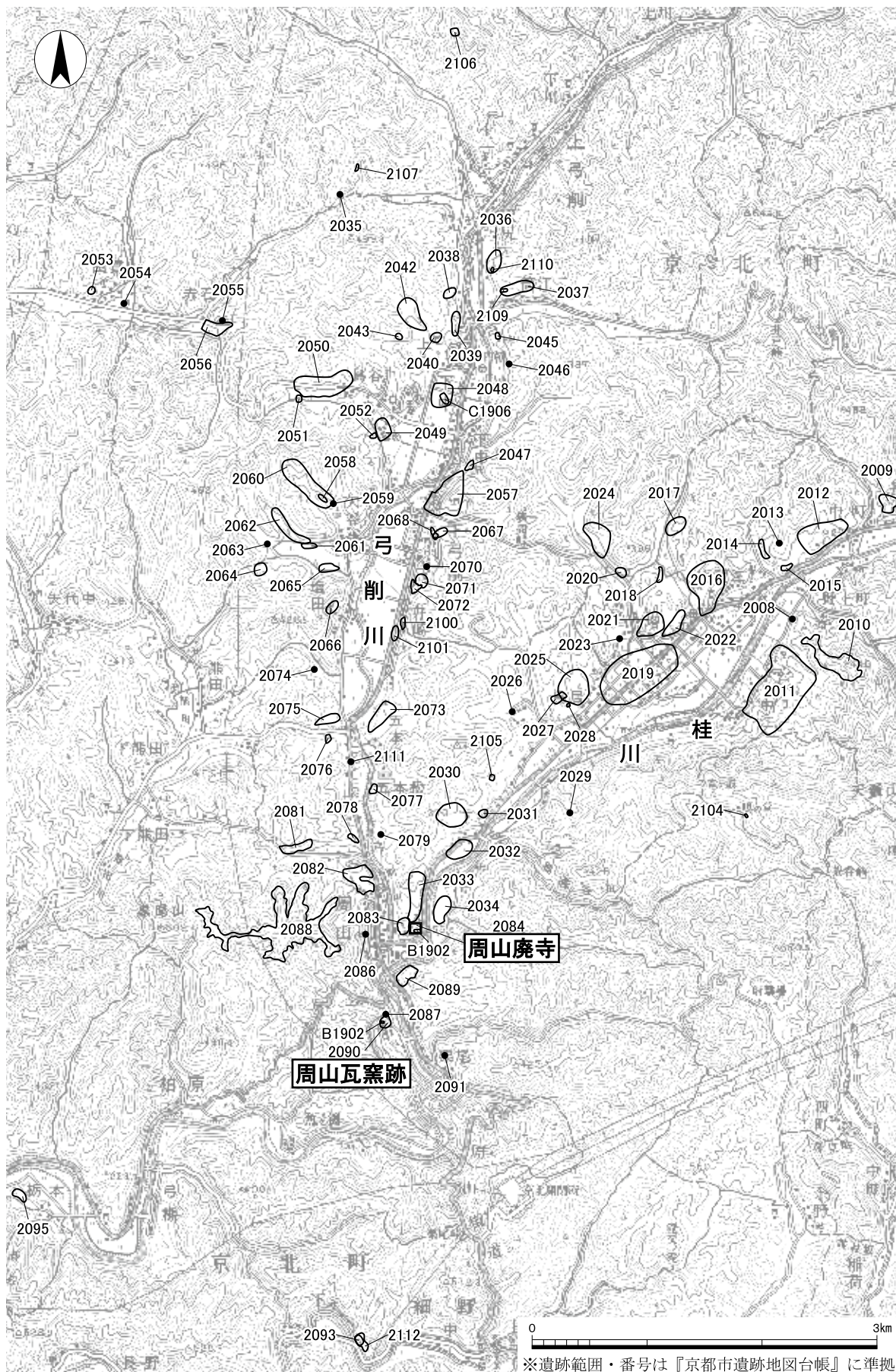
旧石器時代の様相は明らかではないが、1981・1982年の周山瓦窯跡〔2090〕の発掘調査に際して旧石器時代後期のチャート製の剥片石器が出土した。

続く縄文時代の遺跡としては、狭間谷遺跡〔2068〕・五本松遺跡〔2073〕・東山遺跡〔2089〕・栃本遺跡〔2095〕がみられるが、いずれも遺物散布地で確実な遺構は知られていない。ほかに、1955年に京都府立北桑田高校付近で磨製石斧、宇津小学校校庭で石鎌が発見されている⁴⁾。1982年の愛宕山古墳群〔2022〕の調査で縄文土器とサヌカイト片が出土しており⁵⁾、2002年の高梨遺跡〔2083〕でもサヌカイト製の石槍が出土した。

弥生時代になると、京北地域の各所で集落跡が急増する。弓削川右岸の上中太田遺跡〔2048〕・上中遺跡〔2049〕から弥生時代前期及び後期の土器片や半磨製石槍が出土した。弓削川下流の右岸には宇津遺跡〔2096〕、桂川の右岸には塔遺跡〔2019〕がある。さらに、弓削川左岸では、文久元年(1861)出土と伝わる扁平鈕式袈裟襷文銅鐸(弥生時代中期)が見つかっており⁶⁾、下弓削銅鐸出土地〔2057〕とされた。それぞれの地域に対応する拠点集落の存在が窺われる。

古墳時代になると、多くの古墳が築造され、現在180基余りが確認されている。前期古墳は確認されていないが、中期の古墳として桂川右岸の愛宕山古墳群〔2022〕の1号墳と、弓削川と桂川の合流地点に築かれた周山古墳群〔2033〕の1号墳とが知られており、いずれも方墳である。ほかの多くは10基未満の小規模な古墳が丘陵上に分布する群集墳で、古墳時代後期(6世紀代)のものである。横穴式石室を内部主体とする中江〔2011〕・塔村〔2020〕・三宅谷〔2024〕・折谷〔2030〕・岩ヶ鼻〔2036〕・鳥谷〔2050〕・矢谷〔2060〕・矢谷奥〔2062〕・塩田〔2064〕古墳群などがある。

飛鳥時代から奈良時代の遺跡としては、今回調査を行った周山廃寺(2084)がある。詳細は次章以降で後述するが、1947・1949年の2度にわたる発掘調査によって建物跡群が検出された。また、当廃寺の南西に位置する周山瓦窯跡〔2090〕・周山廃寺跡附窯跡〔B1902〕は寺院造営のため、瓦や須恵器を供給する窯跡であることが判明している。いずれも京都府の史跡に指定されている。さ



※遺跡範囲・番号は『京都市遺跡地図台帳』に準拠

図13 周辺遺跡位置図 (1 : 50,000) 国土地理院「四ッ谷」1994年・「京都西北部」1999年による

らに、周山廃寺と同時期の集落跡として考えられている祇園谷遺跡〔2034〕や高梨遺跡〔2083〕がある。

ほかに、弓削川流域の下中では弓削道鏡が創建したとされる福德寺跡〔2047〕があり、その対岸にあたる上中遺跡〔2049〕は、奈良時代をはじめ、弥生時代から鎌倉時代の複合遺跡で、府立北桑田高校を中心に広がっている。その南西の遺物散布地である下弓削遺跡〔2052〕では奈良時代の土師器皿が採取されている。

平安時代以降、京北地域は宮都や諸寺院の造営のための木材供給地として発展していくが、中世には弓削川流域に弓削庄、桂川流域に山国庄の荘園がそれぞれ形成された。特に山国庄には延暦3年（784）の長岡京遷都から明治2年（1869）に至るまで、天皇家直轄の禁裏御料地として皇室との関係が深く、光厳天皇（1313～1364）の山国陵をはじめとする天皇陵や経塚なども多数存在している。⁷⁾

中世から近世にかけては、上中城跡〔C1906〕や中江城〔2010〕、塔城〔2021〕、八津良城〔2082〕、周山城跡〔2088〕、宇津城跡〔2097〕といった城郭や、平井谷城館〔2002〕が築かれた。このなかで上中城は1993年以降、数度にわたって測量・発掘調査が行われており、その実体が解明されつつある。⁸⁾ また周山城は天正7年（1579）に明智光秀が築城した城で、織豊系城郭の丹波での代表例として著名である。⁹⁾

（3）周山廃寺の発掘経緯と石田茂作（図14）

周山廃寺は、1947・1949年に初めて発掘調査が行われた。太平洋戦争中に収蔵品の疎開に伴って当地を訪れていた東京国立博物館の石田茂作氏が、終戦後、新制中学校（現・市立周山中学校）建設工事によって、この寺跡が破壊されることを危惧して、地元有志とともに行ったものである。¹⁰⁾ 延べ12日間という極めて限られた条件下で行われた発掘調査であったが、比較的狭い範囲に6つの堂塔跡が集中し、特異な伽藍配置をとっていることが明らかになった。つまり、一般的に左右対称に堂塔を配置するのに対して、周山廃寺は丘陵斜面をひな壇状に造成して築かれたためか、整然とした伽藍配置をとっていない。そのため、石田氏は塔以外の堂跡の性格や名称を特定することは避け、相対的な位置関係から東堂跡・塔跡・中堂跡・西堂跡・北堂跡・南門跡と仮称した。以下に、石田氏の発掘成果による各堂塔跡と出土遺物の概略を説明する。

東堂跡 間口七間×奥行四間の南北棟の礎石建物で、19基の礎石が検出された。礎石は、すべて自然石で、現在も原位置を保って保存整備されている。基壇は、南北85尺×東西52尺、高さ1尺の低い基壇と推定される。基壇の外装は、北東側で4寸内外の自然石がわずかに検出されただけである。建物方位は、後述する塔跡と同じく北に対して東へ5度30分偏する。

基壇の周囲から多量の瓦片と、中央部から緑釉陶器皿が出土した。注目されるのは、東堂跡の北西より発見された「□田部連君足」銘平瓦である。縄叩き目が施された凸面に、文字がヘラ書きされているが、一字目は残された字画から「桑」ないし「粟」と推定される。

塔跡 発掘当時は、東西約35尺×南北約40尺、高さ約3尺の方形の土壇が残っているのみで、

中央が径10尺ほど凹んでいたという。この凹みの周囲に7尺8寸等間で三間四方の建物の礎石抜取穴と、礎石の固め石（根石）が確認された。

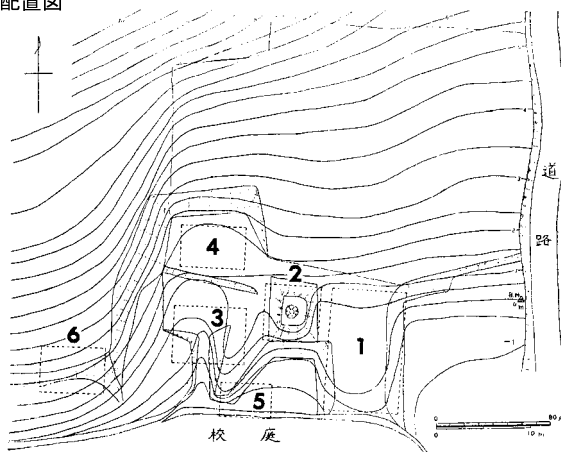
付近からは瓦片以外に、鉄製風鐸の身や舌の破片、また心柱の根巻石の一部と思われる石材が出土している。この心柱根巻石の直径と、土壇の一辺の長さの比率から、高さ94尺の三重塔があったと推定している。

中堂跡 半壊状態で検出されたため詳細は不明である。しかし塔跡の西に隣接する所に平坦な地形があることや、礎石の抜取穴と思われる窪地、石列及び瓦の分布状況から東西50尺×南北40尺ほどの建物があったと推定されている。また、さらに約2尺掘り下げたところ、土層が褐色に変わっており、その中から古瓦片と灰層が発見された。そのため、古い堂跡の上に土盛りを行って、一度再建されたことを想定している。

西堂跡 中堂跡の西方、約6尺高いところで、建物の北西隅部に当たる礎石6基と他に1箇所礎石下根固め石の名残りが認められた。東西7尺×南北6尺の等間隔であるが、急な崖によって南側は失われていたため、礎石建物の全体規模は不明である。建物方位は、塔跡・東堂跡と同じく、北に対して東へ5度30分偏する。

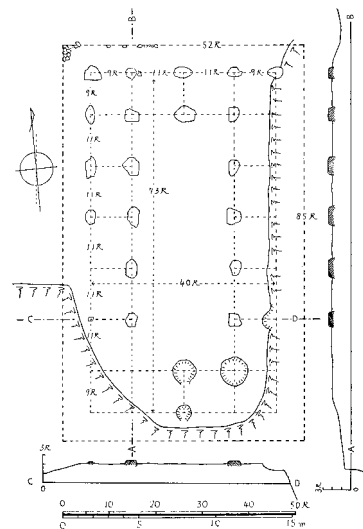
基壇の痕跡は判然としないが、西側の礎石列中心より西へ5尺のところ粘土層が約1尺見つ

伽藍配置図



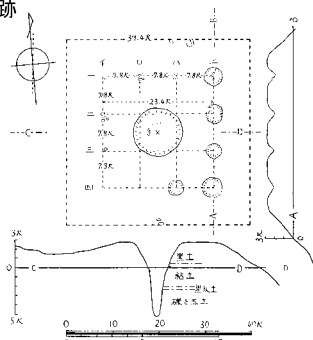
第四図 遺址地形図 (1. 東堂址 2. 塔址 3. 中堂跡) (4. 北堂址 5. 南門址 6. 西堂址)

東堂跡



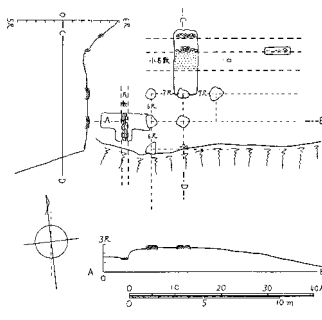
第七図 東堂址実測図

塔跡



第八図 塔址実測図

西堂跡



第九図 西堂址実測図

※ 伽藍配置図 S=1/800
塔・西堂・東堂跡 S=1/500

図14 1947・1949年発掘調査時の遺構図面
(石田茂作・三宅敏之『丹波国周山廃寺』『考古学雑誌』第45巻第2号1959年より転載)

かったという。さらに、その地点で幅1尺5寸の溝が発見された。丸瓦と平瓦の破片が南北方向に並んでいるが、周囲には瓦がほとんど見つからないことから、人為的に廃瓦を敷設したものと考え、西斜面からの流水に対する排水施設と想定した。

そして北側の礎石列中心より北へ5尺の所で、幅4尺ほどの小石敷が発見され、そこから葡萄鏡と蔓草麟鳳鏡が各1面出土した。さらに北へは急に高くなるが、その斜面に栗石による土留遺構あるいは石階の名残と思われる石列が見つかった。

北堂跡 中堂跡の北側、約2尺高くなったところに、丘陵傾斜面を削って人工的に造った長方形の平坦面があったという。建設工事が行われてしまったため、詳細は不明であるが、工事中に多量の瓦が出土したという伝聞を得る。そのうち軒瓦の出土地点は軒先のラインに近いだろうという前提で、間口約45尺×奥行約30尺の建物があったと推定した。

南門跡 塔跡と中堂跡の間、南側に瓦の堆積層が露呈しており、その範囲が東西37尺×南北24尺ほどで、これが周山廃寺発見の端緒となったという。礎石は発見されていないが、瓦の堆積層の位置や規模から南門跡と考えられている。

註

- 1) 太田陽子・成瀬敏郎・田中眞吾・岡田篤正編『日本の地形6 近畿・中国・四国』 東京大学 2004年
- 2) 加納敬二・津々池惣一「右京区京北の遺跡分布調査」『京都市内遺跡分布調査報告 平成17年度』 京都市文化市民局 2006年
- 3) 『京都市遺跡地図台帳』第8版 京都市文化市民局 2007年
- 4) 京北町誌編纂委員会『京北町誌』 京北町 1975年
『京北町五十年誌』 京北町 2005年
- 5) 奥村清一郎『愛宕山古墳発掘調査概報』京都府京北町埋蔵文化財調査報告第2集 京北町教育委員会 1983年
- 6) 梅原末治「下弓削発見ノ銅鐸」『京都府史蹟勝地調査会報告』第七冊 京都府 1926年
- 7) 京北町誌編纂委員会『京北町誌』 京北町 1975年
- 8) 國下多美樹・神所尚輝「上中城の発掘調査」『近世城郭から考える諸問題』第23回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集 京都府埋蔵文化財研究会 2016年
- 9) 中居和志・高橋成計「周山城跡」『京都府中世城館跡調査報告書－丹波編－』第2冊 京都府教育委員会 2013年
馬瀬智光「周山城跡」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成29年度』 京都市文化市民局 2018年
- 10) 石田茂作・三宅敏之「丹波国周山廃寺」『考古学雑誌』第45巻第2号 日本考古学学会 1959年
- 11) 安井良三「周山廃寺の遺址と遺物」『文化史学』第1号 文化史学会 1950年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図15)

1区は、調査前はグラウンドであったため平坦になっており、地表面の標高は262.6mである。1区の南壁を標準として基本層序を述べると、地表から約3.5～3.7mまでが現代盛土であり、その下に近代遺物包含層（1・2層）、その下に近代旧表土（3層）が約0.1m堆積する。さらにその下に、近世層（6層）が約0.11～0.2m堆積し、その下が黄褐色シルト～礫の基盤層（9層）となる。飛鳥時代後期（白鳳期）から奈良時代の遺構は、大半を基盤層上面で検出したが、礎石建物1とその周辺では基盤層上面に整地層がある。

1区の東壁中部では、地表から2.2～2.4mまでが現代盛土であり、その下に近代遺物包含層（2層）が堆積しており、その下に近代旧表土（3層）が約0.1m堆積する。その下に、近世層（4層）

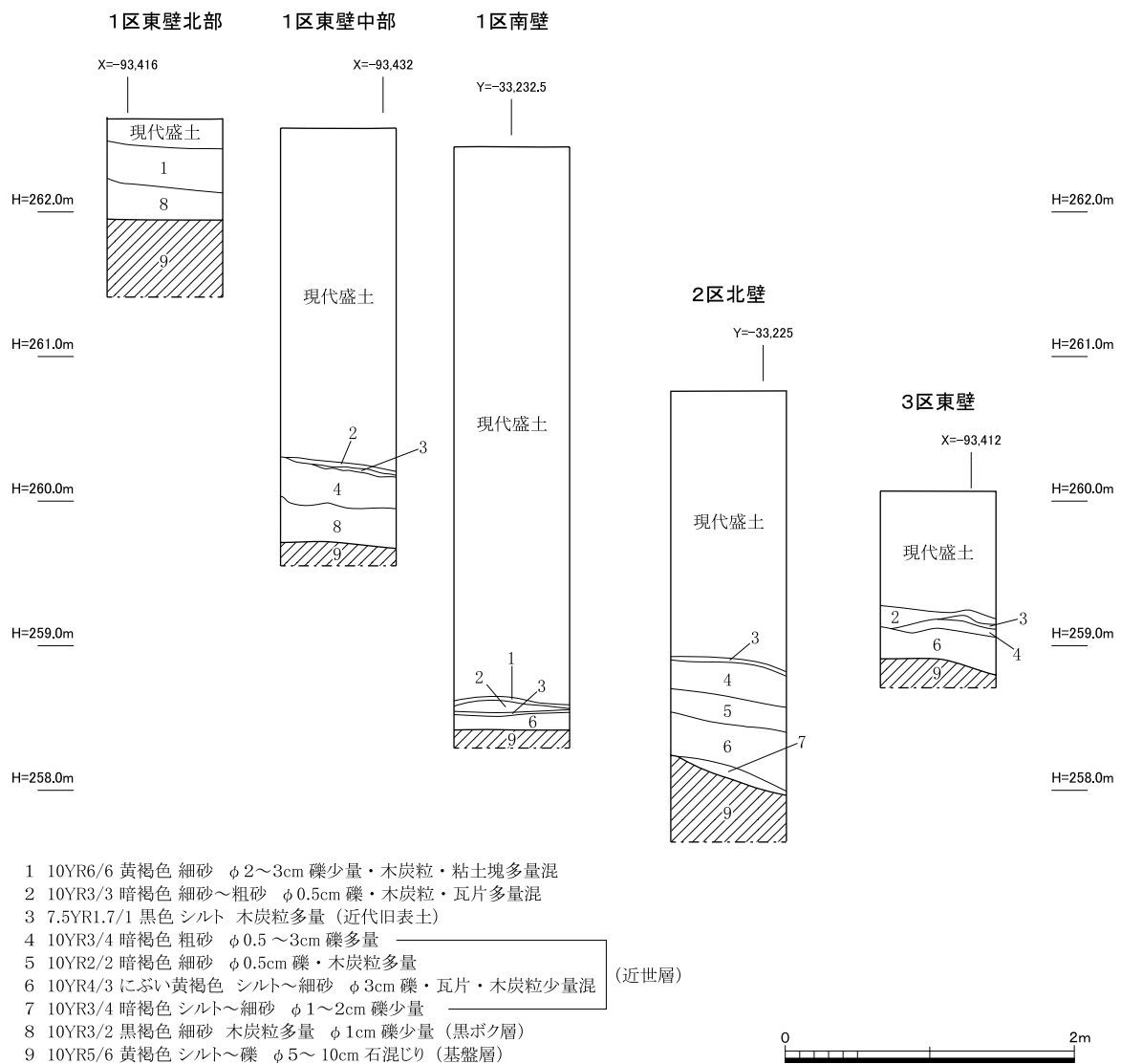


図15 基本層序図 (1 : 50)

が約0.3m堆積しており、その下面で江戸時代の土器溜り2・3を検出した。その下に黒褐色細砂からなる黒ボク層（8層）が約0.3m堆積しており、古代の遺物が少量含まれていた。その下は基盤層（9層）である。1区の基盤層上面の標高からみると、東壁北部は262.0m、東壁中部は259.7m、南壁は258.4mである。比高差は3.6mで、北から南へ向けて大きく傾斜する。

2区の地表面の標高は、西部261.5m、東部260.0mで、西から東へ傾斜する。2区の北壁を基準として基本層序を述べると、地表から約2.0mまでが現代盛土である。その下に近代の旧表土（3層）が約0.1m堆積する。その下に近世層（4～7層）が2.6～3.3m堆積する。その下には、1区と同様に黄褐色シルト～礫の基盤層（9層）となるが、基盤層上面が西部258.4m、東部257.3mで西から東へ傾斜し、高低差は1.1mほどに及ぶ。飛鳥時代後期（白鳳期）から奈良時代の遺構は、すべて基盤層上面で検出した。

3区の地表面の標高は、260.1mである。3区の東壁を基準として基本層序を述べると、地表下約0.9mまで碎石やコンクリート片が混じる現代盛土である。その下に近代の旧表土（3層）が約0.03m堆積する。その下に近世層（4・6層）が0.8～1.2m堆積する。その下が黄褐色シルト～礫の基盤層（9層）となる。基盤層上面の標高は258.9mである。

（2）遺構の概要（表1）

1区では、整地層上面で1949年の調査で検出されていた礎石建物1（西堂跡）の礎石6基を再検出した。規模は東西2間（柱間2.1m）×南北2間以上（柱間1.8m）あり、その周囲には排水溝70が巡ることを確認した。ほかに、基盤層上面で塀1・2、竪穴建物100、瓦溜り20、平坦面1～3、ピットなどを検出した。なお、1区北東側の地形の変換点で江戸時代の土器溜り2・3を検出した。

2区は、ほとんどが攪乱による削平を受けていたが、基盤層上面で飛鳥時代後期（白鳳期）から奈良時代の瓦を多量に含む瓦溜り128やピット126・127を検出した。

3区は、ほとんどが攪乱による削平を受けており、遺構は検出できなかった。近代旧表土の直下で近世層（図版5-3層）から棧瓦が1点出土したのみである。

なお、1区中央部、瓦溜り20の北西で瓦溜り1を検出した。東西6.5m以上、南北10m以上の範囲に不整形に広がる。掘形はなく、検出面からの深さは0.18～0.4mある。瓦溜り1は、現代盛土を掘り下げの際に検出したものであるが、その0.4m下で近代の旧表土を確認した。堆積状況からみ

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
飛鳥時代後期 （白鳳期） ～奈良時代	1区：礎石建物1、排水溝70、塀1・2、竪穴建物100、 瓦溜り20、平坦面1～3、ピット 2区：瓦溜り128、ピット126・127	1区：瓦溜り1
江戸時代	土器溜り2・3	

ると、周山中学校の建設工事時の造成土と考えられる。しかし、埋土は後述の瓦溜り20と同様に、木炭粒を多量に含む褐色・黒褐色の細砂～粗砂からなり、飛鳥時代後期（白鳳期）から奈良時代までの瓦が多量に含まれている。古代の遺構の土と瓦をまとめて造成土として利用した可能性がある。そのため、ここから出土した瓦は、もとの遺構の組成を保っていると考えられ、遺構出土のものに準じて扱うこととした。遺物に関する詳細は、「4. 遺物（3）瓦類」で後述する。以下、遺構が検出された1・2区を取り上げ、時期の古い順に主な遺構について報告する。

（3）飛鳥時代後期（白鳳期）から奈良時代の遺構

平坦面1～3（図16・17、図版23-3） 1区東半部で平坦面を3箇所検出した。北西から南東へ下がる尾根先端部の傾斜地を掘削することによって造成された平坦面である。そのため、平坦面の掘形は北・西側でやや深くなる。北から順に平坦面1・2・3とする。平坦面1は、地形の傾斜

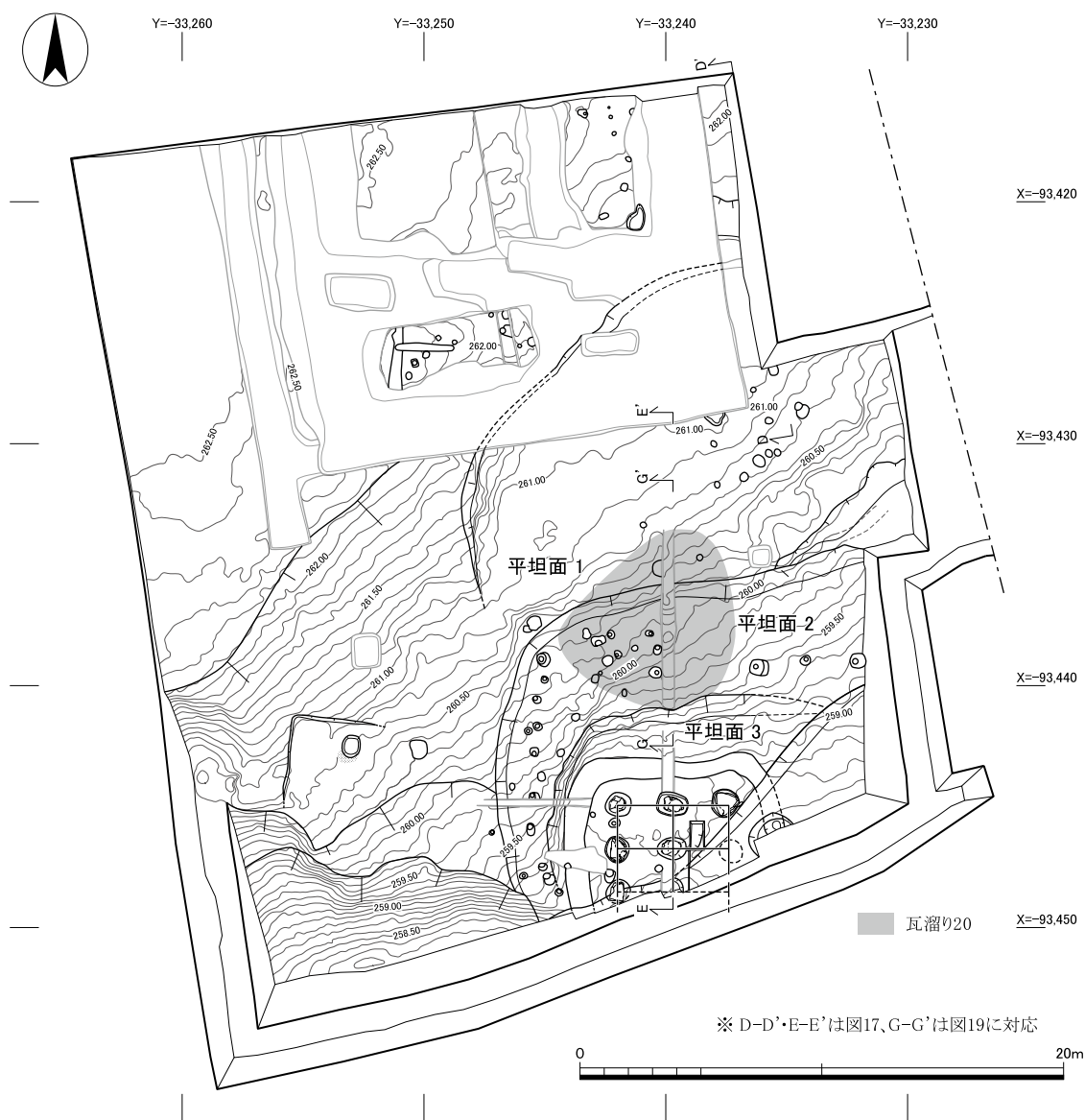


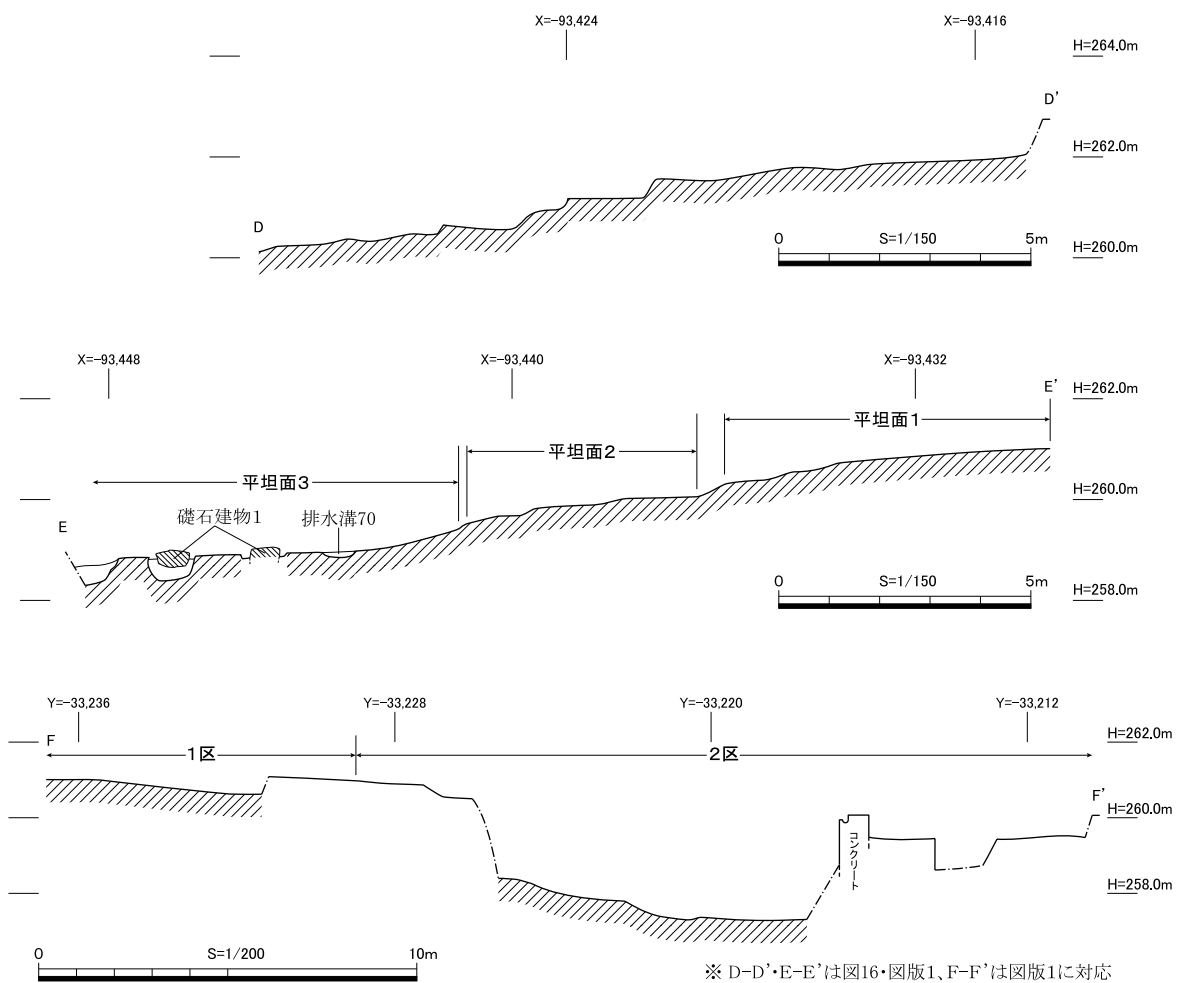
図16 1区地形測量図（1：300）

に対して直交する方向に削り込んで造成している一方、平坦面2・3は南北方向を意識して削り込んでいます。

平坦面1は、東半部の北側で掘形の北・西辺の2辺を検出した。体育館建設による攪乱によって大きく削平されている。標高は、北部261.6m、南部261.0mで、北から南へ8度ほど緩やかに傾斜し、南北8～15m、東西20m以上ある。掘形北辺は東西長0.53mを測り、調査区外へと続く。掘形北辺の深さは約0.5mを測る。掘形西辺は南北長6m、深さは肩部で約0.8mを測る。掘形西辺の方位は北に対して約3度西に振れる。平坦面1は基盤層からなり、その上面から径0.15～0.2mのピットが検出されたが、建物や塀として復元できるものはない。

平坦面2は、東半部の南側で掘形の北・西辺の2辺を検出した。平坦面1との段差は0.3～0.5mある。標高は、北部260.0m、南部259.7mで、北から南へ6度ほど緩やかに傾斜し、東西14m以上、南北5mある。掘形北辺は東西長12m以上、深さは0.3～0.4mを測る。掘形西辺は南北長10m、深さ約0.1～0.2mを測り、北辺よりやや急傾斜である。掘形西辺の方位は、北に対して約5度東に振れる。平坦面2は基盤層からなり、北方では後述する瓦溜り20、西方では塀1・2を検出した。

平坦面3は、平坦面2の内側に食い込むように鱗形をなしている。東半部の南端で掘形の北・西辺の2辺を検出した。標高は、258.8mを測る。平坦面2との段差は0.3～0.4mである。東西9m、



※ D-D'・E-E'は図16・図版1、F-F'は図版1に対応

図17 1・2区の南北・東西断面図 (1:150、1:200)

南北8mあるが、南東部は後世に削平され崖になっている。掘形北辺は東西長7m、深さは0.3～0.4mを測る。掘形西辺は南北長7m、深さ0.4～0.6mを測る。掘形西辺の方位は、北に対して約12度東に振れる。平坦面3は基盤層と整地層からなるが、整地層を掘り込んで据えた礎石6基と抜取穴2基、排水溝を検出した。

礎石建物1（西堂）（図18、巻頭図版1、図版21・22） 1区平坦面3で検出した東西4.2m、南北3.6m以上の総柱礎石建物である。中堂跡の西側、約1.8m高い所に位置する。建物の南東部は後世の削平を受けて失われていたが、石田茂作氏が検出した礎石6基と抜取穴1箇所を再確認し、新たに抜取穴1箇所を検出した。以下、北西隅の礎石を起点にして、上列の西から東へ礎石1・2・3とし、中列を礎石4・5と抜取穴1とし、下列を礎石6と抜取穴2と称する（図18）。

柱間は梁行が約2.1m（7尺）、桁行は約1.8m（6尺）で、それぞれ等間隔で並ぶ。礎石3と抜取穴1の東側に、延長する抜取穴の検出に努めたが、抜取穴と認められる痕跡はなかった。後述する排水溝70が礎石建物の3辺をめぐることを確認したことから、梁行2間×桁行2間以上の小型の礎石建物の可能性が高いと考えられる。建物の方位は、真北に対して0度7分西に振れる。

礎石は、いずれも自然石を利用している。礎石1～3・5は、円形の平面形を呈し、直径約0.6～0.98mを測る。礎石4・6は長方形を呈し、長軸0.75～0.9m、短軸0.55～0.65mを測る。東端側にある礎石3が、直径0.98mで最も大きい。いずれも上面は平坦だが、柱がのる柱座の痕跡は見当たらなかった。礎石据付掘形の平面形は、いずれも円形状を呈し、径0.85～1.2mを測る。

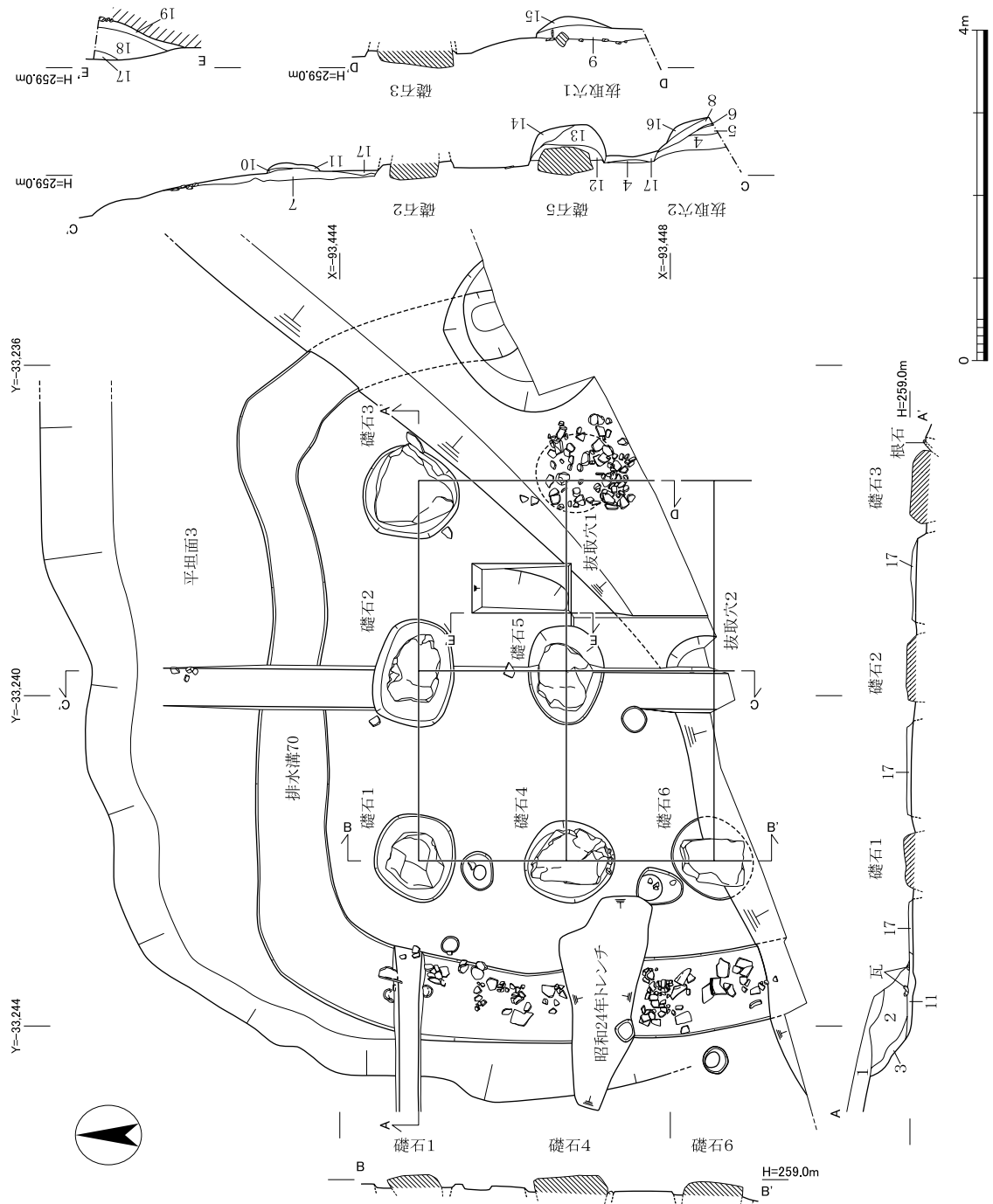
礎石上面の標高は、礎石1が259.06m、礎石2が259.03m、礎石3が258.91m、礎石4が259.03m、礎石5が259.02m、礎石6が258.96mである。東へ0.15m、南へ0.1mほど低くなっている。

平坦面の造成方法を確認するため、礎石5の南東側に攪乱を利用して設けた断ち割りの断面観察の結果、基盤層の上に約0.5mの整地層3層（図18-17～19層）を確認した。にぶい黄褐色ないし褐色、黒褐色のシルト～粗砂層からなり、東から西へ傾いている点から、版築状の積土ではなく、凹凸のある基盤層の上面を平坦に整地したと考えられる。

礎石5の掘形の深さは、検出面から0.46mある。整地の上面から掘り込んで、底部に暗褐色と褐色シルト～細砂を敷いたのち、礎石を据えている。据付穴の埋土には、直径3cmほどの礫が少量含まれているのみで、根石あるいは根巻粘土の痕跡は検出していない（図18-12～14層）。

抜取穴1は、礎石5から東へ約2.1m離れたところにあり、飛鳥時代後期（白鳳期）から奈良時代の瓦片が多量にまとまった状態で検出した。東半分を掘り下げて断面観察をした結果、瓦を多量に含む黒褐色細砂土（図18-9層）が調査区外へ延びており、その直下に、礎石5の据付穴の埋土と同様の土層（図18-15層）を確認した。厚さは0.10mである。残存規模から直径約0.96mの礎石据付掘形であると推定される。何らかの理由で礎石が抜き取られた後、窪んだところに、瓦片が多量に流れ落ちて堆積したと考えられる。掘形底面（基盤層上面）の標高は、礎石5と同様に258.38mである。

抜取穴2は、礎石5から南へ約1.8m離れた南壁際で検出した。近現代に堆積した土層（図18-4～6・8層）の直下に、礎石5の据付穴の埋土と同様の土層（図18-16層）を確認した。厚さ



- 1 10YR3/3暗褐色 細砂 φ0.5cm礫・木炭粒少量、瓦片多量混
- 2 10YR2/3黒褐色 細砂～粗砂 φ0.5cm礫・木炭粒・瓦片・10YR5/6黄褐色粒子多量混
- 3 10YR3/2黒褐色 細砂～粗砂 10YR3/3暗褐色粒子混
- 4 2.5Y4/2暗灰黄褐色 シルト～細砂 木炭粒・焼土粒・粘土塊多量混
- 5 10YR3/4暗褐色 細砂～粗砂 φ3cm礫少量、木炭粒・粘土塊多量混
- 6 7.5YR1.7/1黒色 シルト 木炭粒多量混 (近代旧表土)
- 7 10YR3/2黒褐色 シルト～礫 φ3～5cm礫、木炭粒・瓦片・粘土塊多量混
- 8 10YR4/2灰黄褐色 粗砂 φ1cm礫・木炭粒少量混
- 9 10YR2/3黒褐色 細砂 φ5～10cm礫・木炭粒・瓦片多量混
- 10 2.5Y4/4オリーブ褐色 シルト～細砂 φ1～2cm礫、木炭粒少量混 (排水溝70)
- 11 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～細砂 φ1cm礫少量混
- 12 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 φ3～5cm礫微量、木炭粒・粘土塊少量混
- 13 10YR3/4暗褐色+10YR4/4褐色 シルト～細砂 φ3cm礫少量、木炭粒・粘土塊多量混 (礎石5 掘付穴埋土)
- 14 10YR4/6褐色 シルト～細砂 木炭粒・粘土塊多量混
- 15 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 木炭粒・粘土塊少量混 (掘取穴1の埋土)
- 16 10YR3/4暗褐色+10YR4/4褐色 シルト～粗砂 φ3cm礫少量、木炭粒・粘土塊多量混 (掘取穴2)
- 17 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂～粗砂 土師器片・瓦片少量、木炭粒多量混
- 18 10YR4/6褐色 シルト～粗砂 φ3～5cm礫少量混 (整地層)
- 19 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂 φ0.5cm礫・粘土塊少量、木炭粒多量混

図18 礎石建物1実測図 (1 : 80)

は0.03～0.12mある。掘形底面（基盤層上面）の標高は258.28mで、礎石5と抜取穴1より約0.1m低い。

排水溝70（図18、図版23-1） 礎石建物の周囲に、コの字形に溝がめぐる。南東側と南側は後世に崖になって失われている。検出規模は東西9m、南北6.6m以上で、断面形は浅いU字形で、幅0.4～0.7m、深さ0.08～0.1mある。埋土はオリブ褐色シルト～細砂で、木炭粒と土器の細片が少量出土した（図18-10・11層）。北側の丘陵斜面から流れ込む雨水の排水溝と思われる。

瓦溜り20（図19、図版23-3） 1区中央部、平坦面2の北側で検出した。東西7.2m以上、南北7.6m以上の範囲に不整形に広がり、検出面からの深さは0.42mある。平坦面1・2間にある緩やかな段差部分を中心に多量の瓦が広がりをもって堆積している。底部の標高は北側で260.72m、南側で259.4mであり、高低差は1.32mある。埋土は木炭粒を含む褐色・黒褐色の細砂～粗砂からなり、飛鳥時代後期（白鳳期）から奈良時代までの丸瓦・平瓦が多量に出土した。軒瓦は極少量である。断面観察から、埋土の上層から平安時代の須恵器蓋や灰釉陶器碗が出土しており、一時的な堆積ではなく、数回に渡り流れ落ちて堆積したものと考えられる。

塀1・2（図20、図版23-2） 平坦面2で検出した逆L字形の塀である。柱穴の平面形は円形あるいは楕円形を呈し、直径0.28～0.5m、検出面からの深さは0.18～0.4mある。直径5～8cmの礎石及び瓦片をもつ柱穴もある。埋土は黒褐色細砂と暗褐色の細砂～粗砂に木炭粒と粘土塊混じりのものが主体であり、瓦と土器細片が少量出土した。

東西方向の部分を塀1-1、南北方向の部分を塀1-2として記す。柱間はばらつきがある。塀1-1は、柱穴3基からなり、西端柱穴79から東へ約5m延び、柱間は西から3.2m・1.7mある。塀1-2は、柱穴4基からなり、北端柱穴79から南へ約5.5m延び、柱間は北から1.6m・1.4m・2.3mある。

塀2も同じく東西方向の部分を塀2-1、南北方向の部分を塀2-2として記す。塀2-1は、柱穴6基からなり、西から2.1m・2.6m・4.5m・2.1m・2.1mある。塀2-2は、柱穴6基からなり、北から2.1m・1.1m・1.8m・1.3m・2.1mある。

塀1・2の主軸は正方位ではなく、地形に合わせて振れた方位をもっている。南北に並ぶ塀1-2の方位は北に対して約14度、塀2-2の方位は約6度東へ振れる。東西に並ぶ塀1-1と2-1は、いずれも東に対して北へ約5度振れる。

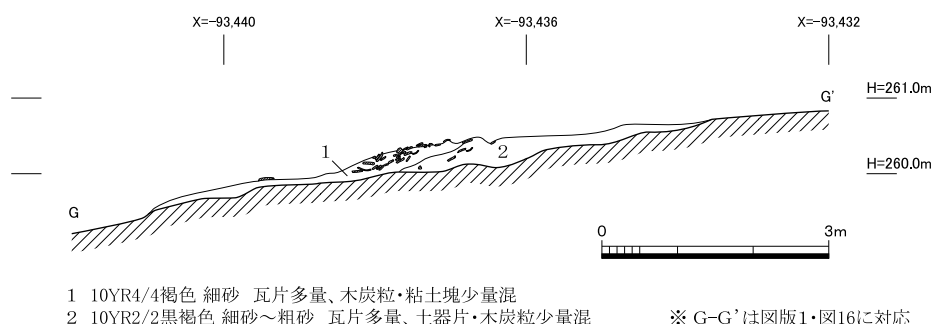


図19 瓦溜り20断面図（1：100）

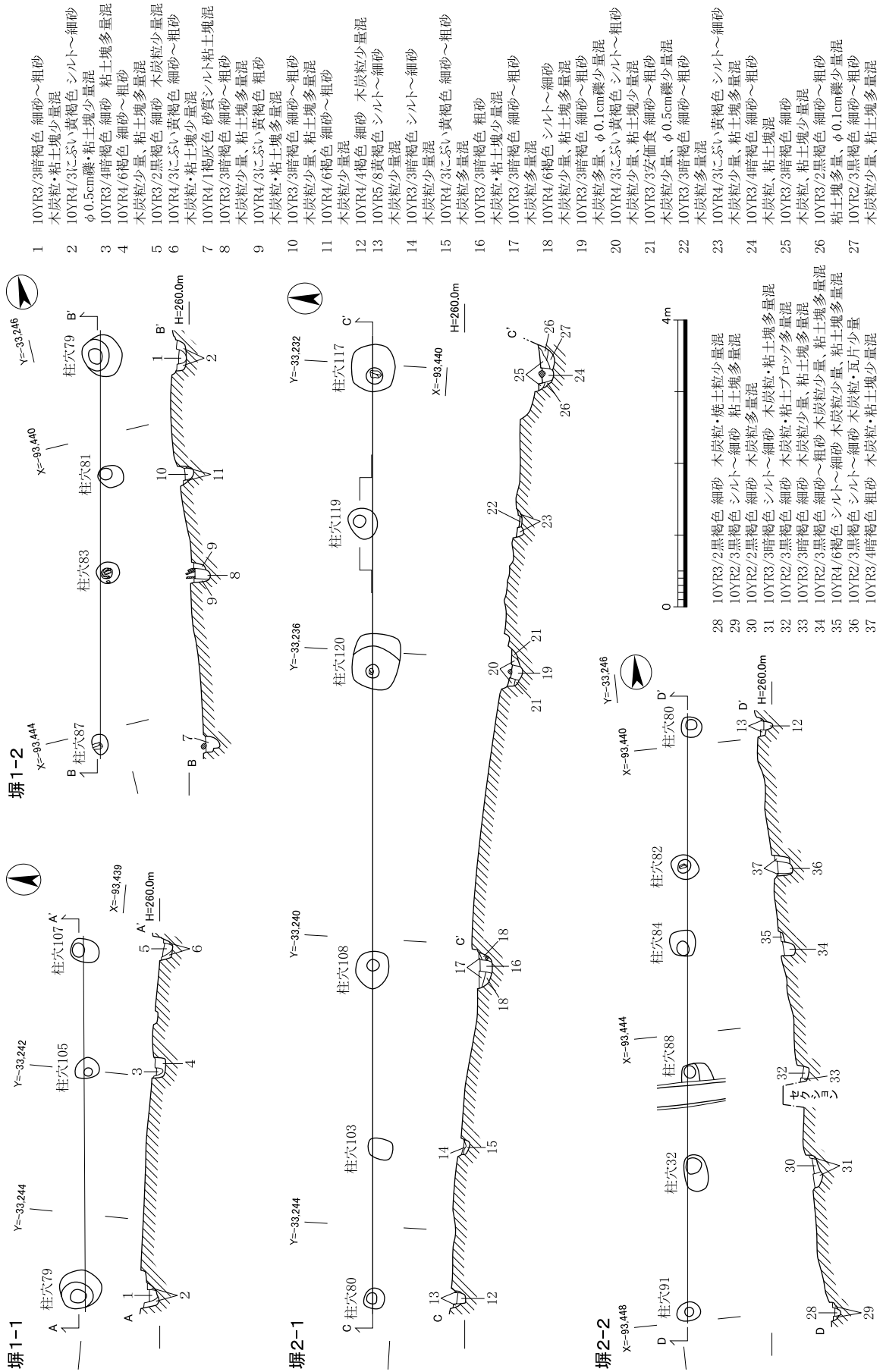


図20 堀1・2実測図 (1:80)

北西から南東へ延びる丘陵斜面を削り込んで、平坦面1と2の間の段差がある所に柱穴が並んでいることから考えると、寺域を意識した塀と考えられる。また、塀1と2の前後関係は不明であるが、傾きが類似しており、塀1・2の間にも柱穴が数基位置することから、複数時期に渡り建て直された可能性が考えられる。

竪穴建物100（図21、図版23-2） 1区南西部の斜面で検出した。平面形は方形と推定できる。北辺3.5m、西辺3.6mあり、北西部のみを検出した。検出面から床面までの深さは0.4mある。建物の方位は北に対して約6度東に振れる。壁溝や支柱穴は確認できなかった。床には入れ土を施した形跡は認められず、北西から南東へ傾く地山の斜面を平坦に掘り込み、そのまま床として利用している。

建物の北辺で竈の痕跡と考えられる土坑22・26を検出した。土坑22は、平面円形で、径0.72m、深さは検出面から0.17mある。竈の焚口や被熱面は残っていなかったが、埋土は焼土粒と木炭粒からなっており、土師器把手付き甕1点と被熱した石が出土した。

土坑26は、土坑22の東へ2.8m離れたところで検出した。平面不整形で、東西0.64m、南北0.8m、深さは検出面から0.06mある。埋土は土坑22と同様の焼土粒と木炭粒からなっており、土師器

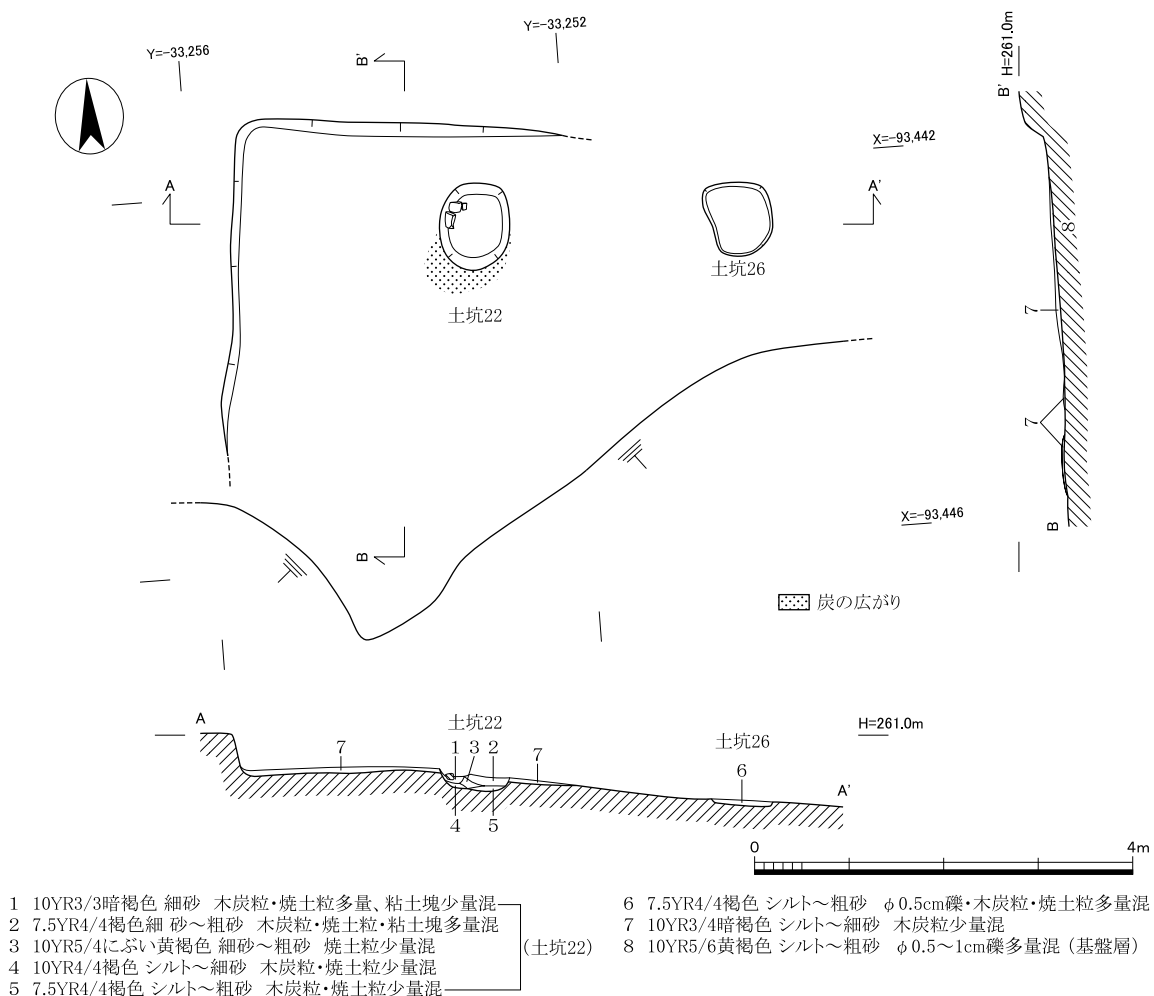


図21 竪穴建物100実測図（1：80）

小型甕が1点出土した。

瓦溜り128 2区中央部で検出した。平面形は西側の一部が検出されたのみで、不明である。全体の規模は不明であるが、2区北壁(図版4-18層)・南壁の断面観察では、東西4.1m以上、深さは0.2~0.54mある。底部の標高は257.28mである。

埋土は暗オリーブ褐色シルト~粗砂からなり、飛鳥時代後期(白鳳期)から奈良時代までの丸瓦・平瓦が多量に出土した。軒瓦と土器は極少量含まれる。底部外面に「寺入廿」と墨書された須恵器杯が1点出土した。

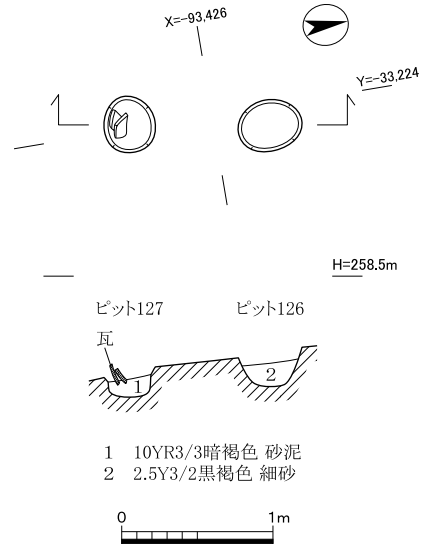


図22 ピット126・127実測図(1:50)

ピット126(図22) 2区中央西寄りで検出した。平

面形は円形を呈し、径約0.43m、検出面からの深さは約0.23mある。埋土から飛鳥時代後期(白鳳期)から奈良時代の平瓦細片が出土した。

ピット127(図22) 2区中央西寄りで検出した。平面形は円形を呈し、径約0.35m、検出面からの深さは約0.15mある。埋土から飛鳥時代後期(白鳳期)から奈良時代の平瓦が2点出土した。

(4) 江戸時代の遺構

土器溜り2・3(図23、図版23-4) 1区中央東寄りで検出した。南東部は調査区外へ広がるため、全体の大きさは不明であるが、検出規模は東西約5.5m、南北約3.4mの範囲に不整形に広がる。掘形はなく、西から東へ20度下がっている。2区の西壁で同様の土層が確認されており、高低差は検出面から1.5mある。約80点の土師器皿がほぼ完全な状態でまとまって出土したが、杉の樹木根を中心に両側に廃棄した様子である。この付近で何らかの儀式などに使用された土器の廃棄場所であった可能性がある。江戸時代後半のものと思われる。

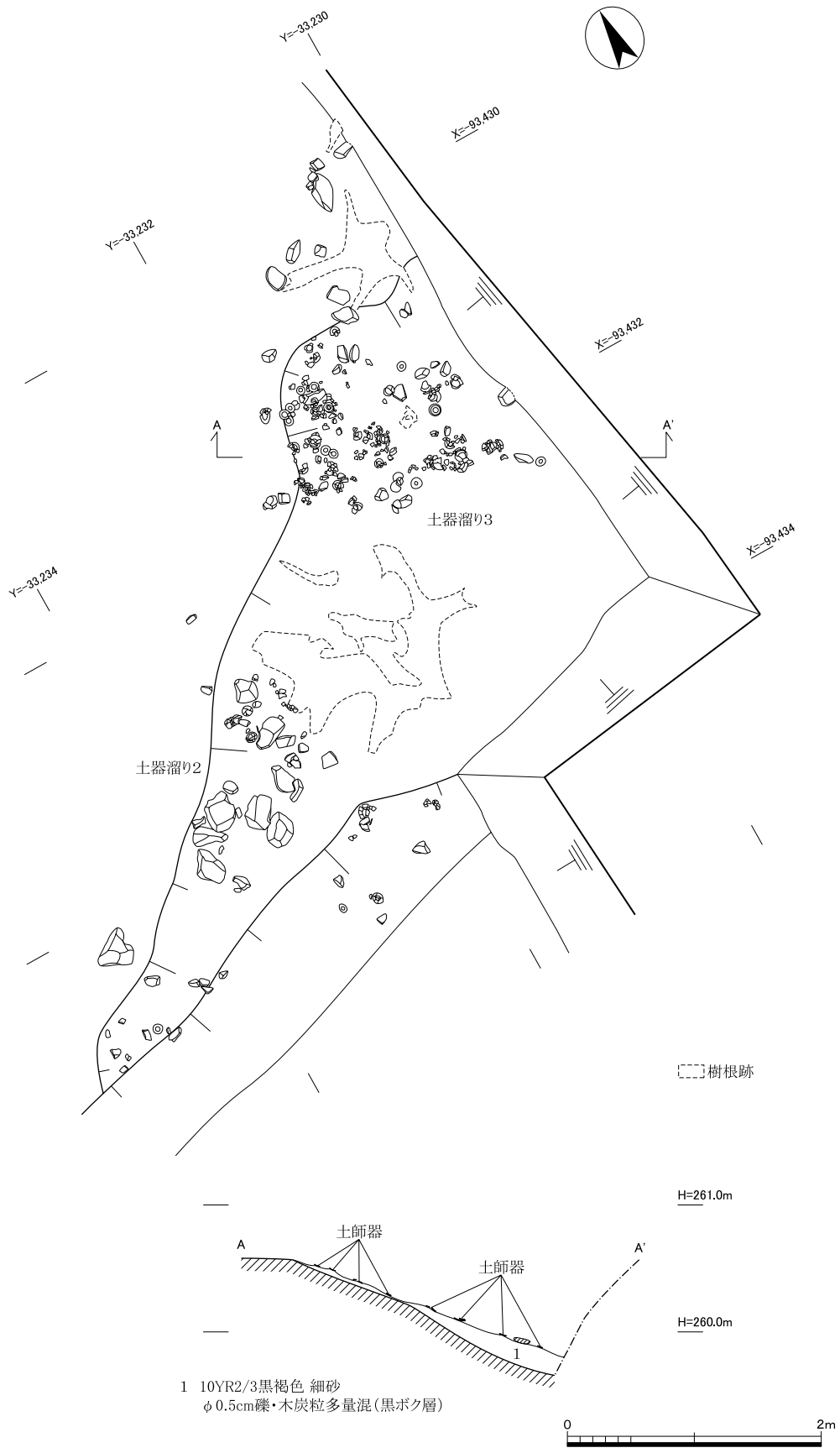


図23 土器溜り2・3実測図(1:50)

4. 遺物

(1) 遺物の概要 (表2)

遺物は、整理コンテナに計183箱出土した。出土遺物には、土器類、瓦類、金属製品がある。飛鳥時代後期(白鳳期)から奈良時代の瓦類が最も多く、9割以上を占める。次いで江戸時代の土器類と瓦類が1割以下で、その他は少量である。

土器類には、土師器、土師質土器、須恵器、瓦器などがある。瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・隅切平瓦・面戸瓦・棧瓦がある。金属製品には、釘・鏝・鉄滓などがある。細片のものは図示していない。

以下では、主要な遺構から出土した遺物について種別に概要を述べる。

(2) 土器類 (図24・25、図版25)

礎石建物1出土土器(1・2) 礎石建物の整地層から須恵器杯・蓋、丸瓦・平瓦、鉄釘などが出土した。

1は須恵器の杯B蓋で、受け身のかえりをもたないものである。天井部は欠損している。自然釉が外面と、縁端の突出部内面にまでかかる。口径17.6cm、残存高1.5cmである。胎土にやや砂粒を含み、黄灰色を呈する。2は須恵器の杯B蓋で、受け身のかえりをもたない。つまみは欠損しており、口縁端部は丸みをもって収まる。自然釉が口縁端の突出部内面にかかる。口径18.0cm、残存高1.3cmである。胎土は精良で、灰色を呈する。いずれも7世紀後葉頃のものと考えられる。

瓦溜り20出土土器(3～6) 土師器皿、須恵器杯・蓋・皿、灰釉陶器椀、瓦などが出土した。

3は須恵器の杯B蓋で、つまみは欠損している。口縁端部は丸く収まる。口縁部内面のかえり端部は丸く、口縁端部よりも上で収まる。胎土に砂粒を多量に含み、暗灰色を呈する。口径11.5cm、残存高1.9cmである。7世紀末葉頃のものと考えられる。4は須恵器の杯B蓋で、かえりをもたな

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
飛鳥時代後期 (白鳳期) ～奈良時代	土師器、須恵器、瓦器、 瓦類、金属製品		土師器2点、須恵器10点、軒丸瓦2 点、軒平瓦11点、丸瓦17点、平瓦54 点、隅切平瓦7点、鉄釘2点、鉄鏝 2点：計107点		
平安時代	灰釉陶器		灰釉陶器1点		
室町時代 ～江戸時代	土師器、瓦類		土師器15点、隅瓦1点、面戸瓦1点、 袖瓦1点：計18点		
合計		195箱	126点(12箱)	29箱	154箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より12箱多くなっている。

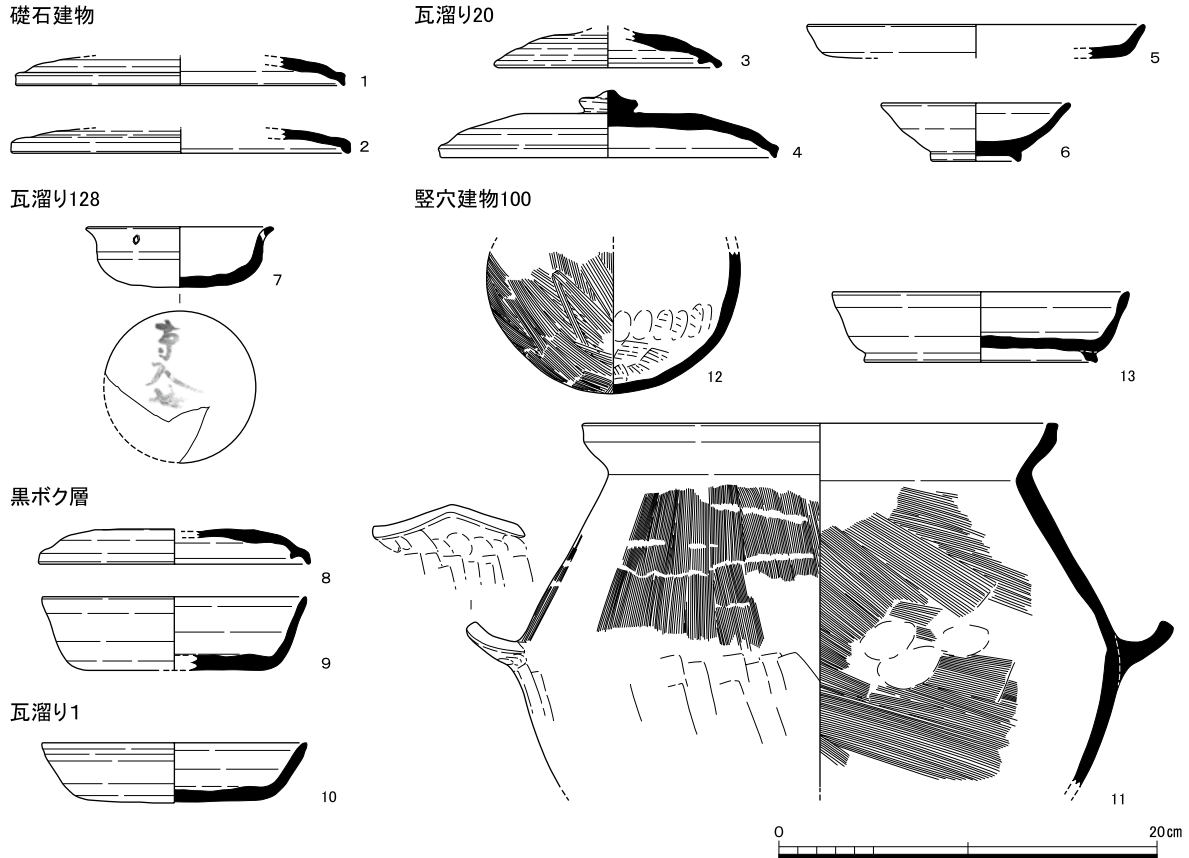


図24 土器類実測図（1：4）

い。天井部は高く、つまみは扁平な宝珠形で、全体的に丸味をもつ。天井部内面の中央に不正方向のナデを施す。自然釉が外面と縁端の突出部内面にまでかかる。口径17.6cm、器高3.6cmである。胎土は精良で、黄灰色を呈する。8世紀前半代のもと考えられる。5は須恵器皿である。口径17.8cm、残存高1.8cmである。口縁部は外側へ開きながら立ち上がり、口縁端部は丸味をもつ。全面に回転ナデを施している。胎土はやや粗く、灰色を呈する。

6は灰釉陶器碗である。底部糸切りで、断面三角形の高台を貼り付ける。胎土は精良で、浅黄色を呈する。口径9.8cm、器高3.1cm、高台径4.7cmである。10世紀代のものである。

瓦溜り128出土土器（7） 7は須恵器の杯である。底部外面に「寺入廿」の墨書がある。口縁部は外反し、底部はやや丸味をもつ平底である。体部内外面は回転ナデを施しており、底部外面にはヘラ切り痕が残っている。自然釉が外面の1/3のみかかる。口縁部には、直径0.35cmの小さな穴が上方から下方へ向けて2箇所空いている。その位置関係から計3箇所空いていた可能性が高い。口径9.8cm、器高3.2cmである。胎土に長石粒が多量含まれており、灰色を呈する。7世紀後半のものと考えられる。

黒ボク層出土土器（8・9） 土師器皿・甕、須恵器杯・蓋、丸瓦・平瓦などが出土した。

8は須恵器の杯B蓋で、つまみは欠損している。口縁部内面のかえりは、断面逆三角形をなして短く内傾する。外面は黄灰色、内面は青灰色を呈する。口径14.8cm、残存高1.9cmある。9は須恵器杯Aである。体部は、外側を開きながらほぼ直線的に立ち上がり口縁部に至る。口縁端部はやや

シャープに仕上げしており、底部内面の中央部がやや突出する。体部内外面及び底部内面は、回転ナデを施しており、底部外面は回転ヘラケズリの後にナデを施す。胎土は精良で、青灰色を呈する。口径13.9cm、器高3.9cm、底径9.5cmである。7世紀末葉頃のものと考えられる。

瓦溜り1出土土器 (10) 須恵器杯、軒瓦、丸瓦・平瓦などが多量出土した。

10は須恵器の杯Aである。形態や製作技法からみると、9と同様であるが、器壁がやや厚く、口縁端部は丸みをもつ。底部外面には、回転ヘラ切り痕が明瞭に残る。胎土は精良で、黄灰色を呈する。口径14.0cm、器高3.2cm、底径10.0cmである。7世紀末葉頃のものと考えられる。

豎穴建物100出土土器 (11～13) 土師器皿・甕、須恵器杯が出土した。11・13は土坑22から、12は土坑26から出土した。

11は把手が付く土師器甕で、体部下半部が欠損する。口縁部は外半部と上半部でやや屈曲し、口縁端部は面を持つ。口縁部は横ナデ、把手部はヘラ工具によるナデを施して仕上げる。体部外面は単位の細かいハケ目と縦方向のケズリ、内面は斜め方向のハケ目と指頭圧痕が残る。口径25.1cm、体部最大径37.4cm、器壁の厚さ0.7cmである。残存高19.3cmである。胎土は精良で、浅黄橙色を呈する。7世紀後葉頃のものと考えられる。12は土師器の小型甕で、丸味を帯びた胴体部のみ残存する。体部外面には単位の細かい縦ハケ、体部内面にはヘラ状工具による横ナデと指頭圧痕が顕著にみられる。体部から底部の外面には煤が付着する。体部最大径13.4cm、残存高7.5cm、器壁の厚さ0.4cmである。胎土は精良で、浅黄橙色を呈する。7世紀後葉頃のものと考えられる。

13は須恵器の杯Bである。口縁部が肥厚気味で、口縁端部は丸く収まる。高台の稜はやや丸味をもち、貼り付け高台である。底部外面に回転ヘラ切り痕が残り、その中央には重ね焼きの痕跡が残る。自然釉が体部外面の半分と、底部外面の一部のみかかる。口径15.5cm、器高3.7cm、高台径12.2cmである。胎土は精良で、灰色を呈する。7世紀後葉頃のものと考えられる。

土器溜り2・3出土土器 (図25 14～28) 土師器皿が計80点ほどまとまって出土した。14～23は口径7.4～8.1cm、器高1.5～1.7cmの小型皿である。24～28は口径9.5～10.5cm、器高1.8～2.1cmで、内面立ち上がり部の圏線が明瞭な大型である。そのうち、14～18・20～25は口縁端部に油煙が付着しており、灯明皿として使用されていたことがわかる。土師器皿は江戸時代後半に属する資料である。

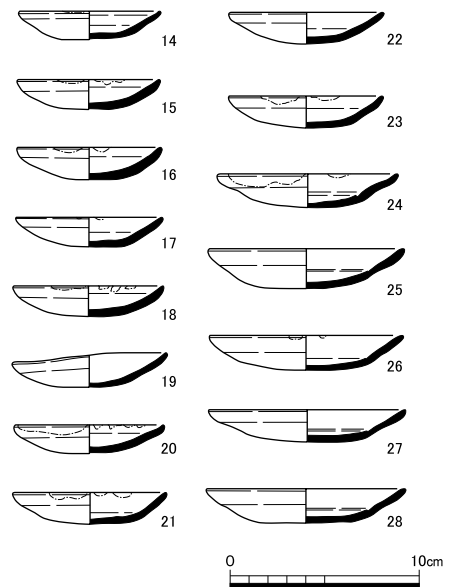


図25 土器溜り2・3出土土器類実測図
(1:4)

(3) 瓦 類

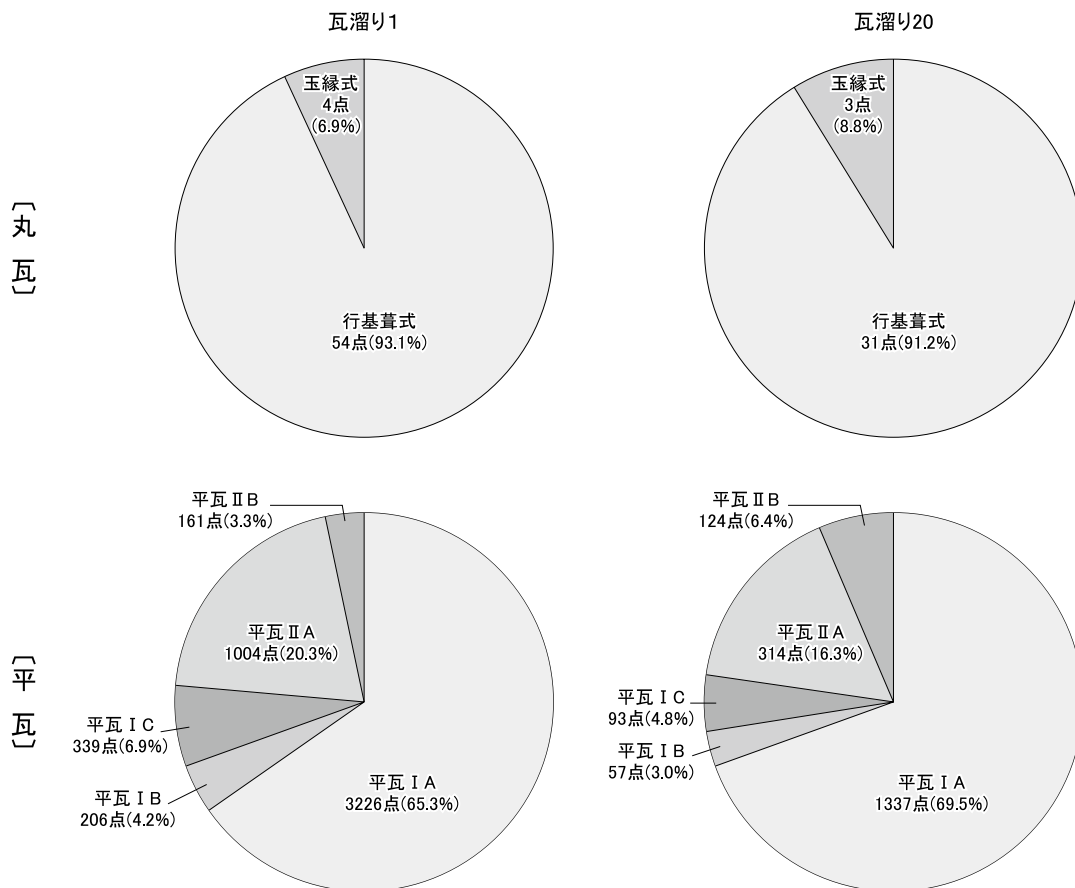
瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・隅切平瓦・隅瓦・面戸瓦・袖瓦・棧瓦などがある。出土した瓦の大半は飛鳥時代後期（白鳳期）から奈良時代の瓦で、丸瓦・平瓦が最も多い。ここでは、飛鳥時代後期（白鳳期）から奈良時代、室町時代から江戸時代に大別して報告する。

1) 飛鳥時代後期（白鳳期）から奈良時代（図版6～20・26～30、表3～8）

軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、隅切平瓦の順に述べる。軒丸瓦・軒平瓦の各型式については、「5.まとめ」の「(3) 出土遺物からみた周山廃寺 1) 軒瓦の型式設定」を参考されたい。

丸瓦・平瓦の数量統計及び分析には、1区の瓦溜り1・20から出土したものを中心に行った。出土した瓦の大半は飛鳥時代後期（白鳳期）から奈良時代の瓦であり、9割以上を占める。中でも1区の瓦溜り1・20から出土した平瓦が最も多く、破片数にして6,861点ある。瓦溜り1は、先述したように周山中学校の建設工事時の造成土ではあるが、出土瓦の組成が瓦溜り20と同様であるのがわかった。とりわけ、瓦溜り1と20から出土した丸瓦・平瓦の型式別数量を比較してみると（表3）、各々がほぼ同様の比率を示していることが認められるため、ここでは一括として扱うことにする¹⁾。丸瓦・平瓦類についての個別詳細については表7・8にまとめた。

表3 瓦溜り1・20出土丸瓦・平瓦の型式別数量比較表



① 軒丸瓦 (図版6・26)

これまで知られる軒丸瓦は、3型式4種である。いわゆる「川原寺式」の面違鋸歯文縁複弁八葉蓮華文のSzM21と、重圏文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦のSzM22・SzM23がある。今回の発掘調査で出土したのは、軒丸瓦SzM23の2点のみである。

SzM23 (瓦1・2) 瓦1は、瓦溜り1から出土したもので、瓦当下半部3分の1を残す。内区文様は素弁八葉蓮華文で、間弁をもたないシンプルな文様である。全体的に肉厚で、弁央を凹ませて両側に稜線が走る。高く突出する中房には1+5の蓮子を配する。中房径3.8cm、蓮子径0.8cmである。外区周縁は、太い二重圏文を巡らす。瓦当裏面は、不正方向のナデやケズリを施して平坦に仕上げている。瓦当部側面は、基本的に縦ケズリを施しているが、下半の瓦当側面は横方向にヘラで切り取って段を付ける。復原瓦当径約17.2～18.0cm、厚さ2.4cmである。やや軟質の焼成で、黄灰色を呈する。

瓦2は、黒ボク層から出土したものである。丸瓦部が欠損するだけで、瓦当面はほぼ完形で残存する。基本的に瓦1と同じ文様であるが、蓮弁先端と中房の輪郭が二重になり、蓮弁と中房の位置が若干ずれているため、筈ズレの可能性がある。中房径3.6cmあるが、蓮子とともにつぶれている。瓦当裏面の下半部は、不正方向にナデを施して平坦に仕上げる。丸瓦を接合する際に、丸瓦部の凹面には横方向に補強粘土を引き伸ばしている。瓦当部側面は、縦ケズリを施しており、斜めになっており、瓦1のようにヘラで切り取った段は付けてない。瓦当径16.8cm、厚さ2.2cmである。硬質の焼成で、灰色を呈する。

② 軒平瓦 (図版6～8・26)

軒平瓦は、計16点出土した。これまで知られる軒平瓦は3型式5種であるが、今回の発掘調査で初めて見つかった無文軒平瓦を加えると、計4型式6種となる。

SzH21 (瓦3) 瓦3は、瓦当面に文様のない無文軒平瓦である。2区瓦溜り128から1点出土した。瓦当面には横方向のケズリが施されているのみで、文様はないが、製作技法からみて軒平瓦の可能性が高い。顎部の形態は、直線顎である。瓦当側縁には縦方向に幅1.2cmほどケズリ落としている。平瓦部の凸面には格子叩き痕を残し、瓦当側に幅2cmほど横方向のナデを施す。平瓦部凹面には、布袋のシワと桶枠板痕の凹凸が残っているが、縦方向のナデを施して丁寧に消している。後述するSzH22と製作技法が共通するため、単に施文の工程を省略した可能性もある。

瓦当面の幅は2.4～3.2cm、平瓦部の厚さは2.1cmである。やや軟質の焼成で、灰色を呈する。

SzH22 (瓦4～6) 瓦当面に型引きによる重弧文を施文している。いずれも段顎で、顎面には正格子の叩き目が残る。

瓦4は、瓦当面に型引き三重弧文を施文している (SzH22B)。2区瓦溜り128から出土した。型引きが深くて比較的丁寧に作られており、各弧線の断面は深い台形を呈する。顎部に幅広い粘土板を貼り付け、格子目を叩き締めた後、顎部後方を横方向のナデを施して段顎に成形する。瓦当面の幅は3.4cmで、顎の幅は7.8cm前後である。平瓦部の凹面には、布目痕と桶枠板痕の凹凸が明瞭に残っており、瓦当側に横方向のナデが施されている。硬質の焼成で、灰色を呈する。

瓦5は、1区近世遺物包含層から出土した。瓦当面上半部は剥がれているが、顎面と顎部後方の一部が残存する。型引きの深さや各弧線の幅、製作技法の共通性から瓦4と同様の三重弧文軒平瓦(SzH22B)と考えられる。剥離面には、顎部に貼り付ける粘土板の凹面に残る糸切痕がみられる。顎の幅は7.0cmである。硬質の焼成で、灰色を呈する。

瓦6は、瓦当面に型引き四重弧文を施文している(SzH22C)。瓦溜り20から出土した。型引きが浅くて、各弧線の断面はV字状を呈する。顎部の成形技法はSzH22Bと同様であるが、顎の幅は4.0～4.7cmで、SzH22bより短い。顎部後方を横方向のナデを施して丁寧に段顎を作っている。瓦当面の幅は3.6～4.1cmであり、瓦当側面は、垂直にケズリ落としている。平瓦部の凹面には、布目痕と桶杵板痕の凹凸が明瞭に残っており、ワラのようなものの圧痕が残っている。硬質の焼成で、灰色を呈する。ほかに、瓦溜り1からも2点出土した。顎部が欠損しているものの、顎の残存幅、線の断面はV字状を呈することからSzH22Cと考えられる。

SzH23(瓦7～9) 均整忍冬唐草文で、計3点出土した。瓦7は黒ボク層、瓦8は現代盛土、瓦9は2区瓦溜り128から出土した。3点とも曲線顎で、同範関係にある。

中心飾りは半裁花文で、いわゆる杏葉唐草文は中心飾りから両側に5転する。唐草は各单位が離れ、主葉・支葉は強く巻き込む。上下外区には1本の界線を配するが、両端にはない。唐草が5転目以後続く部分で、瓦当側面が切り落とされている。

瓦7の瓦当面幅は中心部5.6cm、側面4.5cmで、両端へ行くほど幅が狭くなる。瓦8・9の瓦当面幅は、4.3～4.7cmで外区の界線のみ残しているが、上下とも横方向のケズリで切り落としてやや小ぶりに仕上げている。平瓦部凹面には、布目痕と桶杵板痕の凹凸が明瞭に残っているが、瓦当側に横方向のケズリを施している。凸面には、顎面とともに縄叩き目を施した後、縦方向のナデやケズリを施して消しているが、部分的に横位の縄叩き目を残す。いずれも硬質の焼成で、黄灰色を呈する。

SzH24(瓦10・11) 連珠文軒平瓦で、計2点出土した。瓦10は礎石建物の西側斜面の黒ボク層から、瓦11は礎石建物の整地層上面から出土した。2点は同範関係である。

瓦10は、瓦当と平瓦部の両側面が残っており、ほぼ完形品である。直径2cmの大粒の珠文を17個並べているが、両端の珠文は半分切り落とされている。上下外区には、二重の太い界線を配するが、両端は切り落とされており、確認できない。

平瓦部凹面には、布目痕と桶杵板痕の凹凸が残っているが、4cm程の粘土紐を巻き上げた痕跡が残る。両側縁には縦方向のケズリ、瓦当側には横方向のケズリを施している。平瓦部凸面には、縦位の縄叩き目が全面的に施されているが、瓦当側から12cm離れたところで幅2cmほど帯状に指オサエ痕が残る。粘土板を貼り付けて顎部を作る際の痕跡と思われる。瓦当面の幅は4.7～5.1cm、平瓦部の厚さは2.2cmである。硬質の焼成で、灰色を呈する。

瓦11は、連珠文の右端2個が半分ずつ破損した状態で残る。瓦10の連珠文を左から番号1を付けると、16・17個目に当たる。外区は、下方のみ二重の太い界線を配する。上方の界線は切り落として、瓦当面幅4.0cmでやや小ぶりに仕上げている。平瓦部凸面には、顎面とともに縦方向のケズ

りやナデを全面的に施し、縄叩き目は残っていない。硬質の焼成で、灰色を呈する。

他に、瓦12は現代盛土から、瓦13は礎石建物の整地層上面から出土した。いずれも平瓦部凹面には、布目痕と桶杵板痕の凹凸、3.5cm位の粘土紐を巻き上げた痕跡が残る。凸面には、顎面とともに縄叩き目を施した後、縦方向のケズリを施して消しているが、部分的に横位の縄叩き目を残す。粘土板を貼り付けて顎部を作る際に、横方向のナデや指オサエで調整した痕跡が残る。いずれも硬質の焼成で、黄灰色を呈する。瓦当面が欠損しているものの、厚さや製作技法からSzH24と類似する。

③ 丸瓦（図版9～12・27、表3・7）

丸瓦には、行基葺式と玉縁式があり、破片数にして計2,459点である。玉縁式は、計7点出土した。厚さは1.3～2.0cmの薄手のものと、2.1cm以上の厚手のものがある。薄手は92.7%、厚手は7.3%を占める。布綴じ合わせ痕が残るもの（瓦17・18・20・21・24）は、201点で全体の8.2%である。ほとんど粘土板を巻き付けたもので、内面に粘土板の合わせ目をもつもの（瓦21）は、118点で全体の4.8%である。粘土紐を巻き上げた痕跡をもつもの（瓦14）は極少量である。側縁に平行する溝状の分割載線（分割突帯の圧痕）を残すものは104点で全体の4.2%である。分割突起及び分割破面を残るものは確認していない。色調は灰色を呈するもの（瓦17～21）が64.0%で主体とし、そのうち瓦20・21の焼成は非常に硬質で、狭端面や側面、凹凸面の一部に自然釉がかかっており、瓦20の凹凸面には他の瓦との溶着痕が残存する。その次に赤褐色（瓦22・23）が14.8%を占め、軟質焼成で灰白色・黄橙色・黄褐色（瓦24～26）のものは21.2%である。

I類（行基式）（瓦14～26） 行基葺式は、全長30.4～41.5cmある。凸面には後述するI類の平瓦と同様の格子叩きが施されていると考えられるが、縦方向のナデを丁寧に施しているため、ほとんど残っていない。わずかではあるが、縄叩き目が残るもの（瓦19・26）、布目圧痕を残すものがある。

凹面は、基本的に未調整であるため、布目圧痕は明瞭で細かく残っている。布綴じ合わせ痕または粘土板の合わせ目を指でナデ消しているもの（瓦19）も少量出土する。粘土紐を巻き上げた痕跡をもつもの（瓦14）は極少量である。木葉圧痕が残るもの（瓦26）もあるが、布袋の外側に枯れた木葉が付され、その上に粘土板を巻き付けてできた痕跡である。

側縁は、凹凸両面側にケズリ調整を施すものが多く、凹面のみケズリ調整するものはこれに次ぐ。また、狭端面は、未調整のものが多く、凹面のみわずかにケズリ調整するものがこれに次ぐ。広端面は、凸面のみケズリ調整するものが多く、ほかに未調整及び凹凸両面側にケズリ調整を施すもの（瓦24・25）は少量ある。

なお、瓦18は広端部凹面に補強粘土の剥がれ痕が残っており、色調・胎土・製作技法からSzM23と組み合わせるものと考えられる。

II類（玉縁式）（瓦27～30） 瓦27～30は、玉縁式丸瓦である。瓦溜り1から4点、瓦溜り20から3点、計7点出土した。玉縁部がわずかに残っているのみで、全長や玉縁部の形態がわかるものは出土しなかった。いずれも粘土板巻き付けによって製作したものである。

丸瓦部の凸面には、縄叩きを施した後、縦及び横方向にナデ調整して消しており、丁寧に仕上げている。瓦27には縄叩き目がかろうじて残っているが、他にはすべてナデ消している。凹面にはいずれも細かい布目痕が残る。厚さは1.5～2.0cmある。

玉縁部の凸面には、横方向のナデを丁寧に施しており、凹面には丸瓦部凹面の布目痕とつながっている。肩部凹面の屈曲はいずれも緩やかで、肩部凸面の段差は1.5～1.7cmでほぼ一定である。玉縁部狭端面が残る瓦28をみると、玉縁部の長さは6.3cm、厚さは1.5cmである。

瓦29はやや軟質の焼成で、黄褐色を呈する。他には全て軟質の焼成で、灰色及び灰白色を呈する。

④ 平瓦（図版13～18・28～30、表3～6・8）

出土した平瓦は、破片数にして計6861点ある。凸面に残されている叩き目の種類によって、大きく格子叩き目（Ⅰ）と縄叩き目（Ⅱ）の2類型に分類できる。いずれも粘土板を巻き付けた桶巻作りによる製品であり、凹面に杵板圧痕が明瞭に残る。

平瓦Ⅰ類（瓦31～44） 凸面に格子叩き目が残るもので、計5,258点で全体の76.6%を占める。格子叩き目の一辺の長さによって3つに分けられる。叩き締め重複があるため、同一原体の復原及び識別には至らなかったが、格子叩き目の一辺が0.6～0.7cmのものをⅠA類（瓦31～37）、0.8～1.0cmのものをⅠB類（瓦38～41）、1.1～1.3cmのものをⅠC類（瓦42～44）と分類できる。平瓦の出土数量からみると、ⅠA類が66.5%で最も多く、ⅠB類が3.8%、ⅠC類が6.3%を占める²⁾。

平瓦の大きさは、全長は38.0～41.0cmで、厚さ1.3～2.8cmと多様である。凸面には、上記の格子叩き目が全面に施されており、「叩きしめの円弧」³⁾が観察できる。部分的に指オサエ及びナデ調整、叩き板によるナデやハケ目を施す場合がみられる。

凹面は、基本的に未調整であるため、布目圧痕は明瞭で細かく残っている。布綴じ合わせ痕が残るもの（瓦31～35）は、213点で全体の4.05%である。粘土板の合わせ目が残るもの（瓦37）は、106点で全体の2.01%である。ほとんど破片であるため、広端・狭端の方向がわかる資料は少なく、S型及びZ型⁴⁾の判別までは至らなかった。凹面にはこれらの布綴じ合わせ痕や粘土板の合わせ目を消すため、部分的に縦方向にナデ調整している場合もある。ほかに、凹面の広端面側には、何らか

の道具当り痕（瓦33）や、格子叩き目（瓦41）が残るもの、縦方向にナデ調整するもの（瓦43）も少量確認される。「十」字状のヘラ書きも確認される（瓦44）。

側縁は、凸面のみケズリ調整するものが多く、凹凸両面側を丁寧にケズリ調整するものもある。また、側縁の凹面に平行する溝状の分割載線（分割突帯の圧痕）を残すものがあるが、これを目安に粘土円筒の分割を行う。すべて1枚の杵板の中央に位置しており、計68点で全体の1.3%ある。分割突起及

表4 平瓦型式別数量比較表

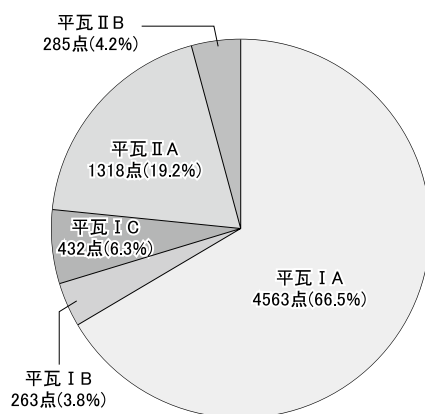
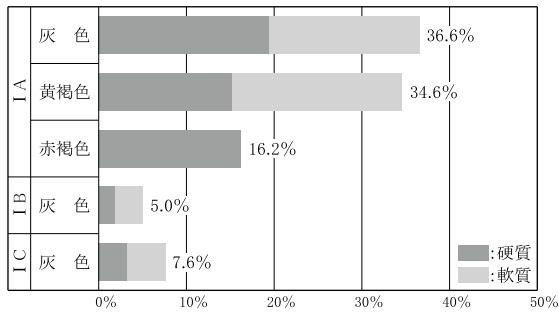
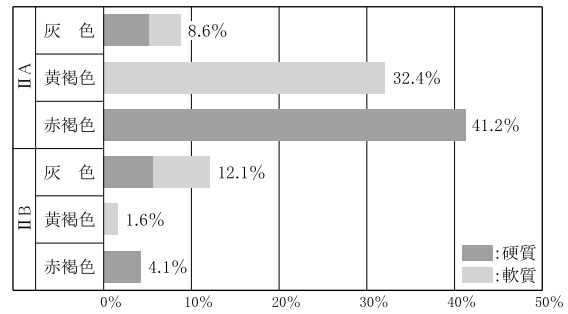


表5 平瓦Ⅰ類数量比較表



	色調	硬質	軟質	合計
IA	灰色	1,018点 (19.4%)	906点 (17.2%)	1,924点 (36.6%)
	黄褐色	803点 (15.2%)	1,018点 (19.4%)	1,821点 (34.6%)
	赤褐色	850点 (16.2%)	0点 (0.0%)	850点 (16.2%)
IB	灰色	94点 (1.8%)	169点 (3.2%)	263点 (5.0%)
IC	灰色	169点 (3.2%)	231点 (4.4%)	400点 (7.6%)
	合計	2,934点 (55.8%)	2,324点 (44.2%)	5,258点 (100.0%)

表6 平瓦Ⅱ類数量比較表



	色調	硬質	軟質	合計
IIA	灰色	81点 (5.1%)	56点 (3.5%)	137点 (8.6%)
	黄褐色	0点 (0.0%)	520点 (32.4%)	520点 (32.4%)
	赤褐色	661点 (41.2%)	0点 (0.0%)	661点 (41.2%)
IIB	灰色	90点 (5.6%)	104点 (6.5%)	194点 (12.1%)
	黄褐色	0点 (0.0%)	25点 (1.6%)	25点 (1.6%)
	赤褐色	66点 (4.1%)	0点 (0.0%)	66点 (4.1%)
	合計	898点 (56.0%)	705点 (44.0%)	1,603点 (100.0%)

び分割破面が残るものは確認されていない。

端面は、未調整あるいは凹面のみケズリ調整するものがほとんどであるが、凹凸両面側をわずかにケズリ調整するものもある。

胎土には砂粒も混入しているが、比較的緻密である。色調や焼成状態からみると、表5のとおりである。ⅠA類には、灰色を呈するものが36.6%で最も多く、黄褐色が34.6%でこれに次ぐ。赤褐色は、いわゆるセピア色に焼成したもので、16.2%を占める。ⅠB・ⅠC類は、すべて灰色を呈するものであり、各々5.0%・7.6%を占める。

平瓦Ⅱ類（瓦45～57）凸面に縄叩き目が残るもので、計1,603点で全体の23.4%を占める。一辺5cm正方形の中に、縄の条数が9条～12条以下のものをⅡA類（瓦45～51）、13条以上～22条以下のものをⅡB類（瓦52～57）と分類できる。平瓦の出土量からみると、ⅡA類は1,318点で19.2%、ⅡB類は285点で4.2%を占める。

全長は39.0cm前後で、厚さは1.7～2.8cmである。凸面には、縄叩き目が全面に施されているが、ⅡA類は「叩きしめの円弧」が観察できる一方、ⅡB類は側縁にほぼ平行して縄叩き目が密に施されている傾向が確認される。凸面に何等かの道具当り痕が残るもの（瓦49）、部分的に指オサエ及びナデ調整するものがみられるが少量である。

凹面は、基本的に未調整であるため、布目圧痕は明瞭で細かく残っている。部分的に縦方向にナデ調整している場合もあるが、極少量である。布綴じ合わせ痕が残るもの（瓦45・49・51）は、70点で全体の4.36%である。粘土板の合わせ目が残るもの（瓦47・48）は、47点で全体の2.93%である。ほとんど破片であるため、広端・狭端の方向がわかる資料は少なく、S型及びZ型の判別までは至らなかった。

側縁は、凹凸両面側をわずかにケズリ調整するものが多い。また、側縁の凹面には、側縁に平行する溝状の分割載線（分割突帯の圧痕）を残すもの（瓦48・50・51・56）があるが、計79点で全

体の4.9%ある。分割突起及び分割破面を残るものは確認されていない。端面は、未調整あるいは凹面のみケズリ調整するものが最も多い。

胎土には平瓦Ⅰ類と同様に砂粒も混入しているが、比較的緻密である。色調や焼成状態からみると、表6のとおりである。ⅡA類には、いわゆるセピア色に焼成した赤褐色を呈するものが41.3%で最も多く、すべて硬質焼成である。次に黄褐色の軟質焼成が32.1%、灰色が8.7%を占める。ⅡB類には、灰色を呈するものが12.1%で最も多く、赤褐色が4.2%⁵⁾、黄褐色が1.6%を占める。

広端面に叩き目（瓦58～68） 広端面に格子叩き目を施したもので、計167点出土した。平瓦Ⅱ類には全く見当たらない。凸面に施されている格子叩き目より細かい格子目が、広端面及び広端部凸面の近くに叩き締められている。凹面に凸面と同様の格子叩き目が残るもの（瓦58・59・64）もある。これらは「補正の叩きしめ⁶⁾」と考えられる。つまり、叩き締め調整が終わった粘土円筒を桶から外した後、狭端部を上にしてしばらく乾燥する。狭端部から次第に乾き、広端部が歪み潰れてしまうので、天地返しして広端部を乾燥させる。その際、広端の曲率を正すために、内面に叩き板及び当て具などを当て補正の叩きしめを行う。また、瓦58の広端面の補正叩きしめが側面の分割によって若干潰れており、凹面に残る桶の枠板痕に2次工程の痕跡が認められない。このことから考えると、粘土円筒を分割した後に補正の叩きしめが行われたのではなく、粘土円筒の状態で行われたことがわかる。

重複叩き目（瓦69～84） 平瓦の凸面に2種類以上の叩き目が施されているもので、計21点出土した。凸面には、格子叩き目か縄叩き目の1種類が施されているものがほとんどであるが、2種類以上の叩き目が重複して施されている。瓦69・70は平瓦ⅠA・ⅠBの格子叩き目、瓦71は平瓦ⅠAの叩き目の上に一辺0.2cmの極小のものが施されている。瓦72は、平瓦ⅠA・ⅠBの格子叩き目と一辺0.2cmの極小のもので、3種類の格子叩き目が施されている。瓦73～77は、平瓦ⅡB類の縄叩き目の上に、平瓦ⅠAの格子叩き目が施されている。瓦78～80は、平瓦ⅠAの叩き目の上に、平行叩き目が施されている。瓦81～84は、平瓦ⅡA類の縄叩き目の上に、平行叩き目が施されている。本来の叩き目とは異なる方向から重複叩きを行っており、凹面に何等かの道具当り痕がみられる（瓦79）ことから、広端面に叩き締めを行うことと同様に、補正のための叩きしめと判断される。

⑤ 隅切平瓦（図版20・30）

瓦85～91は、隅切平瓦である。計7点出土した。広端部の隅を端面に対しておおよそ25～30度の角度で、焼成前に切り落としている。切り落とした部分の凹面には比較的丁寧なヘラケズリを施す。凸面の叩き目は、ⅠA（瓦85）・ⅠB（瓦86）・ⅠC（瓦87～91）が叩き締められている。瓦90の厚さは2.7cmで厚いが、ほとんど2.0cm前後である。瓦91は軟質焼成で、灰色を呈するが、それ以外は全て硬質焼成で、灰色を呈する。瓦85・88は瓦溜り20、瓦86・87・89・90は瓦溜り1、瓦91は瓦溜り128から出土した。

2) 室町時代から江戸時代（図26）

瓦92～95は、2区の近世層から出土した。瓦92は、隅瓦の一部で、ヘラで「□殿助」と記され

ている。三角形に仕上げるが、一縁には接合用のカキヤブリ痕跡が残る。全面が丁寧にナデを施し、黒色に燻される。江戸時代のものである。

瓦93は、面戸瓦で完形である。凸面は丁寧にナデ消されている。凹面は両脇側縁とも面取りしており、上下側縁は曲線的に面取りをして仕上げる。硬質の焼成で、灰色を呈する。室町時代のものであると思われる。

瓦94は、袖瓦の一部である。平板状の瓦に接合用のカキヤブリ痕跡があり、そこに棧を付け

る。直径0.8cmの釘孔が1箇所残る。全面が丁寧にナデを施し、黒色に燻される。江戸時代のものである。

瓦95は、棧瓦で、平瓦部は破損している。3区の近代旧表土の直下で近世層（図版5 - 3層）から1点出土した。全面は二次焼成により灰黄褐色を呈し、やや軟質である。

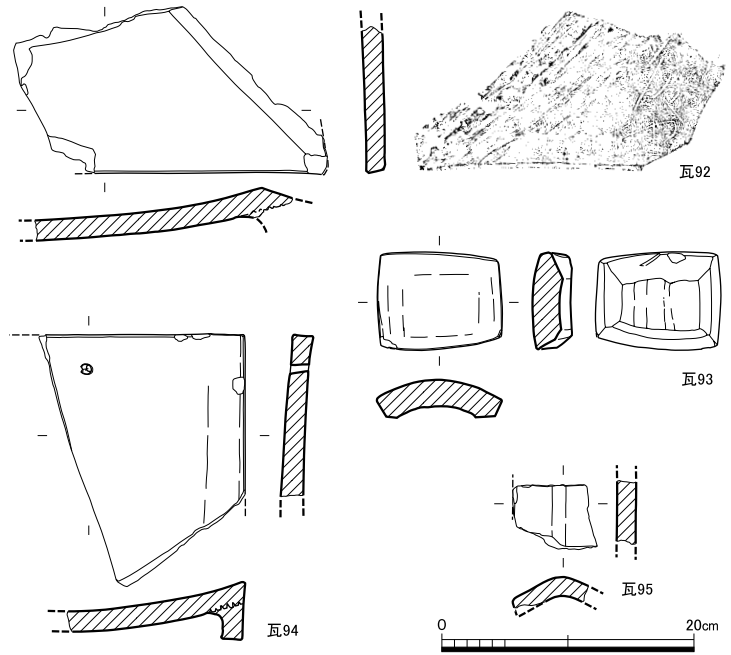


図26 室町時代から江戸時代の瓦類拓影及び実測図（1：6）

表7 丸瓦の観察表

掲載図面	番号	種類	全長 (cm)	厚さ (cm)	高さ (cm)	色調	焼成	胎土	出土遺構
図版9	瓦14	丸瓦 (行基式)	30.4	1.3	8.6	N6/0 灰色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦15		25.4~	2.0	8.2	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
	瓦16		29.0~	1.6	7.6	5Y6/1 灰色	硬質	やや粗い(φ4mm以下の長石・石英・チャート、φ10mm礫含む)	瓦溜り1
図版10	瓦17		22.4~	2.4	8.3	5Y6/1 灰色	軟質	密(φ5mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子含む)	瓦溜り1
	瓦18		35.9	1.6	8.2	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦19		41.5	1.3	7.6	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ6mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
図版11	瓦20		30.8~	2.2	9.2	N6/0 灰色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦21		23.1~	2.0	7.3	N6/0 灰色	硬質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦22		33.5~	1.7	7.6	5YR5/3 にぶい赤褐色	硬質	やや粗い(φ2mm以下の長石・石英・チャート、φ8mm礫含む)	瓦溜り20
	瓦23		41.1	1.5	7.5	5YR5/4 にぶい赤褐色	硬質	やや粗い(φ3mm以下の長石・石英・チャート、φ15mm礫含む)	瓦溜り20
図版12	瓦24	丸瓦 (玉縁式)	32.6~	1.7	8.0	10YR7/3 にぶい黄橙色	軟質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦25		22.7~	1.3	8.0	10YR7/3 にぶい黄橙色	軟質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
	瓦26		23.0~	2.1	9.6	5Y7/1 灰白色	硬質	やや粗い(φ3mm以下の長石・石英・チャート、φ8mm礫含む)	瓦溜り1
	瓦27		12.3~	1.8	—	2.5Y7/2 灰黄色	軟質	密(φ1mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦28		12.9~	1.5	—	2.5Y7/1 灰白色	軟質	密(φ1mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
瓦29	12.3~		2.1	—	5Y7/1 灰白色	軟質	やや粗い(φ2mm以下の長石・石英・チャート、φ8mm礫含む)	瓦溜り20	
瓦30	9.4~		1.5	—	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ1mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1	

表8 平瓦の観察表

掲載 図面	番号	種類	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	色調	焼成	胎土	出土遺構
図版13	瓦31	平瓦 I A	24.5	33.6	2.1	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ5mm以下の長石・石英・チャート・礫含む)	瓦溜り20
	瓦32		24.8	18.6	2.3	5Y6/1 灰色	軟質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦33		29.1	18.0	2.0	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
	瓦34		33.6	19.5	1.9	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦35		12.2	16.7	2.0	5Y6/1 灰色	やや硬質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
図版14	瓦36	平瓦 I B	26.8	22.3	2.0	2.5Y5/8 明赤褐色	硬質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
	瓦37		22.2	12.1	2.1	7.5YR6/3 にぶい赤褐色	硬質	やや粗い(φ2mm以下の長石・石英・チャート、φ10mm礫少量含む)	瓦溜り1
	瓦38		25.9	27.0	2.4	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦39		25.5	27.8	1.8	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ5mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
	瓦40		9.3	14.3	1.7	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
図版15	瓦41	平瓦 I C	10.7	10.2	1.4	N6/0 灰色	硬質	密(φ1mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
	瓦42		41.0	35.0	2.8	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ5mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦43		41.0	30.0	1.9	N6/0 灰色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
図版16	瓦44	平瓦 II A	24.0	17.0	2.5	N6/0 灰色	軟質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子含む)	瓦溜り1
	瓦45		19.7	19.8	2.2	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦46		21.4	10.3	2.0	10YR7/3 にぶい黄褐色	やや硬質	密(φ6mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子含む)	瓦溜り20
	瓦47		19.1	19.0	2.2	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦48		13.2	10.6	1.7	5YR5/3 にぶい赤褐色	硬質	やや粗い(φ3mm以下の長石・石英・チャート、φ7mm礫含む)	瓦溜り20
	瓦49		15.4	18.5	2.6	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦50		21.0	16.8	1.9	2.5YR5/4 にぶい赤褐色	硬質	やや粗い(φ8mm以下の長石・石英・チャート、φ10mm礫含む)	瓦溜り1
図版17	瓦51	平瓦 II B	32.0	31.8	1.7	2.5YR5/4 にぶい赤褐色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート、φ6mm礫含む)	瓦溜り1
	瓦52		39.0	30.0	1.9	N6/0 灰色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦53		16.6	30.0	1.6	2.5Y7/1 灰白色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子含む)	瓦溜り1
	瓦54		16.0	12.3	1.9	N6/0 灰色	硬質	密(φ1mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦55		15.6	14.0	1.9	5Y6/1 灰色	硬質	やや粗い(φ3mm以下の長石・石英・チャート、φ10mm礫含む)	瓦溜り1
	瓦56		10.9	15.0	2.1	5YR5/3 にぶい赤褐色	硬質	密(φ1mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
図版18	瓦57	平瓦 (広端面 叩き目)	9.3	14.7	1.6	10YR5/3 黄褐色	硬質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦58		18.2	18.0	2.1	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦59		14.5	13.7	2.7	5Y6/1 灰色	軟質	密(φ1mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦60		11.5	14.1	2.5	5Y6/1 灰色	軟質	密(φ2mm以下の長石・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦61		11.7	9.6	2.6	2.5T5/2 暗灰黄色	硬質	やや粗い(φ5mm以下の長石・チャート、φ9mm礫含む)	瓦溜り1
	瓦62		10.6	11.5	2.6	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ1.5mm以下の長石・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦63		19.7	11.5	2.4	10YR7/3 にぶい黄褐色	軟質	密(φ1.5mm以下の長石・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦64		8.8	11.3	2.8	N5/0 灰色	硬質	やや粗い(φ6mm以下の長石・チャート、φ14mm礫含む)	瓦溜り20
	瓦65		21.5	15.5	1.9	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦66		23.8	19.2	1.8	10YR6/3 にぶい黄褐色	硬質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
	瓦67		9.8	13.2	2.4	5Y6/1 灰色	軟質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
	瓦68		26.3	21.5	2.8	5Y6/1 灰色	軟質	密(φ4mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
図版19	瓦69	平瓦 (重複叩き)	8.7	13.7	1.7	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦70		11.2	13.5	1.7	5Y7/1 灰白色	軟質	密(φ1mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦71		13.3	19.1	1.8	5YR5/4 にぶい赤褐色	硬質	密(φ4mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦72		16.7	8.9	2.4	N6/0 灰色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦73		9.4	8.5	1.6	2.5Y7/2 灰黄色	硬質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦74		11.2	11.2	1.9	N6/0 灰色	硬質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
	瓦75		8.0	13.9	1.9	N6/0 灰色	硬質	密(φ1mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
	瓦76		12.2	9.7	2.0	N6/0 灰色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子含む)	瓦溜り20
	瓦77		11.2	11.6	1.7	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ1mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
	瓦78		14.2	9.3	1.8	N6/0 灰色	硬質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦79		29.0	31.5	1.9	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ4mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子含む)	瓦溜り20
図版20	瓦80	隅切平瓦	14.0	26.0	2.1	5Y6/1 灰色	硬質	やや粗い(φ2mm以下の長石・石英・チャート、φ10mm礫含む)	瓦溜り20
	瓦81		17.5	8.8	1.9	5YR5/3 にぶい赤褐色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子含む)	瓦溜り20
	瓦82		8.7	13.4	1.3	10YR7/3 にぶい黄褐色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
	瓦83		14.5	14.4	1.7	10YR7/3 にぶい黄褐色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート、φ8mm礫含む)	瓦溜り1
	瓦84		13.2	9.2	1.9	5Y6/1 灰色	硬質	やや粗い(φ3mm以下の長石・石英・チャート、φ15mm礫含む)	瓦溜り20
	瓦85		17.4	12.5	1.9	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
	瓦86		10.9	5.5	2.1	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦87		11.6	12.0	2.0	N6/0 灰色	硬質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦88		9.5	9.0	2.0	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ2mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り20
	瓦89		14.18	11.8	2.2	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
	瓦90		15.0	13.7	2.7	5Y6/1 灰色	硬質	密(φ6mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り1
瓦91	9.7	8.5	2.0	5Y6/1 灰色	軟質	密(φ3mm以下の長石・石英・チャート含む)	瓦溜り128		

(4) 金属製品 (図27)

金属製品には、鉄製の鉄釘と鏝があり、完形品はない。

金1・2は鉄釘である。いずれも断面方形を呈する。金1の両先端部は欠損する。残存長さ19.5cm、幅0.7cm、重量58.0gである。瓦溜り1から出土した。

金2は頭部が欠損する。残存長さ15.0cmで、幅0.6cm、重量は24.5gである。排水溝上層の黒ボクから出土した。

金3・4は鉄鏝である。いずれも片方の先端が欠損する。金3は断面方形を呈し、残存長さ13.0cm、幅0.6cm、重量21.9gである。排水溝上層の黒ボクから出土した。

金4は長方形を呈し、残存長さ6.9cm、幅0.4～0.7cm、重量13.0gである。礎石建物の整地層上面から出土した。

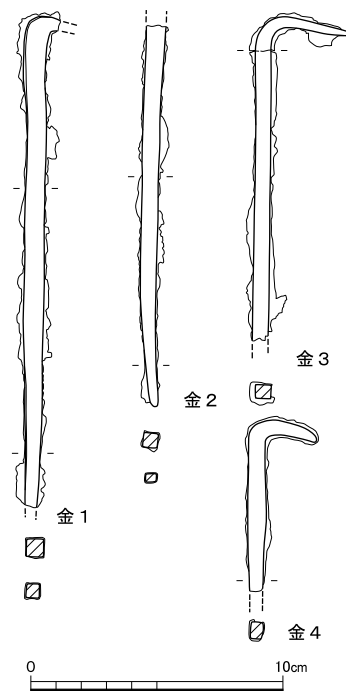


図27 金属製品実測図 (1 : 3)

註

- 1) 丸瓦を種類別に分類・数量統計する時に、狭端部から10cm以上残っているもののみ抽出して、行基葺式と玉縁式に分けた。ただ玉縁式瓦のなかには、狭端部から10cm以内の小片も含まれているものの、形態から明らかに玉縁部であることがわかる場合、玉縁式としたことを断っておく。
- 2) 一辺が0.2cmの極小のものや、平行叩き目もあるが、出土量が極少量である。後述するが、凸面に重複叩きを行ったものにみられるものであり、統計の対象からは除外した。また、長方形の格子叩き目は少量出土したが、I Aにはなく、I BまたはI Cに属する。叩き締め強度や焼成の程度などによる歪みと判断して、長辺の長さでI BまたはI Cに分類した。
- 3) 佐原 真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号 日本考古学会 1972年
- 4) 前掲註3)
- 5) II B類に赤褐色が含まれていることについて、赤褐色を呈するII A類の一部が混入された可能性がある。または赤褐色を呈するII A類のなかで、部分的に細い縄目をもつ破片の一部である可能性があることを京都府立大学の菱田哲郎教授、近畿大学の網 伸也教授からご教示いただいた。
- 6) 大脇 潔「7世紀の瓦生産－花組・星組から荒坂組まで－」『古代』第141号 早稲田大学考古学会 2018年

5. まとめ

(1) 調査成果

1) 西堂跡の再検出と排水溝

周山廃寺は、1947・1949年に石田茂作氏によって初めて発掘調査されて以来、その特異な立地や伽藍配置が注目されてきた。当時の調査では、北から南へ延びる丘陵裾部で東堂跡・塔跡・中堂跡を、さらに西の1段高いところで西堂跡が確認された。このうち東堂跡・塔跡・中堂跡は京都府指定史跡として保存整備されてきたが、西堂跡は当時の周山中学校建設工事によって失われたと考えられていた。

ところが、今回の発掘調査により、1949年の発掘で見つかった西堂跡に伴う6基の礎石と抜取穴1箇所を再検出し、さらに抜取穴1箇所を新たに検出することができた。石田氏が提示した西堂跡の図面(図14)を見ると、東・南へさらに延びる大型建物と想定していたと推定される。しかし、今回の発掘調査で東へ延びる礎石や礎石の抜取穴は検出されなかった。さらに素掘りの排水溝が現行の礎石を廻り込むようにコの字形にめぐらされていることが明らかとなり、西堂跡が東へ延びないことがわかった。一方、南側については後世に失われ崖になっていたが、地形からみて平坦面が大きく延びるとは考えにくい状況である。したがって、西堂は東西4.2m×南北3.6m以上、梁行2間×桁行2間以上の小型の総柱礎石建物であることが明らかとなった。基壇築成に伴う積土の高まりはなく、凹凸のある基盤層の上面を埋め立てるように平坦に整地した後、その上から礎石を掘り込んで据えていることが判明した。

石田氏は、周囲の西辺には南北方向に規則正しく平瓦と丸瓦の破片が並べられていると報告している。西堂跡の周囲にはこれ以外に瓦がほとんど見られないことから、人為的に廃瓦を敷設した排水施設と判断している。またその北側には小石敷が、さらにその斜面には栗石による土留遺構あるいは石階の名残と思われる石列を検出したと報告している。しかし、今回の発掘調査により、瓦や小石を人為的に敷設した痕跡は認められず、土層観察の結果、北西斜面から流れ落ちた瓦と、砂質の礫からなる基盤層であることが判明した。

2) 3つの平坦面と北西堂

今回の発掘調査によって、新たに3つの平坦面が見つかり、土地の造成方法と伽藍配置の一端が明らかとなった。平坦面は北西から南東へ下がる丘陵裾部を階段状に掘削することによって造成されたものである。北から順に平坦面1・2・3とすると、平坦面1は、地形の下りに対して直交する方向に掘削して造成している一方、平坦面2・3は、南北方向に意識していることがわかった。これら平坦面の掘形の西辺がほぼ南北一直線で揃っていることに注目すると、ここが寺域西限となる可能性が高い。その外郭となる施設は確認できなかったものの、平坦面2で検出した逆L字形の塀の西辺がこのラインに合わせて建てられており、寺域を意識したとも言える。

また、平坦面2では飛鳥時代後期(白鳳期)から奈良時代の瓦を多量に含む瓦溜り20を検出し

た。その出土状況からすると、これらの瓦は西堂に伴うものではなく、その北側の平坦面1から流れ落ちたものであると推測される。平坦面1の標高は、西堂のある平坦面3より2.2mほど高く、広さも南北8～15m、東西20m以上ある。こうした状況からすると、西堂跡の北側、平坦面1にもう一つの瓦葺建物が存在した可能性が高い。ここでは相対的な位置関係から仮に「北西堂」とする。

3) 工房遺跡との関連

今回の発掘調査では、1区南西部の斜面で竪穴建物を1基検出した。北西から南東へ下がる地山の斜面を平坦に掘り込んだため、北西部のみ掘形の段差があり、地山の上面をそのまま床として利用しているのが特徴である。竈の痕跡と考えられる土坑22・26から焼土や木炭粒が検出されたが、その中から7世紀後半代の土師器の把手付き甕と小型甕が出土した。

この辺りは高梨遺跡として知られており、2001年度に京都府京北町教委員会により現在の周山中学校のグラウンド造成に伴って発掘調査が行われた¹⁾。それによると、高梨遺跡では計7基の竪穴建物が検出されたが、東から西へ下がる斜面に立地しているため、東側のみ掘形の段差がある。そのうち2基から焼土・鍛冶滓や鉄製品が木炭とともに発見され、周山廃寺に関連した鍛冶が行われていたと推定された²⁾。

このように過去の調査成果をふまえて考えると、これらの竪穴建物が寺域西限外側の丘陵斜面に立地していること、鍛冶滓や鉄製品が出土していることなど、居住施設としての竪穴建物とは相違することから、周山廃寺の造寺に関わる工房跡の可能性が高いと考えられる。寺院に伴う工房施設の場合、寺院の創建とほぼ同時期に成立して運営され、寺院廃絶とともにその機能も衰えて終焉を迎えると考えられている。しかしながら、高梨遺跡出土遺物の場合、層位的な検証はできておらず、その成立や廃絶時期、性格などについては、さらなる検討を要する。

4) 造営時期と廃絶時期

周山廃寺に関する文献史料は皆無と言えるのが現状であり、周山廃寺の正確な寺名、沿革については不明である。石田氏は、周山廃寺の造営時期を出土瓦の様式より白鳳期に比定した。廃絶時期については、平安時代前期に比定できる緑釉陶器皿と六器台が、東堂跡や塔跡から出土していることから、この頃までは寺院が存続していたと考えた。

1981・1982年には、周山廃寺の創建瓦を供給した周山瓦窯跡が発掘調査され³⁾、出土した須恵器から瓦の製作時期がより詳細にわかるようになった。それによると、周山瓦窯跡の操業時期は7世紀第4四半期から8世紀第2四半期までと考えられている。今回の発掘調査から出土した須恵器は少量ではあるものの、その形態や法量からも同様の様相が認められる。廃絶時期を示す資料は乏しいが、瓦溜り20から出土した灰釉陶器椀に注目すると、10世紀代にはすでに廃絶していた可能性も考えられる。

一方、石田氏の発掘調査報告には、上記の遺物に比して大きな年代差を有する中世後半から近世の遺物が掲載されている。石田氏は『北桑田郡誌』に「郷林寺址」と記して紹介されていることに注目し⁴⁾、附近に室町時代の経塚が存することから、周山廃寺が平安時代初期に廃絶した後も近世ま

で利用された名残りだろうと推測した。今回の発掘調査では、遺構は検出できなかったものの、1区土器溜り1・2からは何らかの儀式に用いられたと考えられる一定のまとまりをもった江戸時代の土師器皿が、2区近世包含層からは室町時代から江戸時代までの瓦を検出した。周山廃寺が廃絶した後、当該地に何らかの儀式を行うような施設が存在した可能性が考えられる。

(2) 伽藍配置の復元

1) 周山廃寺の構造・伽藍配置の復元

周山廃寺の伽藍配置や各堂の性格を考えるにあたって、自然地形に即して堂塔が営まれていることもあり、石田氏は塔以外の堂跡の性格を特定することを避け、相対的な位置関係から堂跡の名称を付けた。今回の発掘調査は、主要堂塔跡から離れた西側の限られた範囲で行われたため、寺域全体の様子を明らかにするのは困難が伴う。しかし石田氏による過去の発掘調査成果とともに今回の発掘調査成果を合わせて考えることで、周山廃寺の伽藍配置の復元を試みたい。周山廃寺の伽藍配置は、丘陵裾部に階段状に造成しているため、全体的な地形からみて大きく3つの地区からなるといえる(図28)。以下、各地区に存在する堂塔の性格と規模、位置などを考えてみたい。

I地区：伽藍の東半部にあたり、他の地区に比べて最も低い位置にある。塔跡、中堂跡、東堂跡といった主要伽藍が位置する。塔跡は、石田氏がこれのみ性格や名称を特定したように、方形の土壇や心礎石の抜取穴などの構造からみて、塔跡であることは間違いないだろう。付近から採集した心柱根巻石の一部の直径から高さ94尺の三重塔があったと推定されている。

一方、東堂跡については19基の礎石や乱石積基壇が見つかっており、礎石の大きさや配置から、間口7間×奥行4間の規模をもつ南北棟の礎石建物であることがわかる。その平面規模の大きさから講堂と考えられるが、滋賀県大津市の穴太廃寺、京都府京都市の大宅廃寺、京都府亀岡市の観音芝廃寺で同規模の講堂が認められる。ただ、古代寺院において講堂は東西棟の建物が一般的で、金堂や塔の位置より後ろに配される場合が多いことを考えると、異例ではある。7世紀後半における伽藍配置から、周山廃寺のように講堂が塔や金堂と並列している類例を上げると、奈良県明日香村の檜隈寺跡、広島県神辺町の小山池廃寺、岡山県久米町の久米廃寺などがある。三重県名張市の夏見廃寺のように、講堂が金堂前方西寄りに東面して建てられる場合もある。それは地形的な制約による伽藍配置とも考えられる。つまり丘陵裾部に選地して、比較的狭い範囲に堂塔が集中して建てられたため、このような伽藍配置を整えるようになったと推定される。また、一般的に講堂は、塔や金堂が完成した後、遅れて建てられる場合が多い。周山廃寺の東堂跡は、塔跡と近接しすぎているため、同時期に建立されたと考えにくい側面もあるものの、⁵⁾現在これらの造営順序について考古学的に検討できる材料を欠く。

なお、中堂跡は全体的な伽藍配置からみても中央に位置しており、主要伽藍を構成する建物のうち、塔と並列するものとして金堂である可能性が高い。石田氏が中堂跡は一度再建した可能性を想定しているように、周山廃寺が完全に廃絶されるまで維持に努めた建物として、仏像を祀った金堂が相応しいと考える。

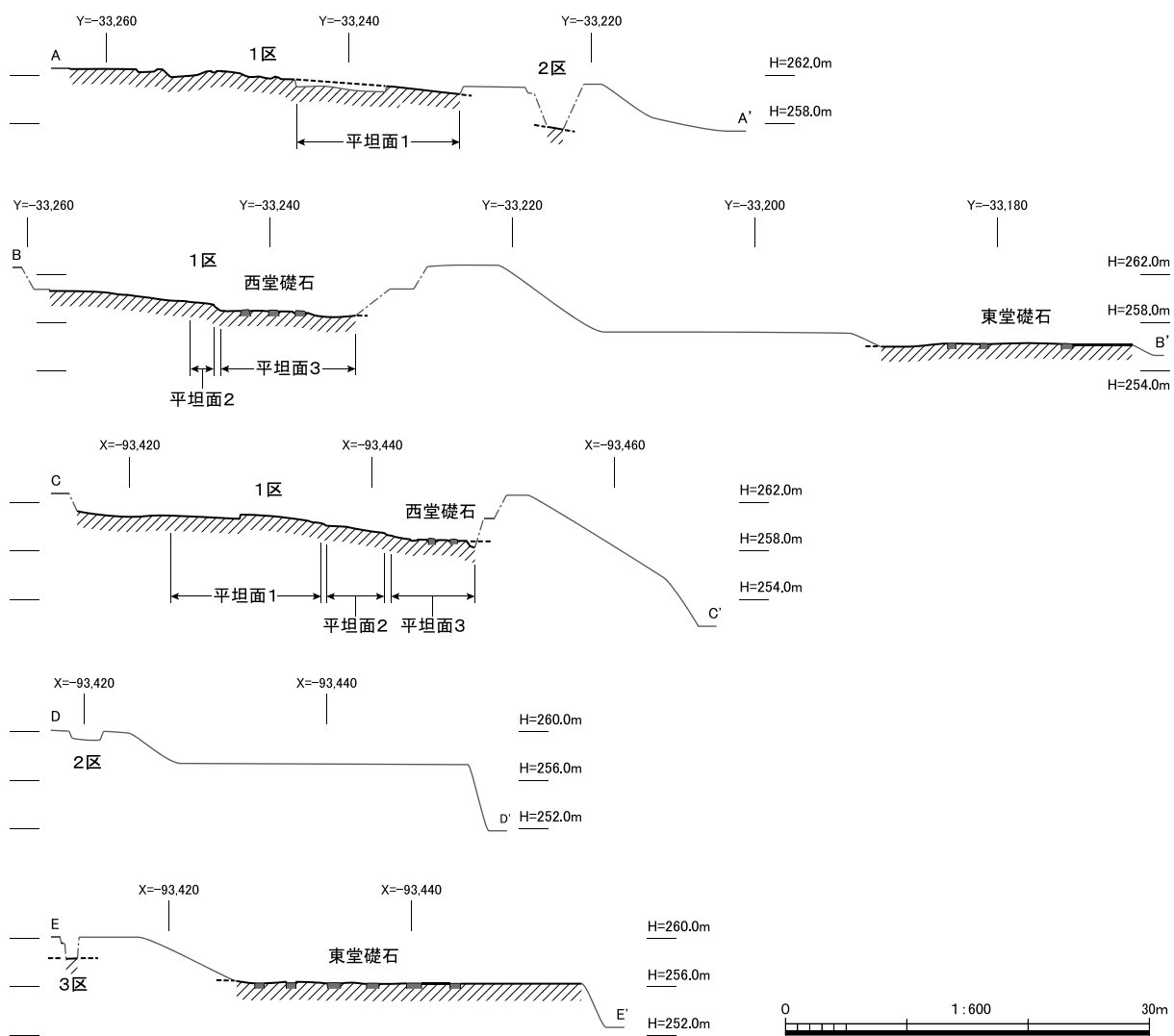
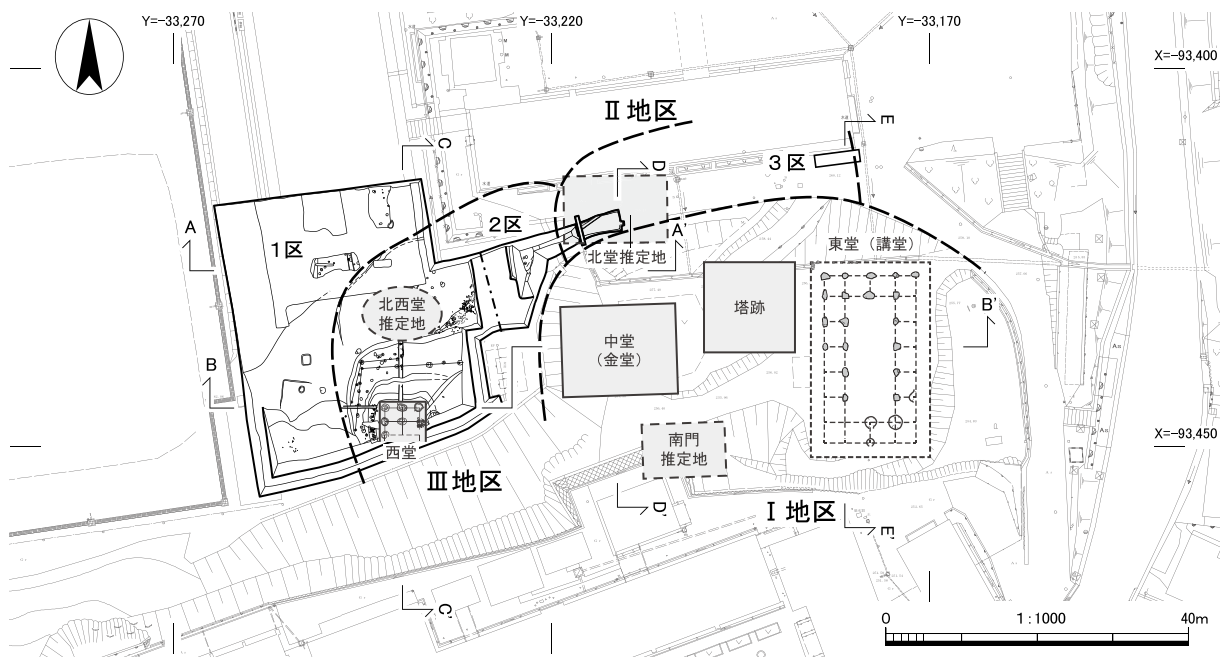


図28 周山廃寺の伽藍配置復元と東西・南北断面図 (1:1,000)

南門跡については、塔跡と中堂跡の間、南側に瓦の堆積層が見つかったことから、南門跡と推定された。しかし特に礎石や平坦面などの建物の存在を窺う痕跡は報告されておらず、後世の瓦捨て場である可能性も否めない。南門跡に関しては、周山廃寺の伽藍配置の復元にあたって意見を留めておきたい。

Ⅱ地区：中堂跡の北側に一段高い造成面があり、北堂推定地が位置する。石田氏によると、中堂跡より約2尺高くなったところに、東西約70尺×南北約40尺の長方形の平坦面が存し、軒瓦の出土地点から間口約45尺×奥行約30尺の建物があったと推定した。さらに石田氏は丘陵傾斜地の北・東・西の三方をそれぞれ削っていると報告しており、他の伽藍とはやや離れたところに何らかの建物があったことが想定できる。その性格を推定するための情報は不十分であるが、今回の発掘調査で2区の瓦溜り128も検出されており、北堂は瓦葺建物ではないかと推測される。

Ⅲ地区：伽藍の西半部にあたり、Ⅰ地区より約6尺高く、Ⅱ地区よりさらに約4尺高いところに、西堂跡と北西堂が位置するⅢ地区がある。繰り返しになるが、今回の発掘調査によってⅢ地区では新たに3つの平坦面が見つかり、平坦面1では北西堂の存在を推定し、平坦面3では西堂跡の再検出ができた。

西堂跡は、梁行2間×桁行2間以上の比較的小規模な総柱礎石建物である。主要伽藍から離れた位置にある倉庫形式の附属建物として、経蔵または宝蔵、鐘楼であった可能性が考えられる。今回の発掘調査で出土した遺物は少量にすぎないが、石田氏の発掘調査では西堂の北側から蔓草鱗鳳鏡と葡萄鏡が各1面ずつ出土している。また、石田氏は発掘調査当時、西堂跡やその周辺に瓦の出土がほとんどないため瓦葺建物ではない可能性を想定した。地形から考えると、西堂跡の瓦の多くが南の崖下へ転落してしまった可能性も否定しきれないが、今回の発掘調査でも瓦の出土がほとんど認められなかったため、瓦葺建物でない可能性が高いといえる。

北西堂については、近代の攪乱により建物の明確な痕跡は検出できなかったものの、南北8～15m×東西20m以上の平坦面1が検出されており、その南側の平坦面2に多量の瓦（瓦溜り20）が流れ落ちている状況で出土した。その状況から平坦面1に、もう一つの建物があった可能性が高いが、立地的に大型建物は不可能であり、平坦面の広さから考えて小型の瓦葺建物であったと考えられる。その性格については伽藍配置や建物の規模・構造などからみて鐘楼ではないかと推定する。

（3）出土遺物からみた周山廃寺

1）軒瓦の型式設定（図29、表9）

周山廃寺や周山瓦窯跡から出土した軒瓦は、今回の発掘調査で出土したのものも含めると、軒丸瓦は3型式4種、軒平瓦は4型式6種が確認されている。付章で触れるように、周山廃寺出土遺物は諸機関に分散して保管されているため、出土瓦の全貌が把握しにくい状況である。とりわけ、石田氏は、当時の発掘調査から出土した遺物に関して詳細に報告しているものの、それらの正確な出土地点までは記していない。そのため、諸機関に分散保管されている遺物が、すべて石田氏の発掘調査出土品とは言い切れず、採集遺物も含まれている可能性も排除できないことを断っておきたい。

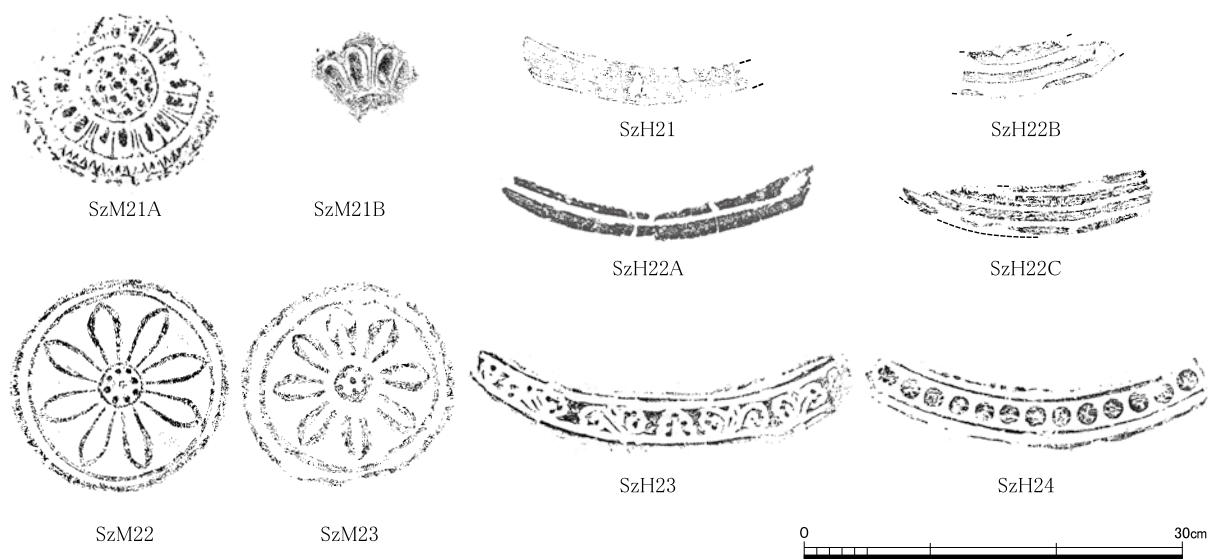


図29 周山廃寺・周山瓦窯跡出土軒瓦型式一覧（1：6）

表9 周山廃寺・周山瓦窯跡出土軒瓦の出土遺構・保管場所別数量表

		軒丸瓦				
		SzM21A 面違鋸歯文縁 複弁八葉蓮華文	SzM21B 複弁八葉蓮華文 (SzM21Aよりやや大)	SzM22 重圏文縁 素弁八葉蓮華文(細)	SzM23 重圏文縁 素弁八葉蓮華文(太)	不明
今回調査出土遺構	瓦溜り1				1	
	瓦溜り20					1
	黒ボク層				1	
	瓦溜り128					1
	近世層					1
	現代盛土					
	小計				2点	3点
保管場所	周山中学校	2		2	4	
	京北合同庁舎	1(周山瓦窯出土)	1(周山瓦窯出土)	2	2	1
	東京国立博物館	1		1		
	山城郷土資料館?		1(周山瓦窯出土)			
	水垂收藏庫					
合計		4点	2点	5点	8点	4点

		軒平瓦						
		SzH21 無文	SzH22A 二重弧文	SzH22B 三重弧文	SzH22C 四重弧文	SzH23 均整忍冬唐草文	SzH24 連珠文	不明
今回調査出土遺構	瓦溜り1				2			
	瓦溜り20				1		1	
	黒ボク層					1	1	
	瓦溜り128	1		1		1		
	礎石建物整地層上面						1	
	近世層			1				
	現代盛土					1		
小計	1点		2点	3点	3点	2点	5点	
保管場所	周山中学校			1	3	2	1	
	京北合同庁舎		1(周山瓦窯)			1	1	
	東京国立博物館				1	1	1	
	山城郷土資料館?							
	水垂收藏庫					1		
合計		1点	1点	3点	7点	8点	5点	6点

いずれにしても、ここでは周山廃寺や周山瓦窯跡から得られたすべての軒瓦を一括して型式設定を行うことにする。

記述にあたっては、瓦当文様別に以下の通り型式番号を付すこととした。型式番号は、周山廃寺の略号であるSzに、軒丸瓦であればM、軒平瓦であればHの頭記号を付し、後に二桁の数字で配した。十の位の数字は、所産年代を示したもので、1は飛鳥時代前期、2は飛鳥時代後期（白鳳期）とする。一の位の数字は、新形式と認定した順に新しい番号を与えた。番号の後に配した大文字のアルファベットは、同一型式内での異種（同文異範）を示す。また、小文字のアルファベットは製作技法上、顕著な相違が認められるものについてのみ分別するものとする。以下、各型式の概要を述べる（図29）。各型式の出土地や保管先については、表9を参照されたい。

① 軒丸瓦

SzM21 いわゆる「川原寺式」の面違鋸歯文縁複弁八葉蓮華文で、大和・川原寺式の文様的な特徴をよく踏襲している。しかし、SzM21の外縁は線違鋸歯文に変わっており、部分的に連続していない。中房の蓮子は1 + 6 + 11で相違する。また蓮弁と間弁の先端が切られているなど、形式的に退化した様相がみられる。丸瓦端面は調整せずに瓦当裏面に接合し、補強粘土を多めに使用する。これまで周山廃寺で3点、周山瓦窯跡で1点が確認されている。今回の発掘調査では出土していない。すべて同範関係である。

一方、ほとんど欠損して外縁文様と瓦当直径は不明ではあるが、上記のものに比べると、中房直径や子葉がやや大きい同文異範が周山瓦窯跡でのみ2点出土した。前者をSzM21A、後者をSzM21Bとする。

SzM22 重圏文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦で、間弁はもたない。各蓮弁は離れており、文様の彫りが浅くて蓮弁の量感が乏しい。弁央を凹ませて、弁央に稜線が走る。外縁には太い二重圏線がめぐる。中房に1 + 8の蓮子を配する。丸瓦端面は調整せずに瓦当裏面に接合し、瓦当裏面を平らに仕上げる。瓦当部側面は、縄叩き目を残すものがあるが、ほとんどケズリやナデ調整を施して消されている。これまで周山廃寺で5点確認されている。今回の発掘調査では出土していない。すべて同範関係である。

SzM23 重圏文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦で、SzM22より文様の彫りが深く、全体的に肉厚である。弁央を凹ませて両側に稜線が走る。外縁には太い二重圏線がめぐる。高く突出する中房には1 + 5の蓮子を配する。丸瓦部を接合する際に、瓦当裏面に指頭で溝を作ってから、丸瓦部を差し込んでいる。瓦当部側面は、下半の瓦当裏面の方には横方向にヘラで切り取って段を付けるものや、その段にヘラで鋸歯文を刻んでいるものがある。瓦当部側面を丁寧にケズリ調整するため判然としないが、文型とともに柵型を使用し再調整した可能性が高い。これまで周山廃寺で6点確認されており、今回の発掘調査では2点（瓦1・2）出土した⁶⁾。すべて同範関係である。

② 軒平瓦

SzH21 文様のない無文軒平瓦である。瓦当面には横方向のケズリが施されているのみで、文様はないが、製作技法からみて軒平瓦の可能性が高い。顎部の形態は、直線顎である。瓦当側縁は縦

方向にケズリ落としている。平瓦部の凸面には格子叩き痕を残すが、瓦当側には横方向のナデを施す。平瓦部凹面には、布袋のシワと桶杵板痕の凹凸が残っているが、縦方向のナデを施して丁寧⁷⁾に消している。今回の発掘調査でのみ1点(瓦3)出土した。

SzH22 瓦当面に型引きによる重弧文を施文している。二重弧文軒平瓦(SzH22A)、三重弧文軒平瓦(SzH22B)、四重弧文軒平瓦(SzH22C)がある。SzH22Aは、直線顎であり、平瓦部凸面に格子叩き目、凹面に桶巻作りによる桶杵板痕跡が残る。SzH22Bは、型引きが深く、各弧線の断面は深い台形を呈する。段顎で、顎の幅はほとんど8cm前後で長い。それに対してSzH22Cは、型引きが浅くて、各弧線の断面はV字状を呈する。段顎であるが、顎の幅は4.5cm前後でSzH22Bより短い。SzH22B・Cは、いずれも顎面に正格子の叩き目が施されており、平瓦部の凹面には、布目痕と桶杵板痕の凹凸が明瞭に残る。SzH22Aは周山瓦窯跡から1点出土した。SzH22Bは過去の発掘調査より周山廃寺で1点確認されており、今回の発掘調査では2点(瓦4・5)出土した。SzH22Cは過去の発掘調査より4点確認されており、今回の発掘調査では3点(瓦6)出土した。

SzH23 均整忍冬唐草である。中心飾りは半裁花文で、いわゆる杏葉唐草文は中心飾りから両側に5転する。唐草は各单位が離れ、主葉・支葉は強く巻き込む。上下外区には1本の界線を配するが、両端にはない。唐草が5転目以後続く部分で、瓦当側面が切り落とされている。瓦当面幅は、両端へ行くほど幅が狭くなる。顎の形態は、曲線顎(SzH23a)と段顎(SzH23b)の二種がある。いずれも平瓦部の凸面には、顎面とともに縄叩き目を施した後、縦方向のナデやケズリを施して消す。凹面には、布目痕と桶杵板痕の凹凸が明瞭に残る。過去の発掘調査によると、周山廃寺で5点確認されており、今回の発掘調査では3点(瓦7～9)出土した。すべて同範関係である。

SzH24 連珠文軒平瓦である。直径2cmの大粒の珠文を並べており、上下外区に二重の太い界線を配する。瓦当側面が切り落とされることによって、両端の珠文が半分切り落とされ、珠文の個数に相違があるが、これまでの出土品はすべて同範関係であることを確認した。平瓦部凸面には、縦位の縄叩き目が側縁に平行して全面的に施されているが、部分的にナデやケズリ調整を施して消しているものもある。平瓦部凹面には、布目痕と桶杵板痕の凹凸が残る。約3.5～4cmの粘土紐を巻き上げた痕跡が残るものもある。過去の発掘調査によると、周山廃寺で3点確認されており、今回の発掘調査では2点(瓦10・11)出土した。すべて同範関係である。

2) 軒瓦と丸瓦・平瓦の組み合わせ

軒瓦と丸瓦・平瓦の組み合わせを検討するにあたって、同範関係あるいは層位的な共伴関係に基づいて抽出するのは困難である。それは周山廃寺や周山瓦窯跡の軒丸瓦・軒平瓦が、この遺跡以外での同範例は確認されていないことや、石田氏による過去の発掘調査では、各型式にあたる軒瓦の堂塔出土位置が不明であることにも起因する。また、創建時の瓦の組み合わせを「絶対多数の論理⁷⁾」によって抽出する方法が一般的と言えるが、表9をみるとわかるように、絶対多数を論じるには数量的に不十分である。しかしながら、軒瓦の文様と製作技法の特徴から、それらの組み合わせを考えることは可能である。

①SzM21A・B+SzH21・22 7世紀後半、大和の「川原寺式」軒丸瓦が地方各地へ拡散・展

開していくなかで、重弧文軒平瓦が組み合わせているのは周知の通りである。SzM21は、「川原寺式」軒丸瓦の垂式とみられるもので、⁸⁾文様のな特徴が明らかに退化しており、SzH22にも同様の傾向が認められる。

また、他型式の軒瓦の場合、一型式に当たり一つの範で製作されているのに対して、SzM21・SzH22は複数の範で製作されていることに注目できる。つまり、SzM21はA・Bと2種、SzH22はA・B・Cと3種の範が用いられたのである。伽藍創建の際に大量な瓦が必要である状況を考えると、複数の範が確認されるこの組み合わせが、創建瓦の組み合わせと思われる。

これらに組み合わせる丸瓦・平瓦を考えてみると、SzM21は顎部や丸瓦部を丁寧にナデまたはケズリ調整するため、それに組み合わせる丸瓦の種類を特定するのは困難である。しかし、SzH22の平瓦部凸面には、すべて平瓦I A類の格子叩き目が施されており、この類は周山廃寺・周山瓦窯跡から最も多量に出土する平瓦である。SzH21の平瓦部凸面にも同様の叩き目や調整が施されており、この組み合わせが創建時に使われた可能性が高いと考えられる。

②SzM22・23 + SzH23・24 これらは、他の遺跡では類例を見ないものである。SzM22・23が重圈文縁素弁八葉蓮華文で相互類似していること、SzH23・SzH24は両方とも瓦当部側面を切り落としている仕上げる特徴から、これらの共通性は強い。また、SzM22の瓦当部側面に縄叩き目がわずかに残っているが、⁹⁾SzH23・24の平瓦部凸面に平瓦II B類の縄叩き目が全面に施されていることから、これらが組み合わせ関係にあると考えられる。

しかし、SzM22とSzM23が、各々どの型式の軒平瓦に組み合わせるのかはさらなる検討が必要である。SzM22・23の場合、焼成や色調、瓦当部顎面の段成形によって相違する製作技法が認められる。また、SzH23・24の場合、顎の形態、粘土素地の種類に相違が認められるため、製作工人の違いに関わる可能性が高い。周山瓦窯跡から出土した丸瓦・平瓦との組み合わせの検討を含めて、今後の課題としたい。

3) 遺物からみた伽藍の造営順序

周山廃寺は、石田氏によって塔跡、中堂跡、東堂跡、西堂跡の礎石が確認され、南門跡・北堂跡は瓦の散布からその位置のみ推定された。さらに今回の発掘調査より北西堂跡といえるもう一つの建物の存在を推定した。上記したように、創建当初から7つの堂塔が並んでいたかどうかは、石田氏の当時の発掘では追究できておらず、今回の発掘調査も限られた範囲で行われたため層位的に比較検討するのは困難である。ただ、周山瓦窯跡の出土遺物と比較検討することで、北西堂・西堂の造営年代を類推してみることにはしたい。

周山瓦窯跡の発掘成果¹⁰⁾によると、窯は灰原の層位関係によって3・4号窯→2号窯→1号窯という順序で操業する中で、平瓦凸面の叩き目が正格子I (OK I) に縄I (OK II)、正格子II (OK III)、斜格子 (OK IV)、縄II (OK V) と累加的に型式が増えていく状況が読み取れる (図30)。丸瓦は3・4号窯、2号窯ではすべて行基葺式であるが、1号窯段階で行基葺式とともに玉縁式が生産される。また、これらの生産操業時期については、出土須恵器の型式学的検討やC14年代測定より、7世紀第4四半期から8世紀第2四半期までとされ、I～V段階に設定されている。

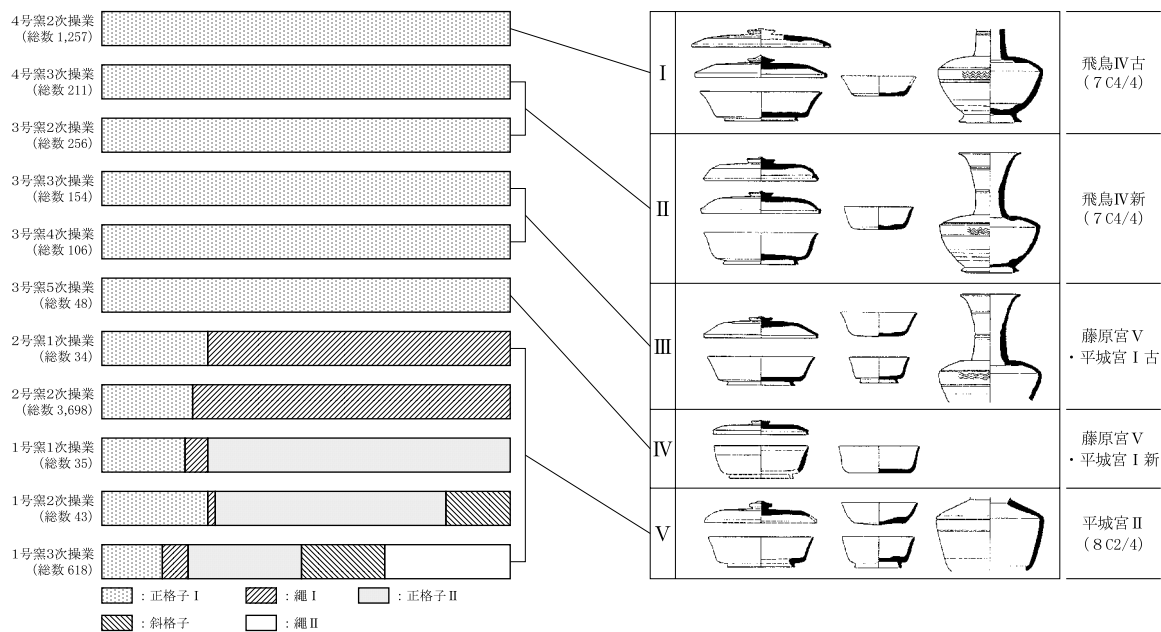


図30 周山瓦窯出土平瓦の型式別比率の推移と操業年代
 (『丹波周山窯址』京都大学文学部考古学研究室 1982年 より一部改変、縮尺不同)

その成果をもとに瓦溜り 1・20の分析結果を考えると、上記した平瓦・丸瓦のすべての型式が出土しており、2号窯出土瓦の特徴といえるセピア色(本報告では赤褐色)の瓦も多量に出土していることから、2号窯操業以降(V段階)のものも北西堂の屋根に葺かれた可能性が高い。V段階は、出土須恵器の型式学的検討より平城宮II(西暦730年頃)にあたりと考えられている。とりわけ、瓦溜り 1・20から玉縁式丸瓦が計7点、平瓦II B類が285点(4.2%)出土しているが、これらは1号窯でのみ生産されたものであるため、V段階のものであることを傍証する。そこで一般的に主要堂塔を建てた後、付属伽藍を建立することを考えると、北西堂は周山瓦窯の最終段階に建立されたと考えて矛盾はないだろう。ただ、瓦溜り 1・20において平瓦I A類の占める比率が最も高いことを考えると、周山瓦窯3・4号窯の操業時期(I~IV段階)に北西堂の建立はさかのぼり、追加的に2・1号窯の生産瓦が北西堂へ供給されたとも考えられる。伽藍整備が継続的に行われたことが推定される。

一方、西堂跡については、造営時期を示す明確な資料は欠く。上述したように、石田氏により西堂跡は瓦葺建物ではないという指摘もあり、周辺からSzM23・SzH24といった出土軒瓦の中で最も後出する型式が認められるものの、それらは背後の北から流れ落ちたものであるため、造営時期は不明である。ただ、ここでは西堂跡が北西堂のように主要伽藍から離れたところに位置している付属伽藍と考えられるため、北西堂とほぼ同じ時期に建立された可能性だけ推定して置きたい。

(4) 小 結

周山廃寺は戦後、石田氏によって初めて発掘調査されて以来、その特異な立地や伽藍配置から注目されてきた。7世紀後半に創建された地方寺院が数多くあるなかで、周山廃寺のように比較的狭い範囲に堂塔が集中している例は少ないからである。しかし、短期間の調査であったため多くの課

題が積み残されていた。

今回、失われていたと考えられてきた西堂跡が再検出でき、その規模や構造、性格を明らかにすることができた。また西堂北側の一段高いところで、もう一つの瓦葺建物（北西堂）の存在の可能性を示すことができた。さらに堅穴建物の検出によって寺院を支える工房の存在も明らかにすることができた。このように、今回の発掘調査により、周山廃寺の造成方法及び伽藍構造の一端が明らかになったのは大きな成果といえる。

なお、古代寺院において、寺と瓦窯、工房がセットで確認された例は稀であり、特に地方寺院における造寺・運営などを知る手掛かりとしての資料的価値は高い。周山瓦窯跡、高梨遺跡との需給関係、造寺活動に携わった工人の動向や労働編成問題などについては、今後さらに検討を重ねていきたいと思う。

註

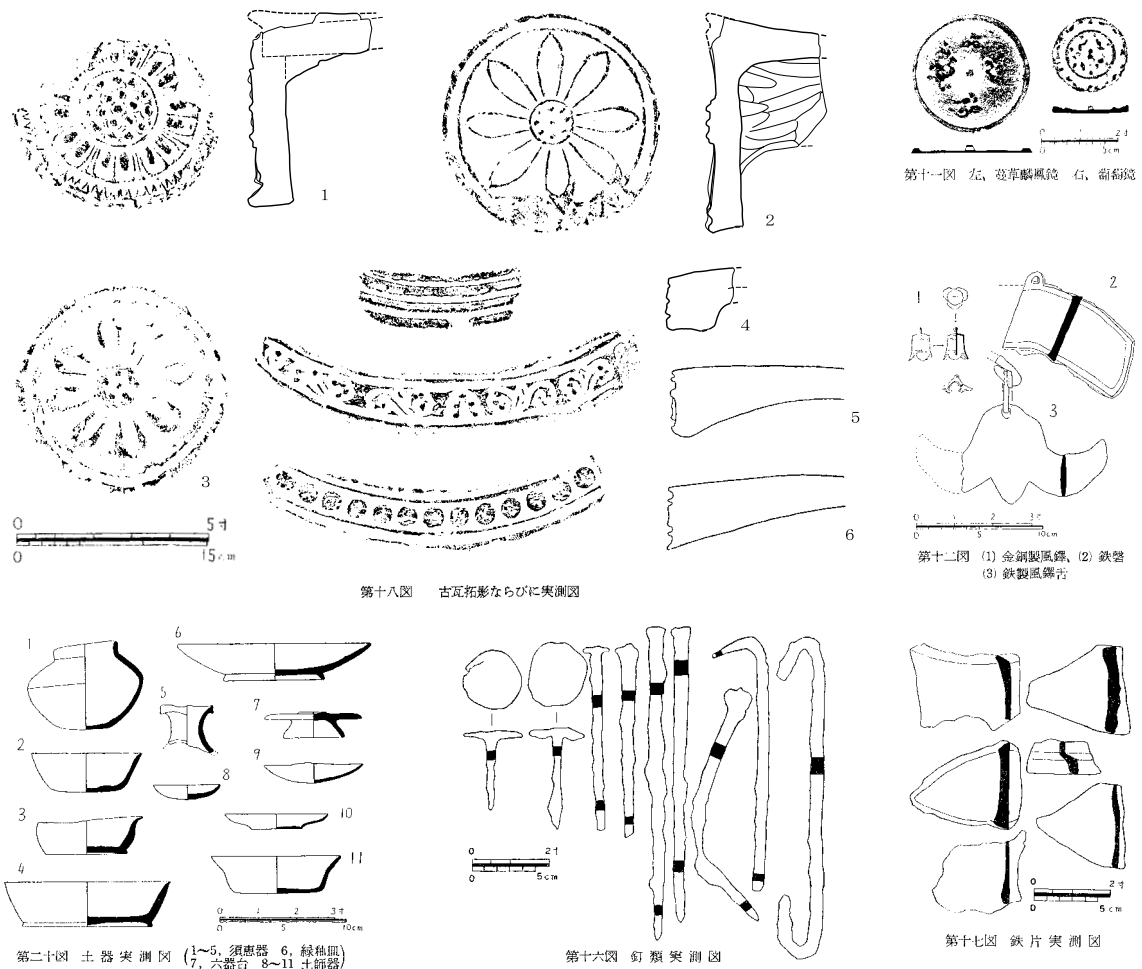
- 1) 『周山古墳群 高梨経塚群 高梨遺跡発掘調査概報』京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集 京都府京北町教育委員会 2001年
- 2) その後、1次調査地の北側で2・3次調査も行われたが、顕著な遺構は検出していない。
「高梨遺跡第2次」『京都府遺跡調査概報』第106冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003年
「高梨遺跡第3次」『京都府遺跡調査概報』第111冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004年
- 3) 平良泰久ほか「周山瓦窯跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概要（1979）』京都府教育委員会 1979年
『丹波周山窯址』京都大学文学部考古学研究室 1982年
- 4) 石田氏が参考にした『北桑田郡誌』の出処は不明であるが、『京都府北桑田郡誌』（北桑田郡 1923年）p.485には、「郷林寺址 周山小学校の北側一体の地には、もと郷林寺と称する寺院存址、七堂伽藍皆備はりしと傳ふるも、今は僅かに山門の柱礎石片を存するのみにて、往昔の盛観を偲ぶべくもあらず。本寺址附近に寺田と称する小字あるは、本寺が嘗て少からざる寺領を有せしことを知るに足るべし。」と記している。
- 5) 安井良三「周山廃寺の遺址と遺物」『文化史學』第1号 文化史學會 1950年
- 6) これまで確認されているSzM23には、すべて瓦当部側面に段が付いている。しかし、今回の発掘調査から出土した瓦2は、瓦当部側面に段が付いておらず、斜めに成形している。それは柳型で段をつけて成形する途中、何らかの理由で失敗して段をなくしてしまった結果と思われる。
- 7) 上原真人『歴史発掘① 瓦を読む』講談社 1997年
- 8) 『古代瓦研究Ⅲ－川原寺式軒瓦の成立と展開－』古代瓦研究会シンポジウム記録 奈良文化財研究所 2009年
- 9) 東京国立博物館所蔵品から確認した。図31－第十八図－2。
- 10) 『丹波周山窯址』京都大学文学部考古学研究室 1982年

付章 石田茂作による周山廃寺発掘調査の出土遺物

周山廃寺は1947・1949年に石田茂作氏によって初めて発掘調査されて以来、出土遺物は東京国立博物館、京都市立周山中学校（以下、「周山中学校」と略称する）、京都市右京区役所京北合同庁舎（以下、「京北合同庁舎」と略称する）に分散して保管されている状況にある¹⁾（図31～33、表10）。軒瓦・丸瓦・平瓦・須恵器・金属製品などが確認されているが、各保管経緯については、把握しきれない当時の諸事情があるため、ここでは保管現況を概略的に述べることに留めたい。また主に軒瓦を中心に提示することで、分散されている軒瓦型式の一括を図りたい。それ以外の遺物については、今後別稿を改めて詳述することにする。

まず、東京国立博物館には、1947・1949年石田氏の発掘調査による出土遺物の一部が所蔵されている。図31は、石田氏が紹介した遺物の図面を転載したものであるが、瓦類・土器類・金属製品がある。以下、石田氏が掲載した図面番号で指称する。

瓦類については、第十八図の1 (SzM21)・2 (SzM22)・4 (SzH22C)・5 (SzH23)・6



※ 石田茂作・三宅敏之「丹波国周山廃寺」『考古学雑誌』第45巻第2号 1959年 を一部改変。縮尺は約1/6。
第十八図の1・2・4の実測図は李が作成。

図31 東京国立博物館所蔵 周山廃寺出土遺物拓影及び実測図

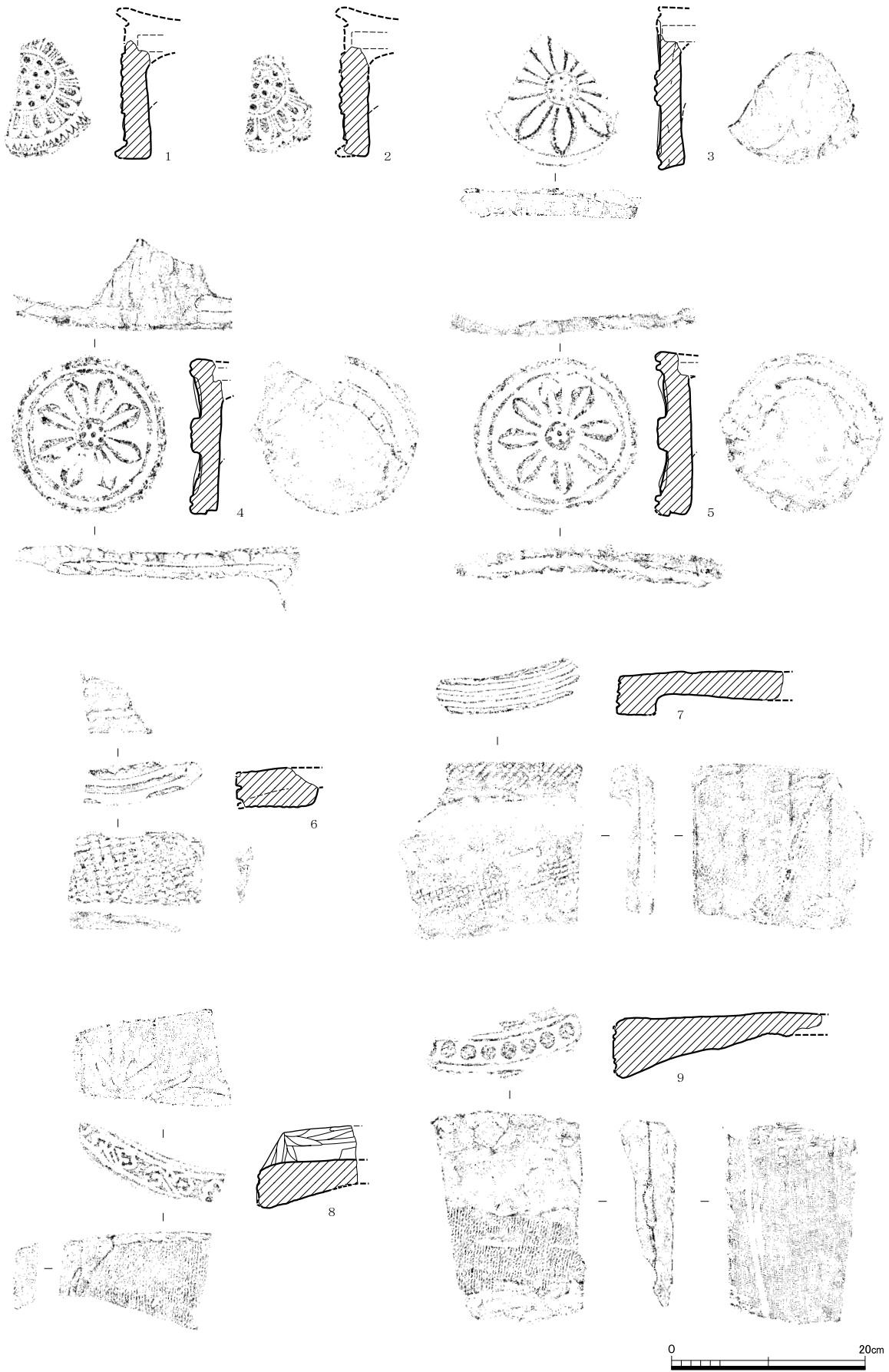


图32 周山中学校保管 周山廢寺出土遺物拓影及び実測図 (1 : 6)

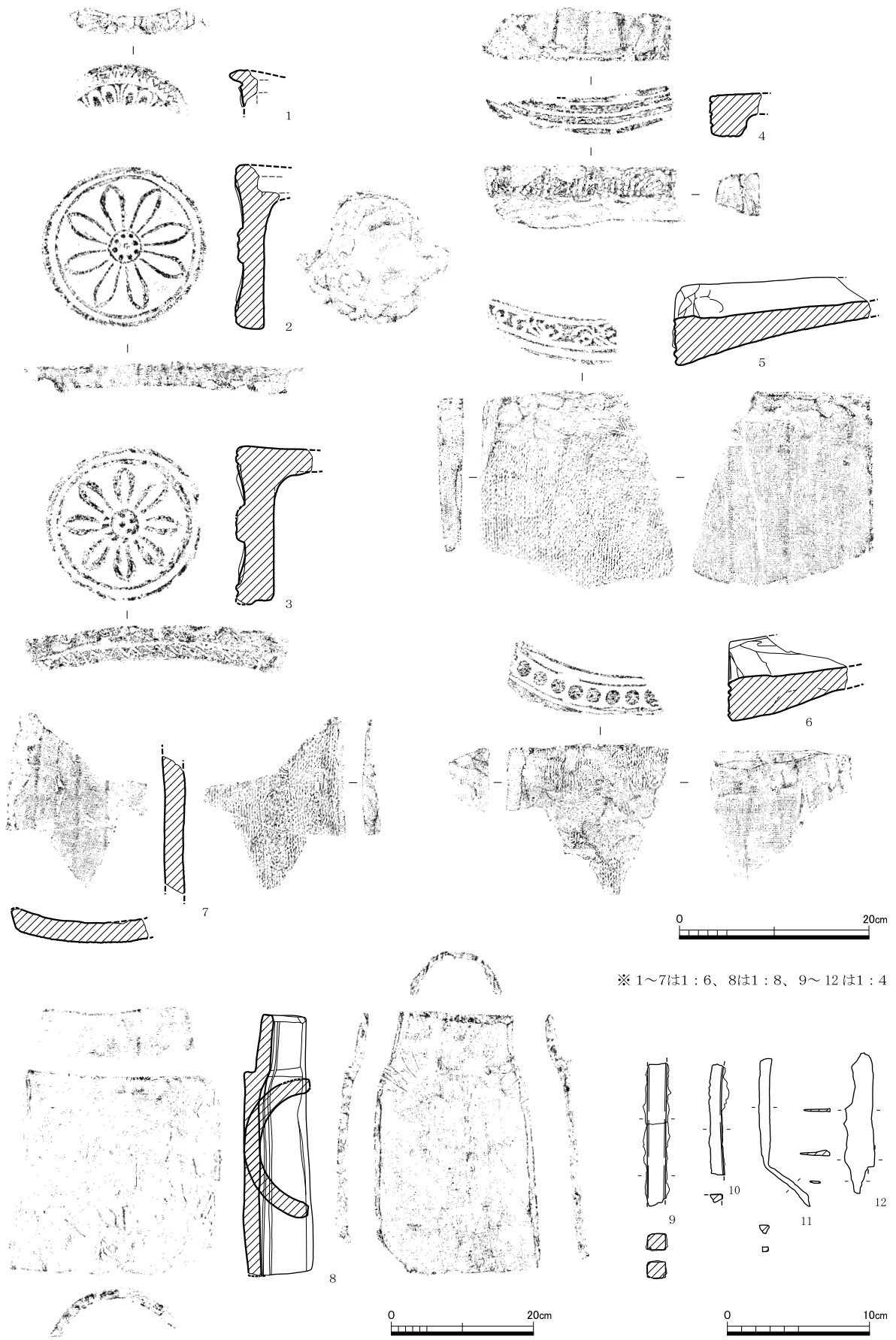


図33 京北合同庁舎保管 周山廃寺出土遺物拓影及び実測図（1：6、1：8、1：4）

(SzH24)を確認した。3(SzM23)の保管先は不明である。土器類については、第二十図の5(須恵器)・7(六器台)のみ確認でき、他に形態がわかる土器類はなかった。金属製品については、第十一図の蔓草麟鳳鏡・葡萄鏡、第十二図の金銅製風鐸・鉄磬・鉄製風鐸舌、第十七図の鉄片、第十六図の鉄釘類が確認できた。保存状態は良好であったが、一部錆化して形態不明のものも含まれている。

次に、周山中学校には計49点の遺物が保管されている(図32)。その中には周山城址や経塚からの採集品も含まれているが、周山廃寺出土品として判定できるものは、計38点である。軒丸瓦8点(SzM21:2点、SzM22:2点、SzM23:4点)、軒平瓦8点(SzH22B:1点、SzH22C:3点、SzH23:2点、SzH24:1点、不明:1点)、丸瓦5点、平瓦15点、須恵器2点、鉄製品が保管されている。

瓦類中には、裏面及び側面に白字で「周山廃寺No.○周山中」(○は、数字)という注記が書かれている。No.28まで確認したが、すべて揃えているわけではなく、後術する京北合同庁舎でも一部同様の注記が見られる。遺物に注記があるものを除き、ほとんど遺物の出土位置が不明ではあるが、今回の発掘調査出土品に比べて、同様の特徴をもつものを周山廃寺出土品として判断した。

最後に、京北合同庁舎には周山廃寺のみならず、周山瓦窯跡や愛宕山古墳から出土した遺物も保管されている(図33)。周山廃寺出土品中には、周山瓦窯跡出土品と多少混同されているものもあるが、上記した周山中学校保管品の注記や、周山瓦窯跡発掘調査報告書²⁾を対照してみた結果、周山廃寺跡出土品と判定できるものは、計18点である。軒丸瓦6点(SzM21:1点、SzM22:2点、SzM23:2点、不明:1点)、軒平瓦2点(SzH23:1点、SzH24:1点)、丸瓦1点、平瓦4点、鉄製品5点である。

瓦類の中に、特記すべきものは図33-3・7である。3は、SzM23の中で、瓦当部側面下半にヘラで鋸歯文を刻んでいる唯一のものである。7は、平瓦凸面に「□田部連君足」という地元豪族とみられる人名がヘラ書きされた文字瓦である。本来は石田氏の発掘調査によって東堂跡の北西より発見されたものであるが、現在京北合同庁舎で保管されていることが確認できた。他に、鉄製品に鉄釘や刀子と思われる鉄片が計5点あるが、残存状態は非常に悪く小片のみである。

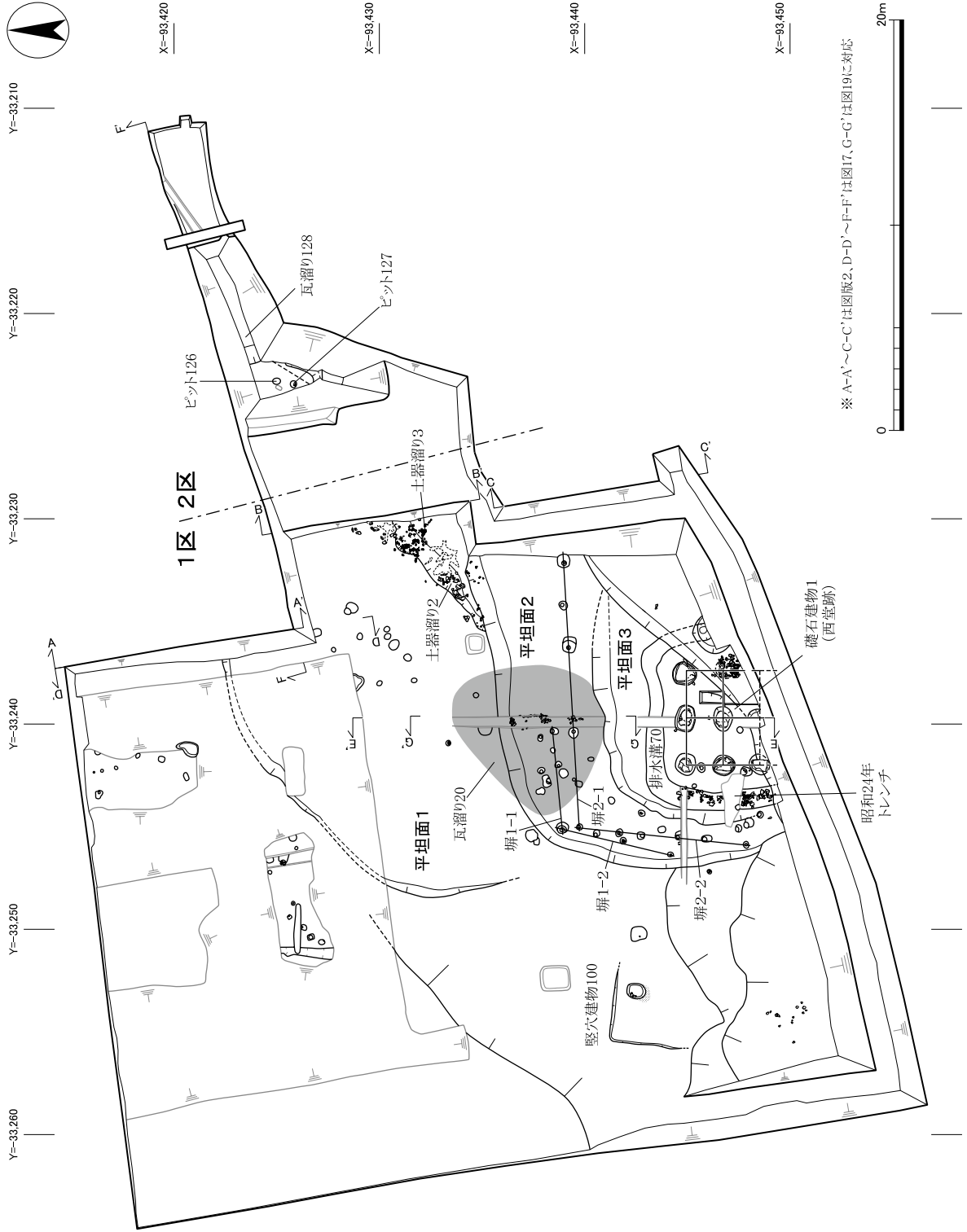
註

- 1) 他に、京都市水垂収蔵庫にも周山廃寺と周山瓦窯出土品が保管されていることを確認した。2005年京北町が京都市右京区に編入されることにより京北町教育委員会の所蔵遺物の一部が京都市埋蔵文化財研究所で委託所蔵されたのである。脱稿後、そのような事実を知り、詳細は現在整理中である。
- 2) 『丹波周山窯址』 京都大学文学部考古学研究室 1982年

表10 諸機関保管の周山廃寺出土瓦の観察表

掲載	種類	型式	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ(cm)	中房径 (cm)	蓮子径 (cm)	色調	焼成	胎土	注記
図31	1 軒丸瓦	SzM21	直径16.0		瓦当部:2.4	6.4	1.2	灰色	硬質	緻密	
	2 軒丸瓦	SzM22	直径17.0		瓦当部:2.4	3.7	0.7	灰色	硬質	緻密	
	4 軒平瓦	SzH22C	5.5	13.3	平瓦部:1.6~1.8 瓦当部:4.3			黄灰色	硬質	緻密	
図32	1 軒丸瓦	SzM21	12.0	10.6	瓦当部:2.5	6.2	1.3	10YR5/1 褐灰色	硬質	緻密	白字「周山廃寺No.1周山中」
	2 軒丸瓦	SzM21	11.5	8.0	瓦当部:2.7	6.0	1.3	10YR4/1 褐灰色	硬質	緻密	白字「周山廃寺No.2周山中」
	3 軒丸瓦	SzM22	14.2	15.3	瓦当部:2.4	3.7	0.7	10YR7/1 灰白色	硬質	緻密	墨書「No.6」
	4 軒丸瓦	SzM23	直径16.3		瓦当部:2.1	3.7	0.8	2.5Y5/1 黄灰色	硬質	やや粗い	白字「周山廃寺No.8周山中」
	5 軒丸瓦	SzM23	直径17.2		瓦当部:2.5~3.4	3.5	0.7	5Y7/1 灰色	やや軟質	やや粗い	白字「周山廃寺No.9周山中」
	6 軒平瓦	SzH22B	8.5	13.8	瓦当部:3.7			10YR7/2 にぶい黄橙色	軟質	やや粗い	白字「周山廃寺No.14周山中」
	7 軒平瓦	SzH22C	17.2	19.0	平瓦部:2.0~2.8 瓦当部:2.2~2.9			10YR7/1 灰白色	やや軟質	やや粗い	白字「周山廃寺No.12周山中」
	8 軒平瓦	SzH23	10.3	6.4	2.5~4.1			10YR6/1 褐灰色	硬質	やや粗い	白字「周山廃寺No.19周山中」
	9 軒平瓦	SzH24	21.4	6.5	2.2~6.1			10YR7/2 にぶい黄橙色	硬質	やや粗い	
図33	1 軒丸瓦	SzM21	4.0	12.3	1.6			2.5Y5/2 暗灰黄色	硬質	緻密	白字「周山廃寺No.3周山中」
	2 軒丸瓦	SzM22	直径17.2		瓦当部:2.4~2.8	3.8	0.6	2.5Y7/2 灰黄色	やや軟質	やや粗い	白字「周山廃寺No.6周山中」
	3 軒丸瓦	SzM23	直径16.6		丸瓦部:2.1 瓦当部:3.1~4.0	3.8~4.3	0.8	2.5Y7/2 灰黄色	軟質	粗い	白字「周山廃寺No.7周山中」
	4 軒平瓦	SzH22C	5.9	20.0	平瓦部:2.2 瓦当部:4.4			2.5Y7/2 灰黄色	やや軟質	やや粗い	瓦当部:白字「周山廃寺No.3周山中」 顎部:墨書「3」「No.3」
	5 軒平瓦	SzH23	20.0	19.2	平瓦部:1.9 瓦当部:3.4~5.0			2.5Y6/2 灰黄色	硬質	緻密	墨書「No.45」
	6 軒平瓦	SzH24	16.0	17.4	平瓦部:2.4 瓦当部:4.7			2.5Y6/1 黄灰色	硬質	緻密	墨書「No.34」「塔」
	7 平瓦	II B	19.5	15.6	2.1			10YR5/1 褐灰色	硬質	緻密	白字「周山廃寺No.201周山中」
	8 丸瓦	II	36.8	19.5	2.2			2.5Y6/2 灰黄色	硬質	緻密	白字「周山廃寺No.24周山中」

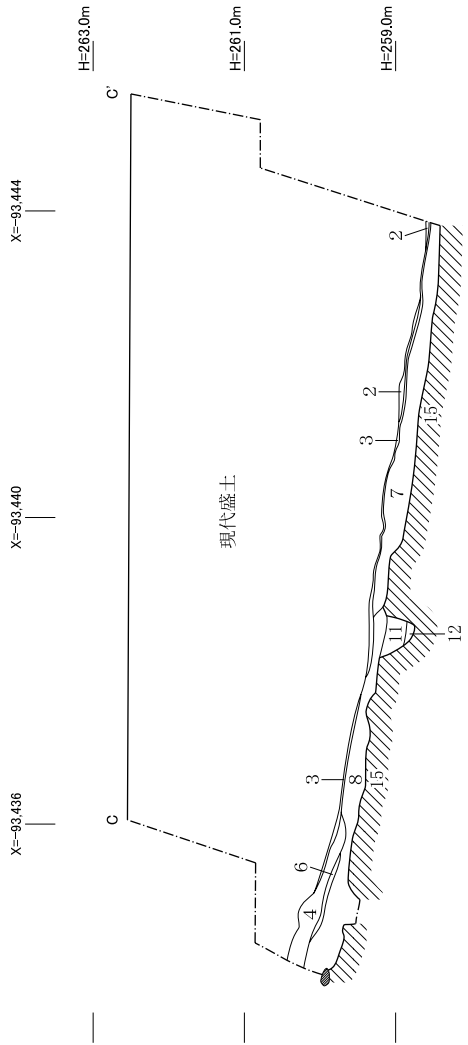
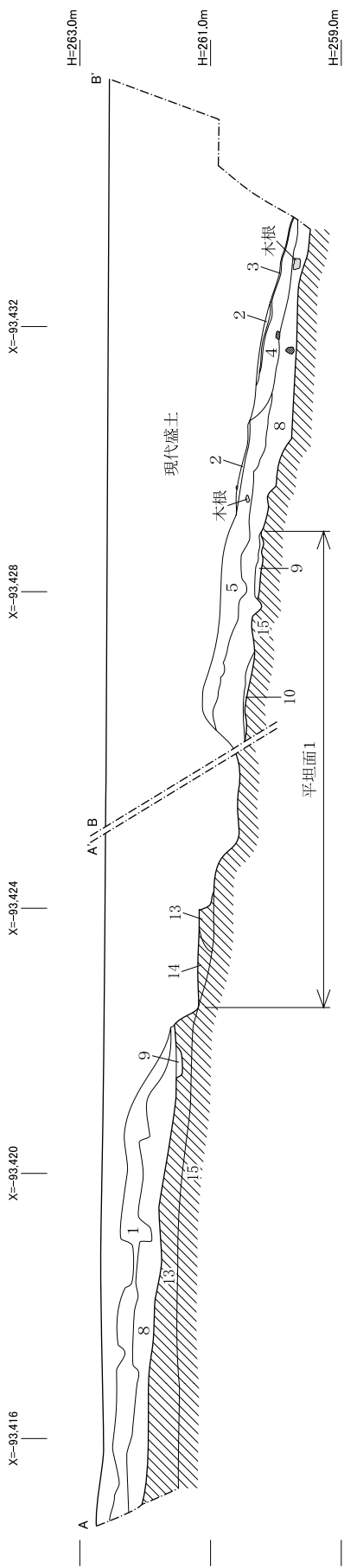
圖 版



1・2区平面図 (1:300)

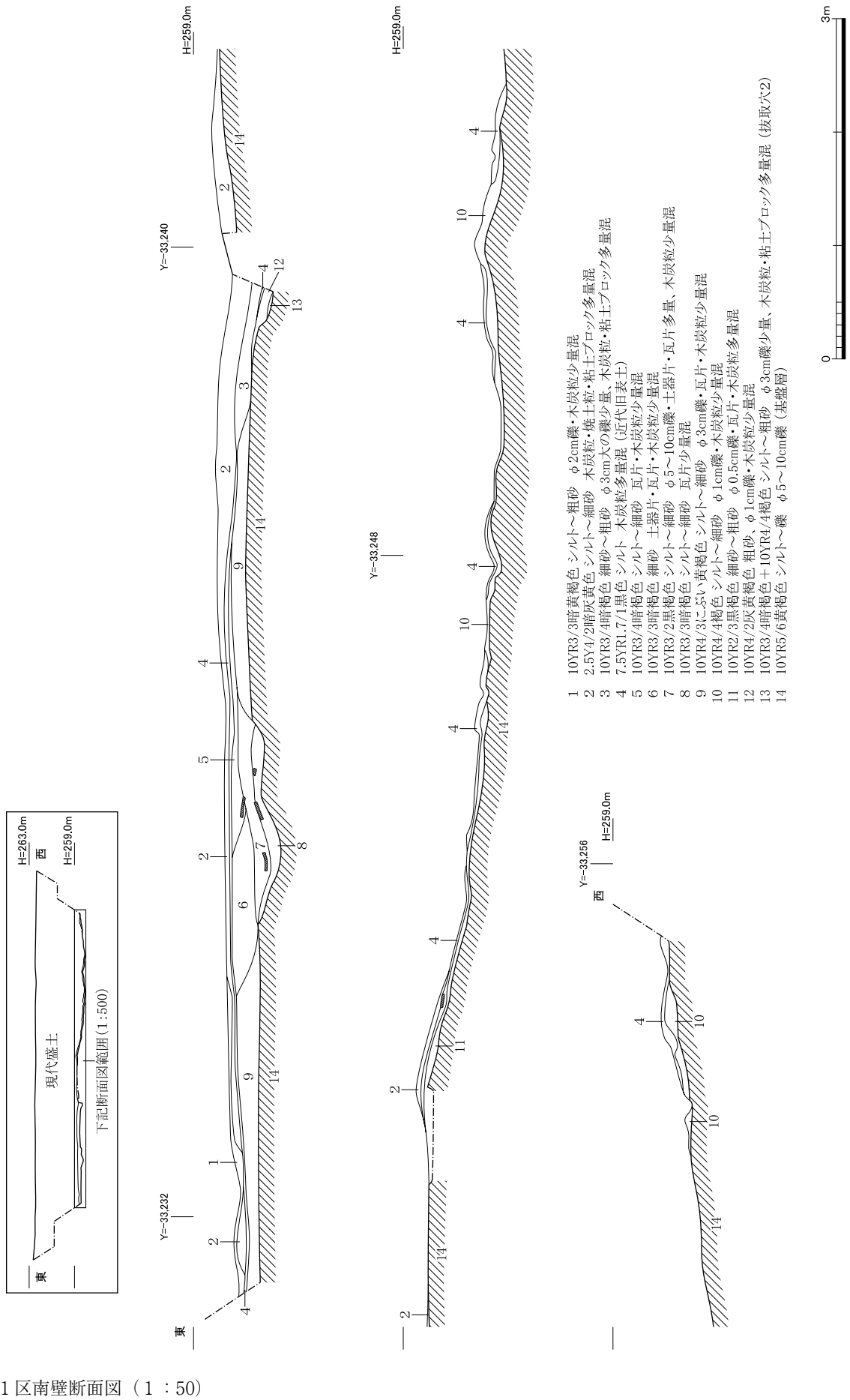
図版2 遺構

1区東壁断面図 (1:100)



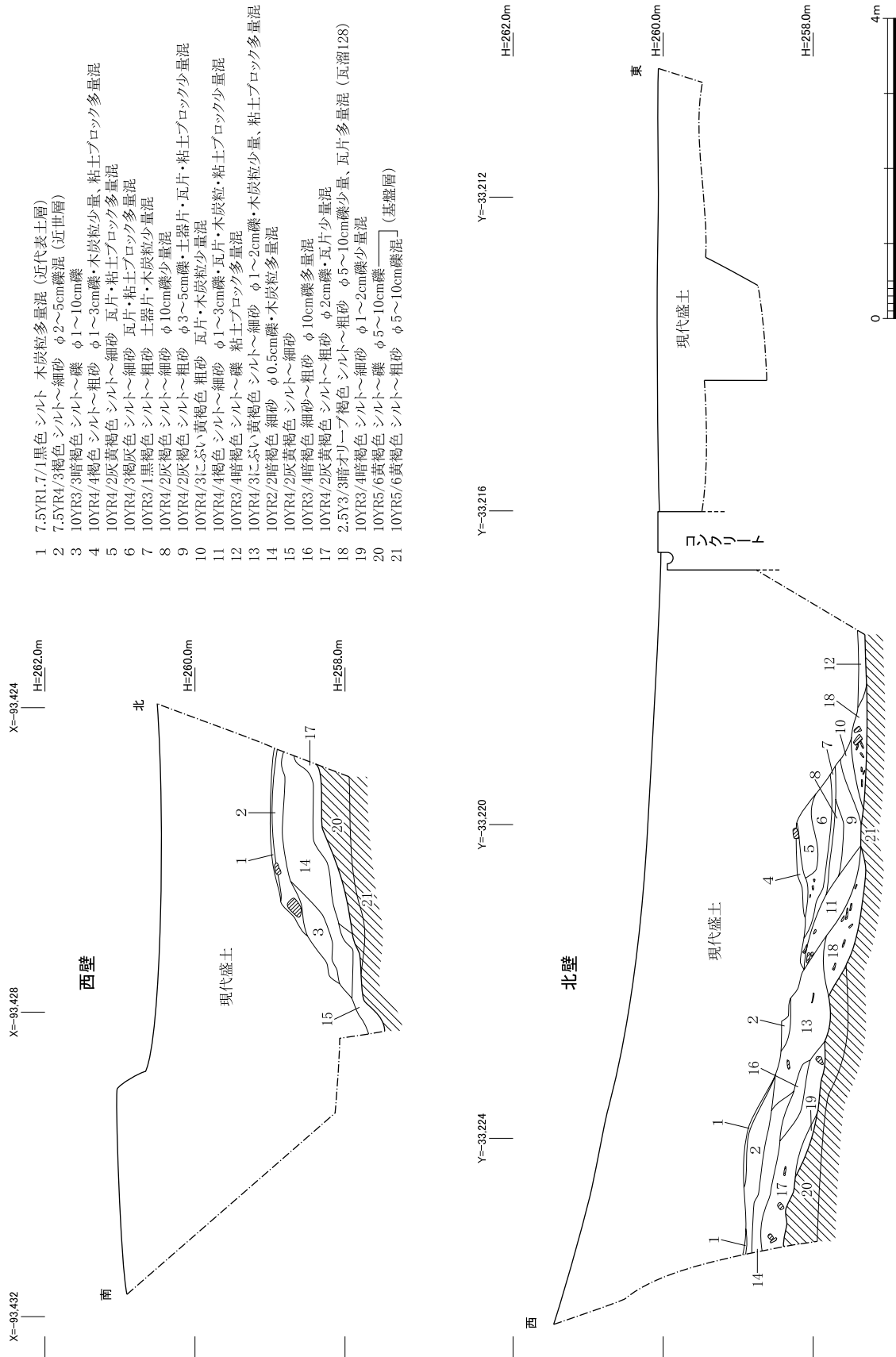
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 φ2~3cm礫少量、木炭粒・粘土ブロック多量混
- 2 10YR3/3暗褐色 粗砂 φ2cm礫混
- 3 7.5YR1.7/1黒色 シルト 木炭粒多量混 (近代表土層)
- 4 7.5YR4/3褐色 シルト~細砂 φ2~5cm礫混 (土器溜り3)
- 5 10YR3/4暗褐色 粗砂~礫 φ2cm大の礫 (近世層)
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト~細砂 φ0.5cm大の礫・木炭粒少量混
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト~細砂 φ3cm礫・瓦片・木炭粒少量混
- 8 10YR2/3黒褐色 細砂 φ0.5cm礫・木炭粒多量混(黒ボク層)
- 9 10YR3/4暗褐色 シルト~細砂 木炭粒少量、粘土ブロック多量混
- 10 10YR3/3暗褐色 粗砂 φ1cm礫・粘土ブロック少量、木炭粒多量混
- 11 10YR3/3暗褐色 細砂 木炭粒・粘土ブロック少量混
- 12 10YR2/3黒褐色 シルト~粗砂 木炭粒少量、粘土ブロック多量混 (ピット117)
- 13 10YR5/6黄褐色 シルト~細砂 φ1~10cm礫少量混
- 14 10YR6/8明黄褐色 シルト~礫 φ2~5cm礫
- 15 10YR5/6黄褐色 シルト~礫 φ5~10cm礫 (基礎層)





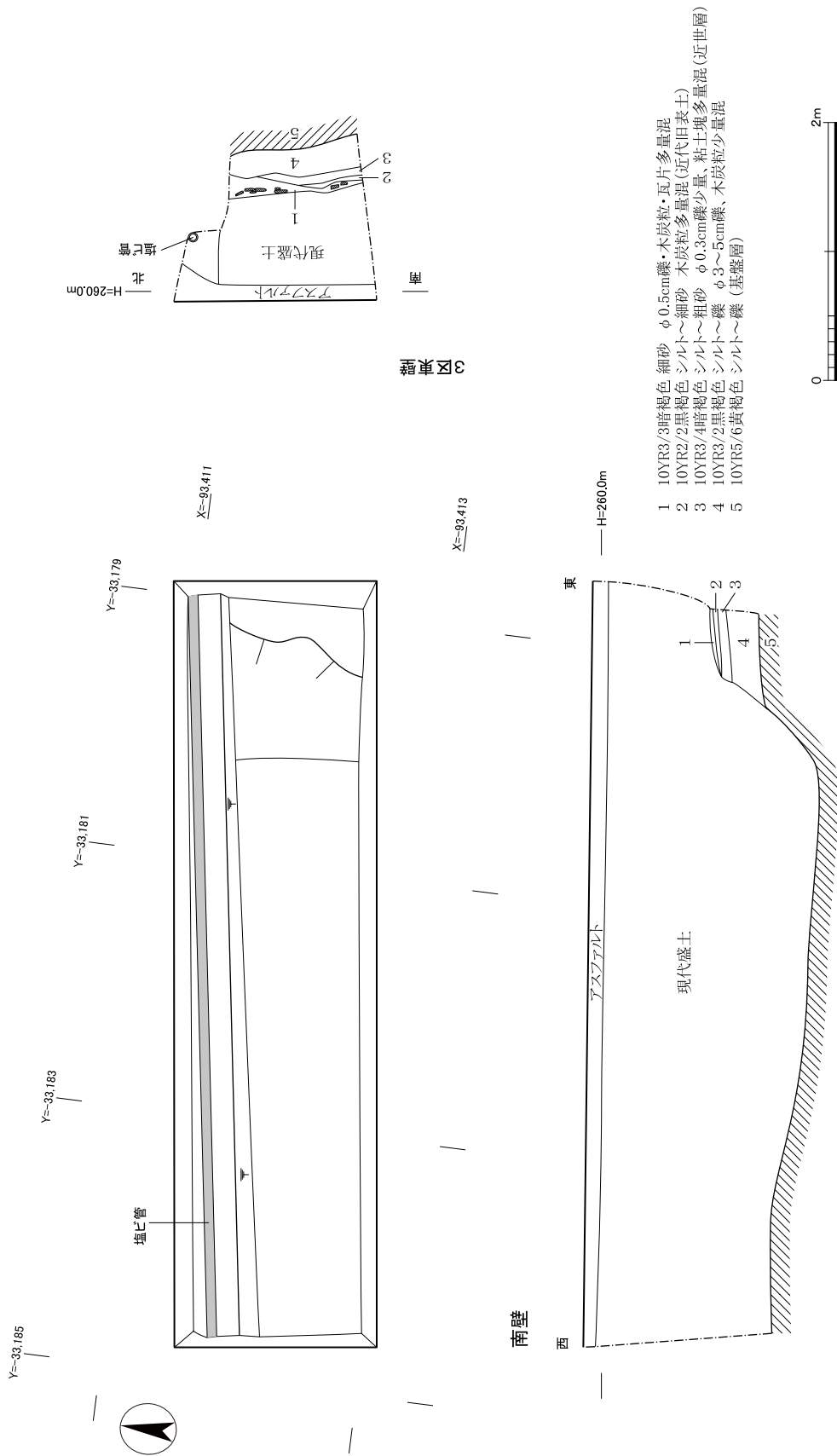
1区南壁断面図 (1:50)

図版 4
遺構

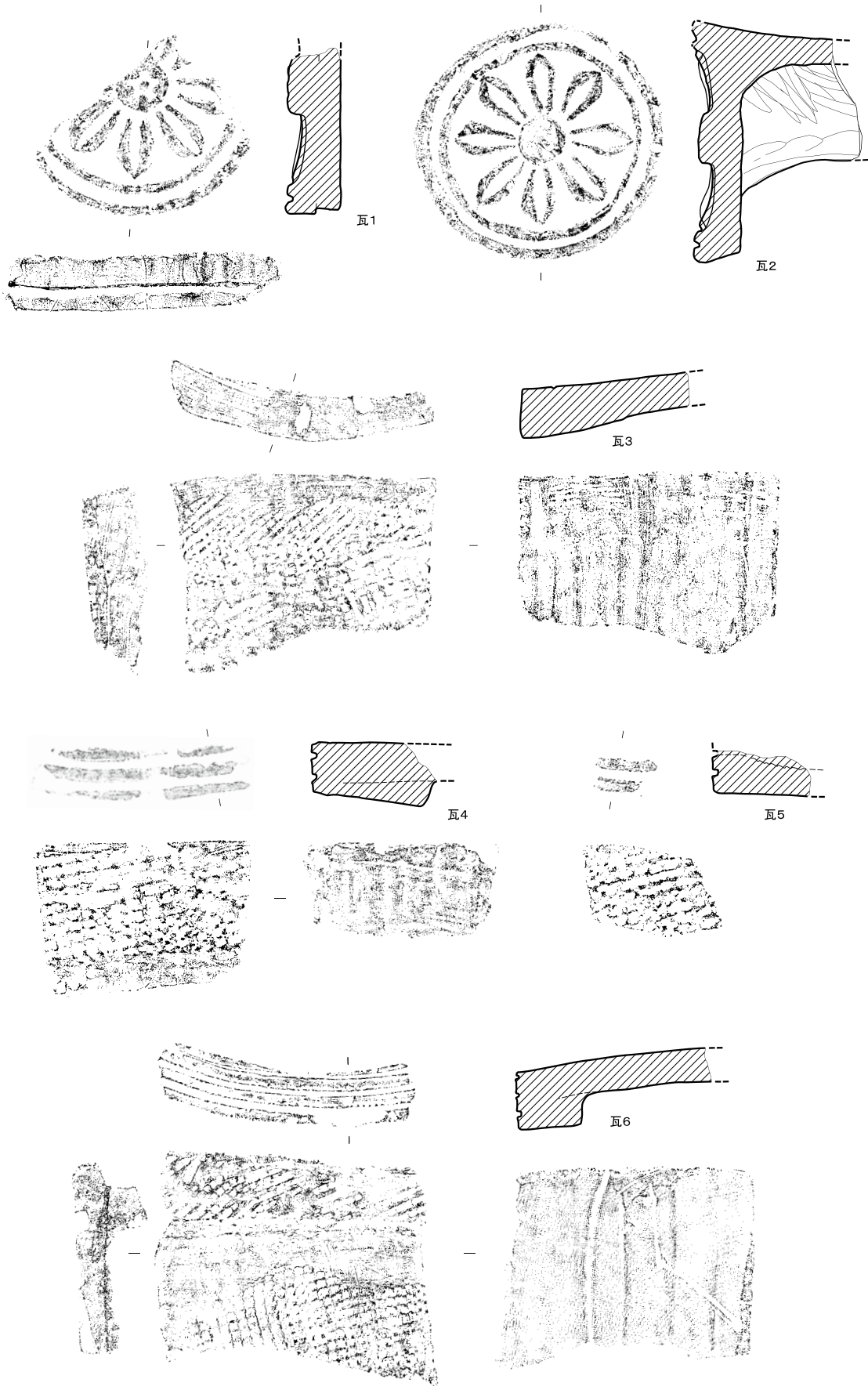


2区北壁・西壁断面図 (1 : 80)

3区実測図 (1:50)

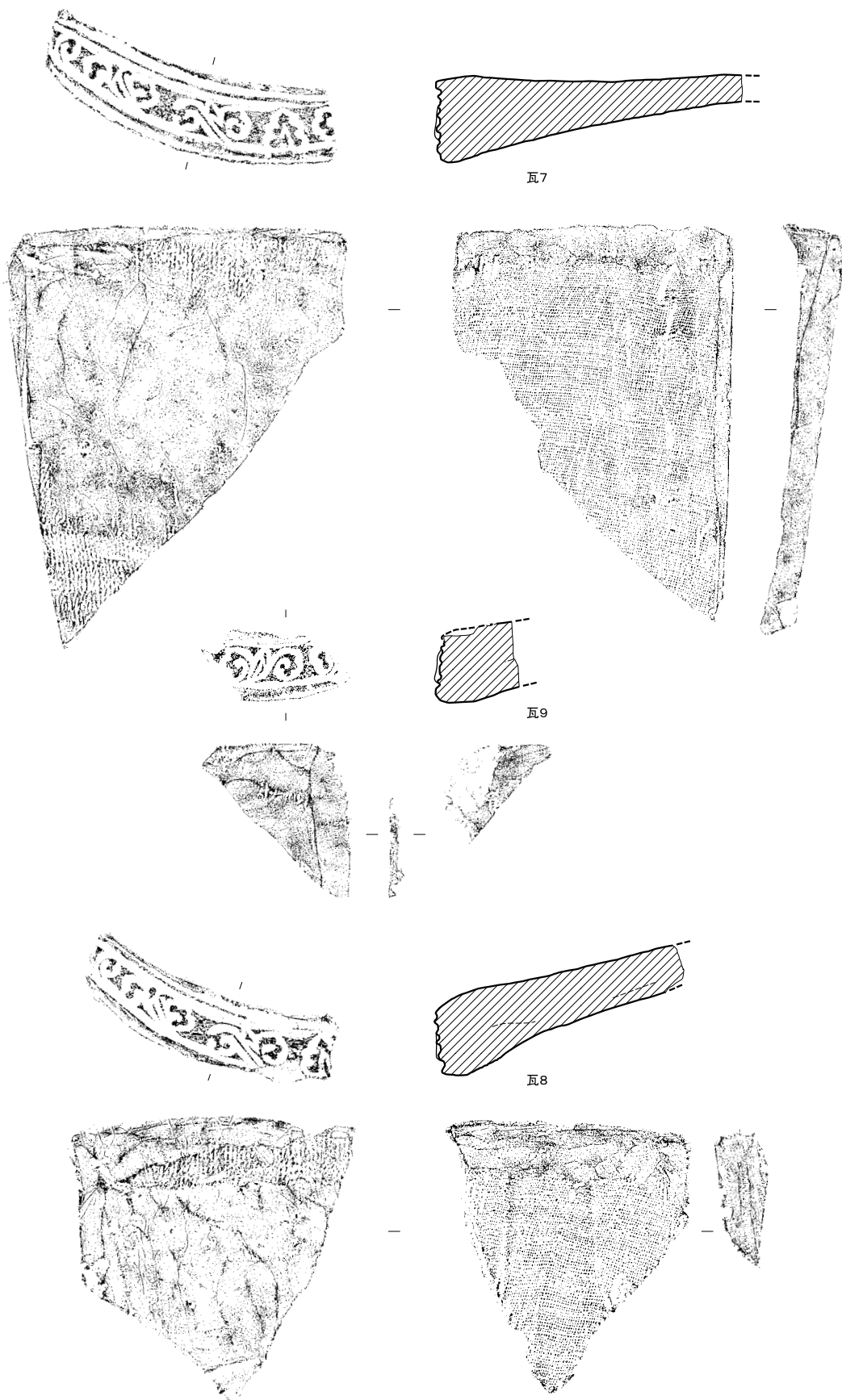


図版6
遺物



0 20cm

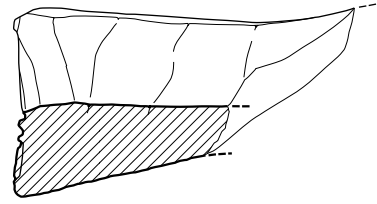
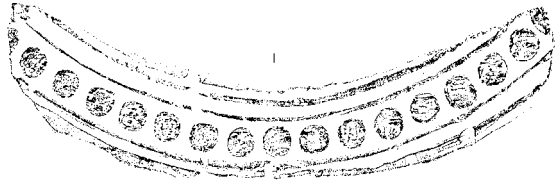
瓦類拓影及び実測図1 (1 : 4)



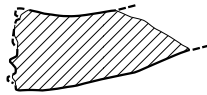
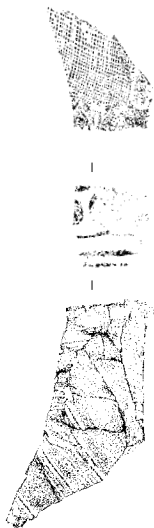
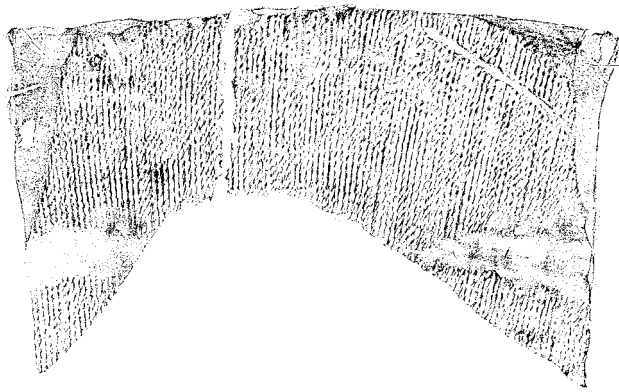
0 20cm

瓦類拓影及び実測図2 (1 : 4)

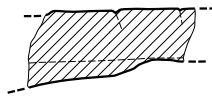
図版 8
遺物



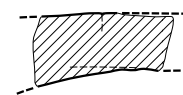
瓦10



瓦11



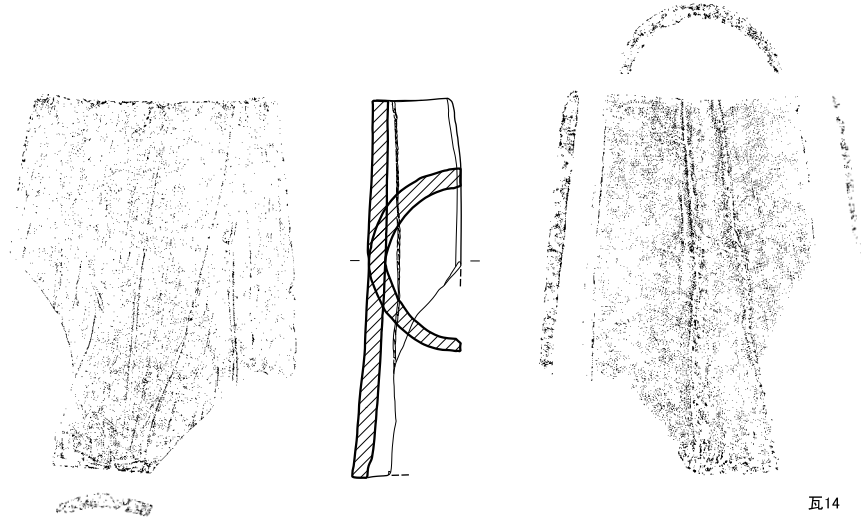
瓦12



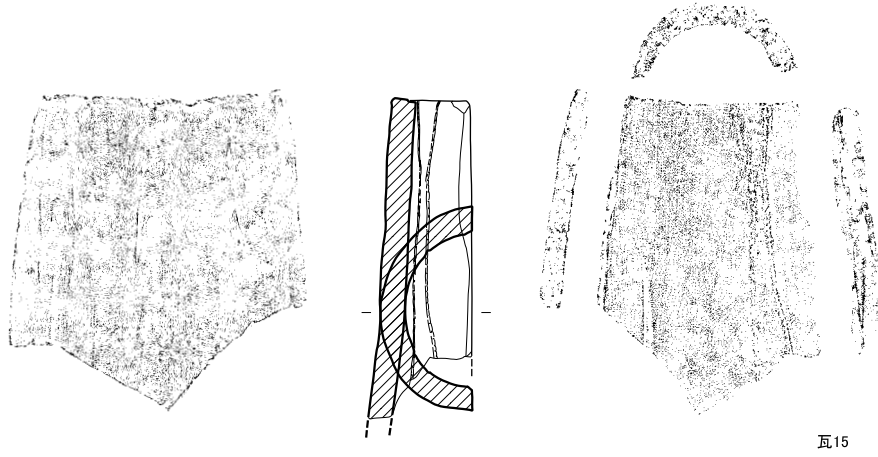
瓦13



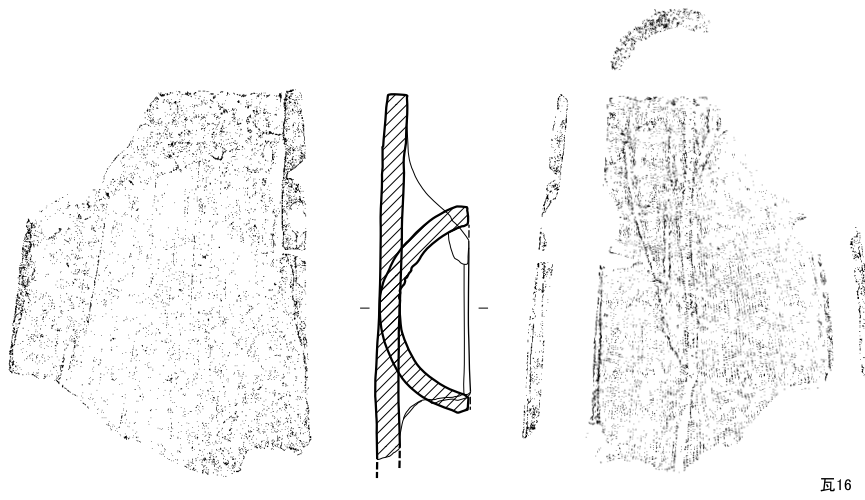
瓦類拓影及び実測図3 (1:4)



瓦14

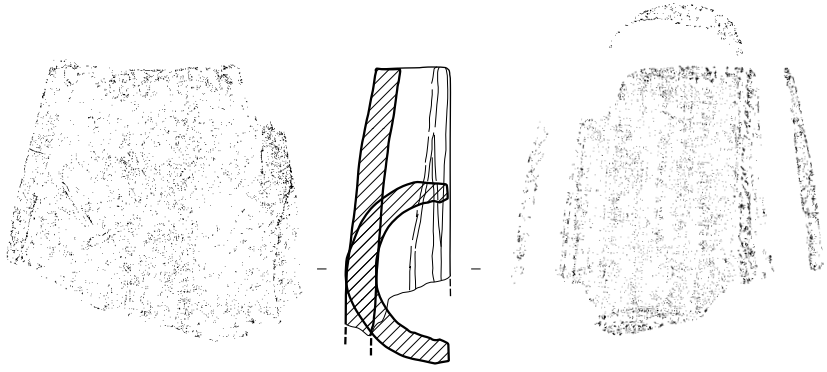


瓦15

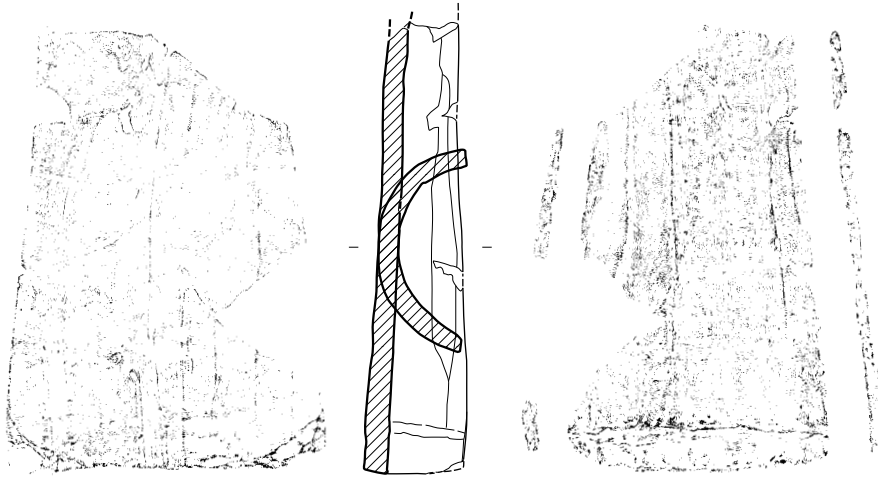


瓦16





瓦17

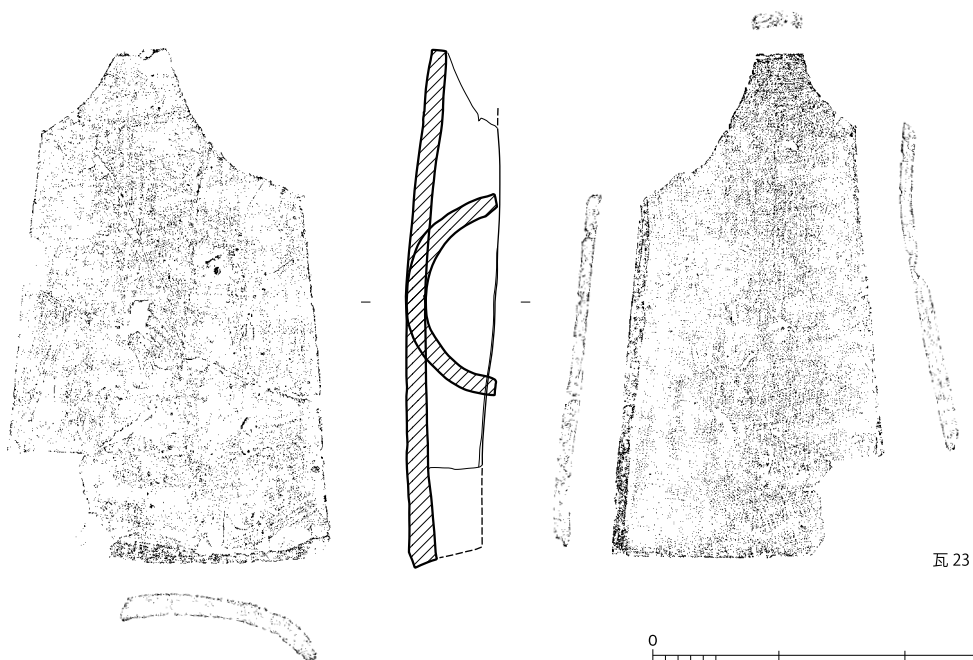
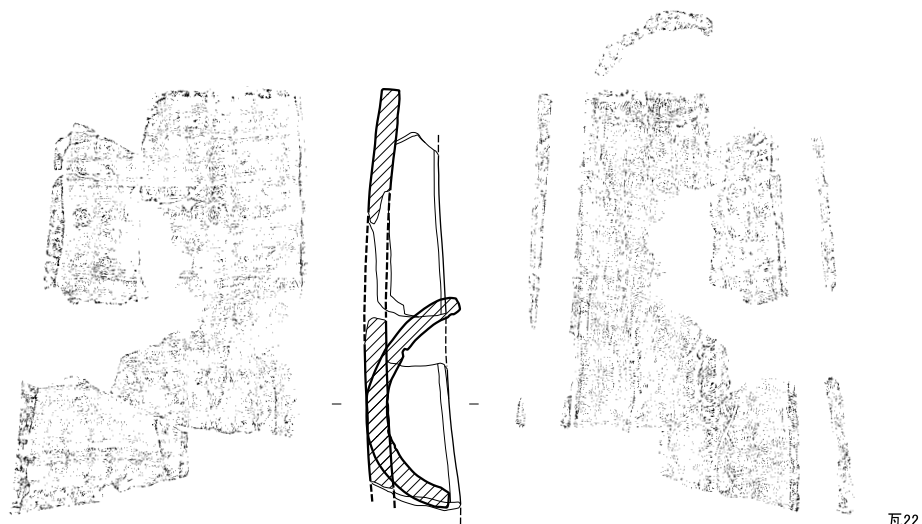
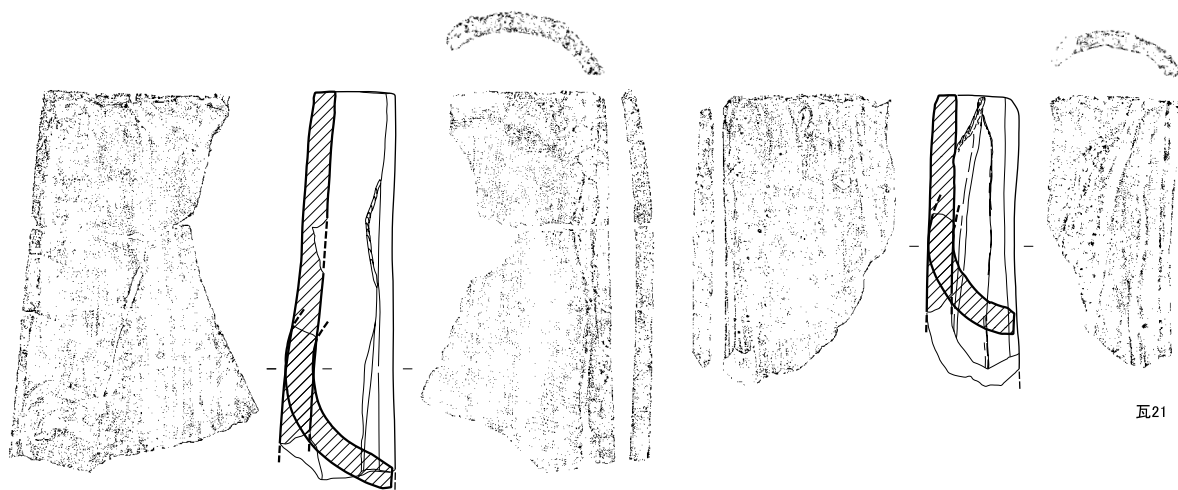


瓦18

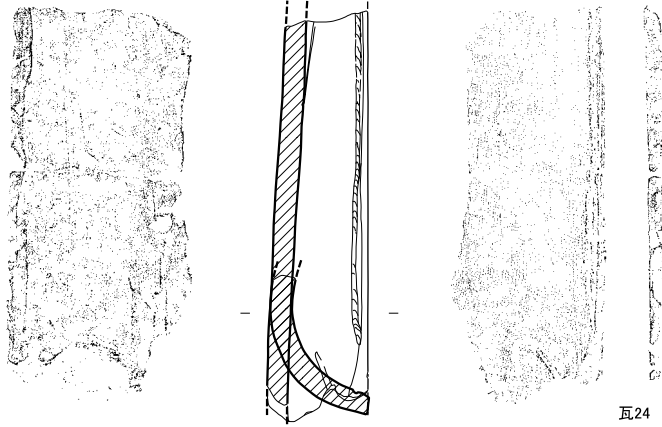


瓦19

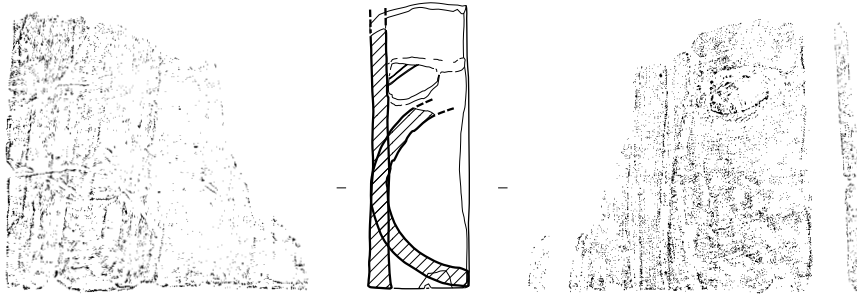




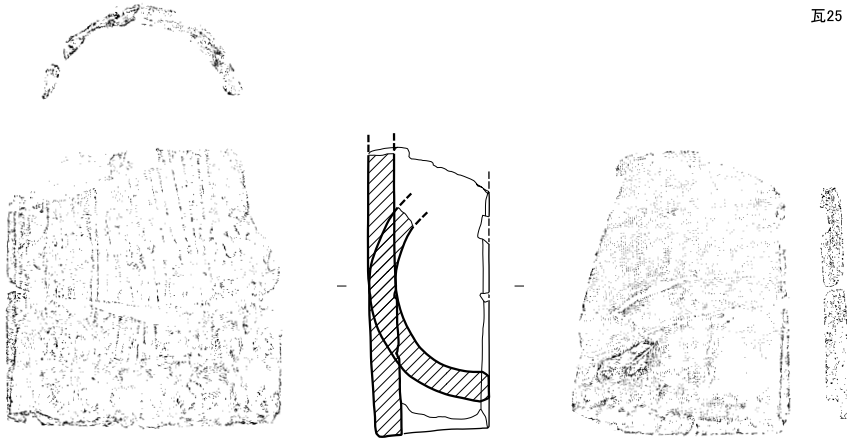
瓦類拓影及び実測図6 (1 : 6)



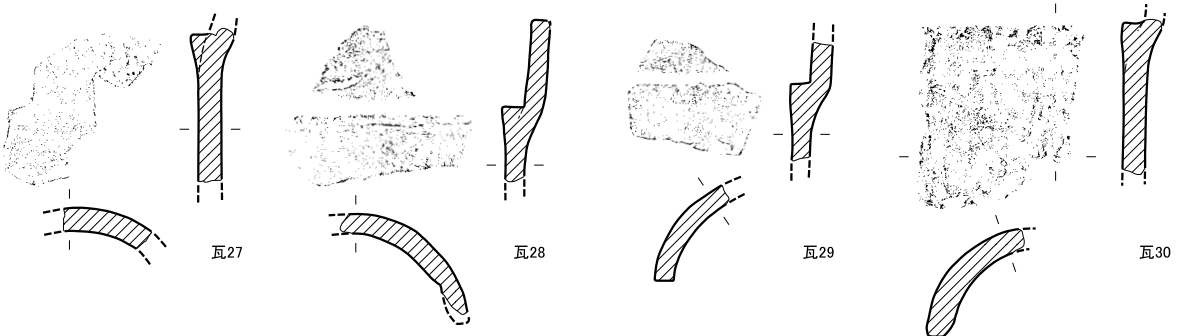
瓦24



瓦25



瓦26



瓦27

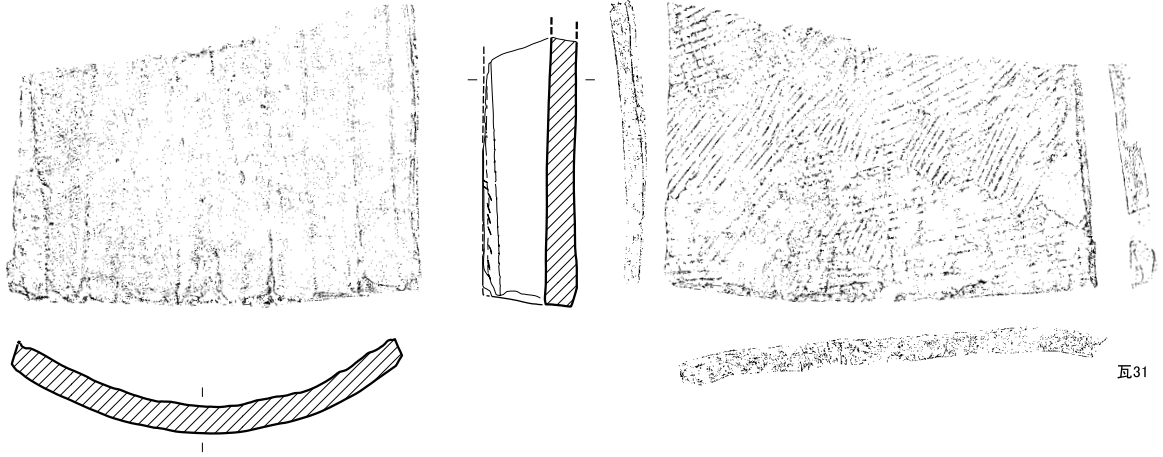
瓦28

瓦29

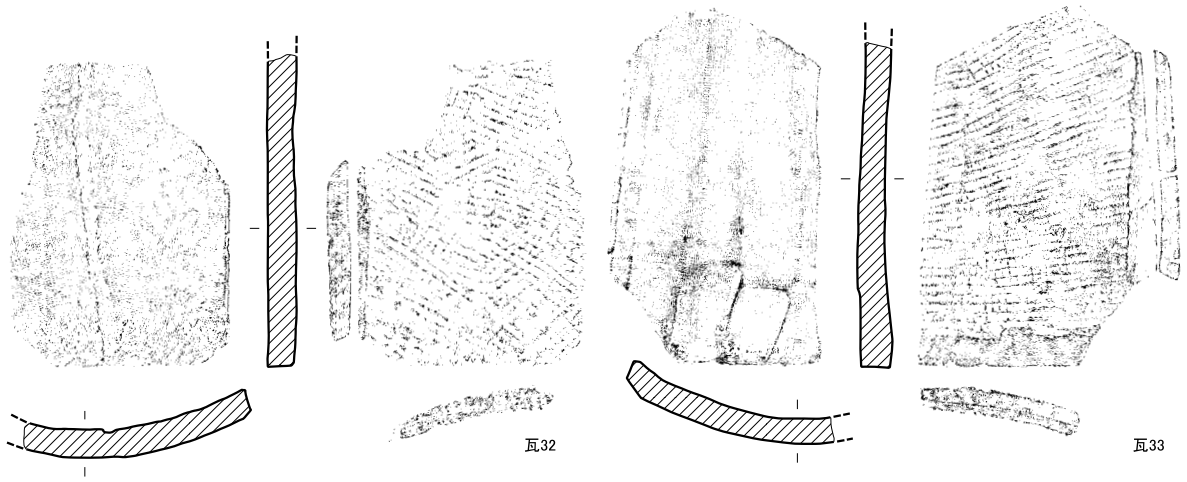
瓦30



瓦類拓影及び実測図7 (1:6)

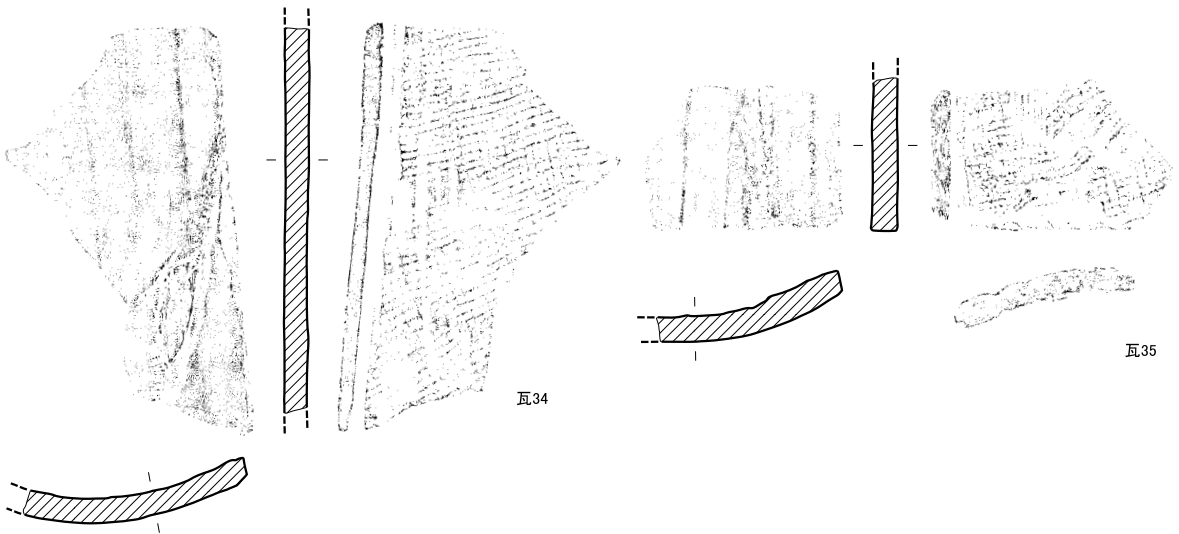


瓦31



瓦32

瓦33



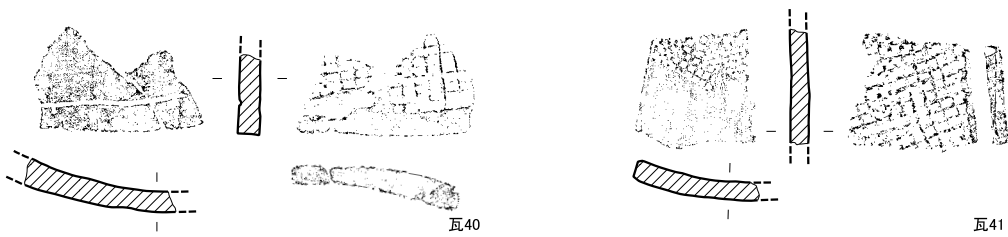
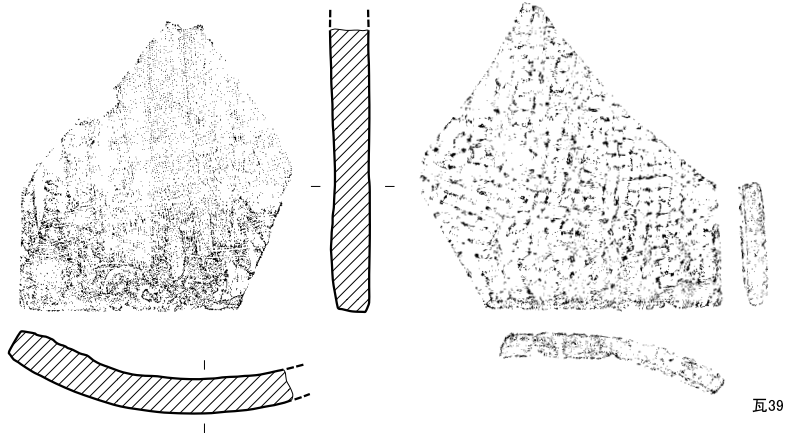
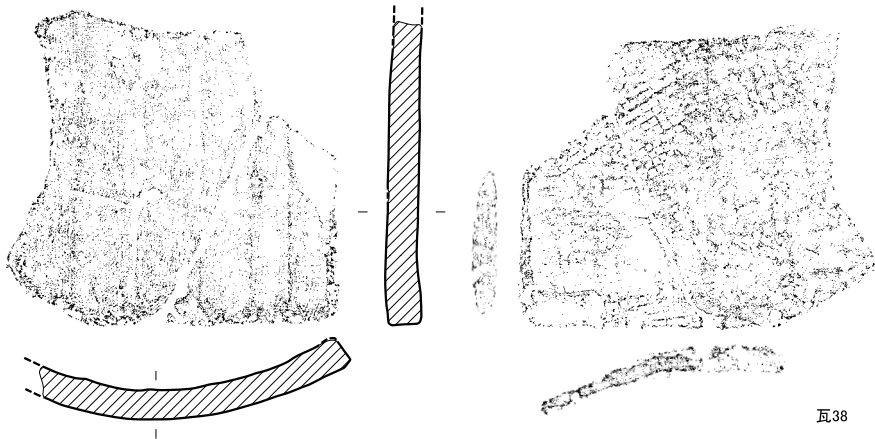
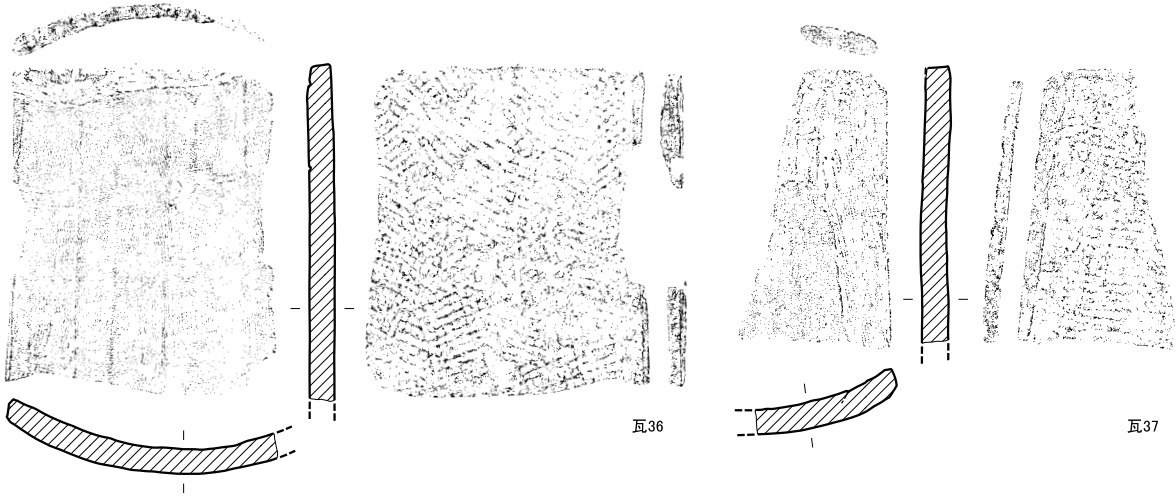
瓦34

瓦35

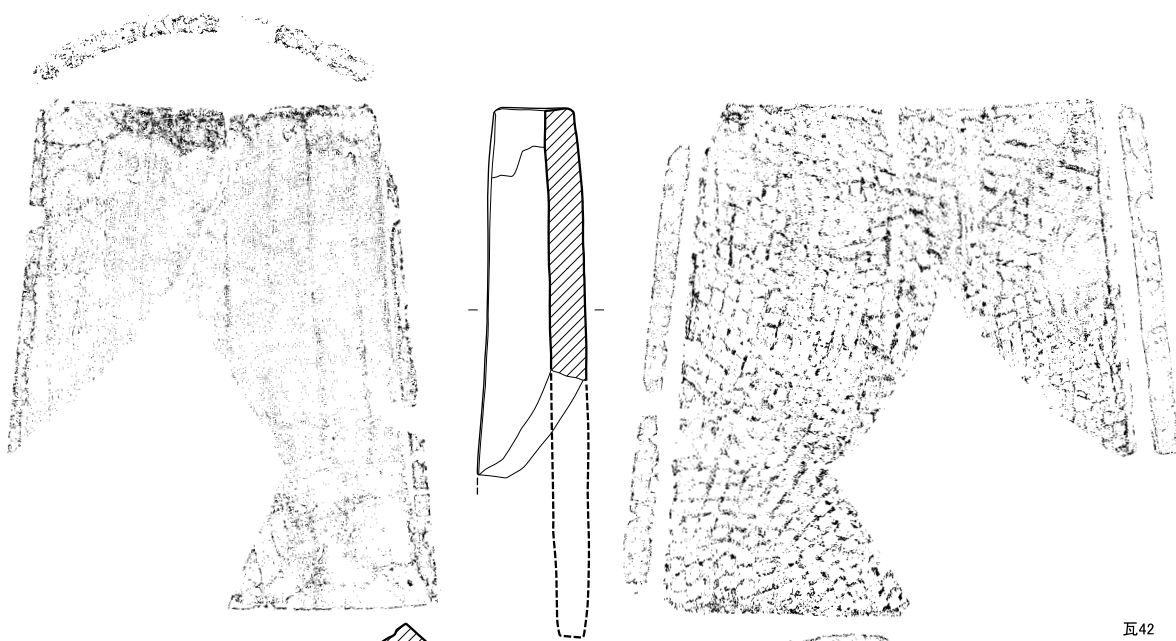


瓦類拓影及び実測図8 (1:6)

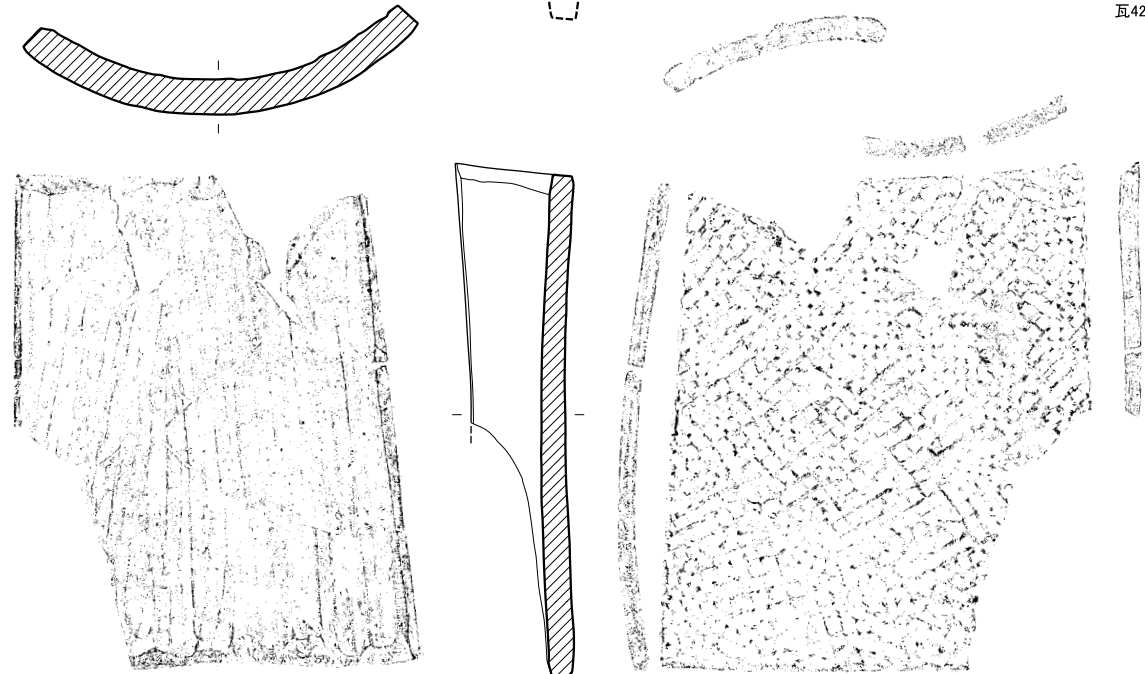
図版
14
遺物



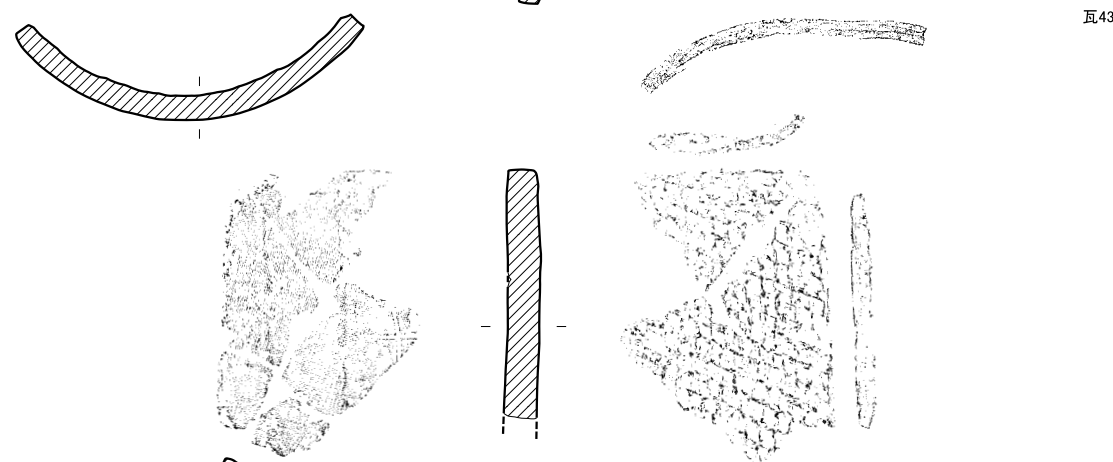
瓦類拓影及び実測図9 (1:6)



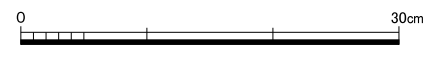
瓦42



瓦43

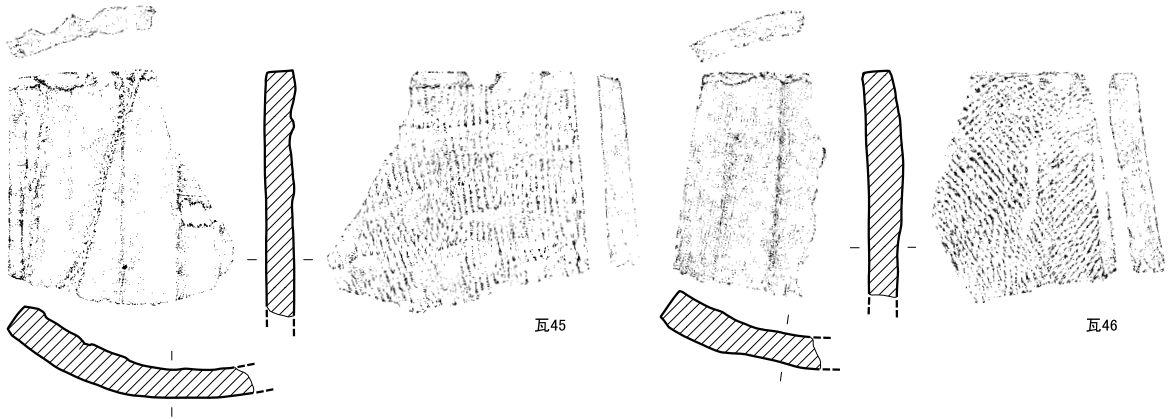


瓦44



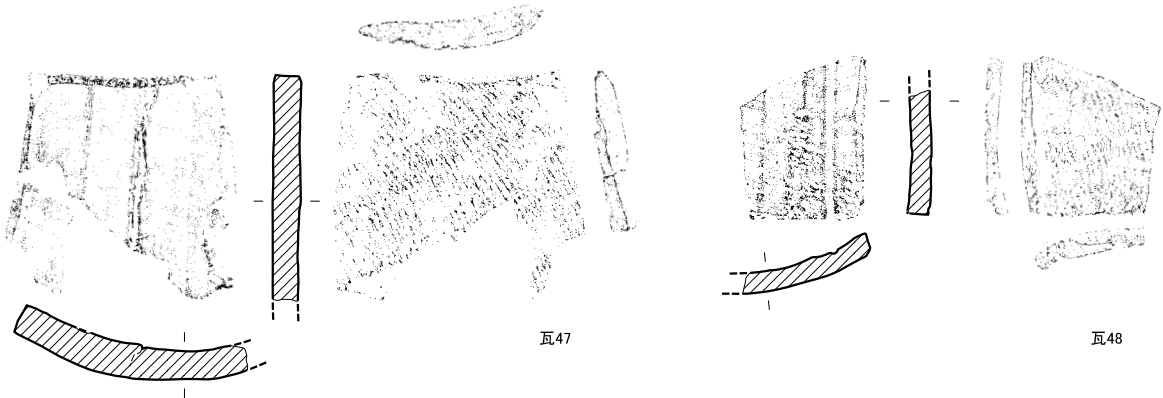
瓦類拓影及び実測図10 (1 : 6)

図版
16
遺物



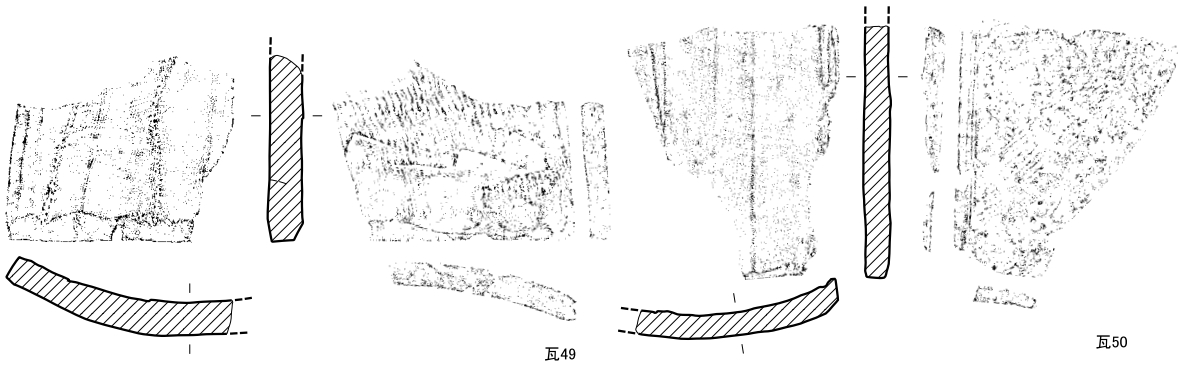
瓦45

瓦46



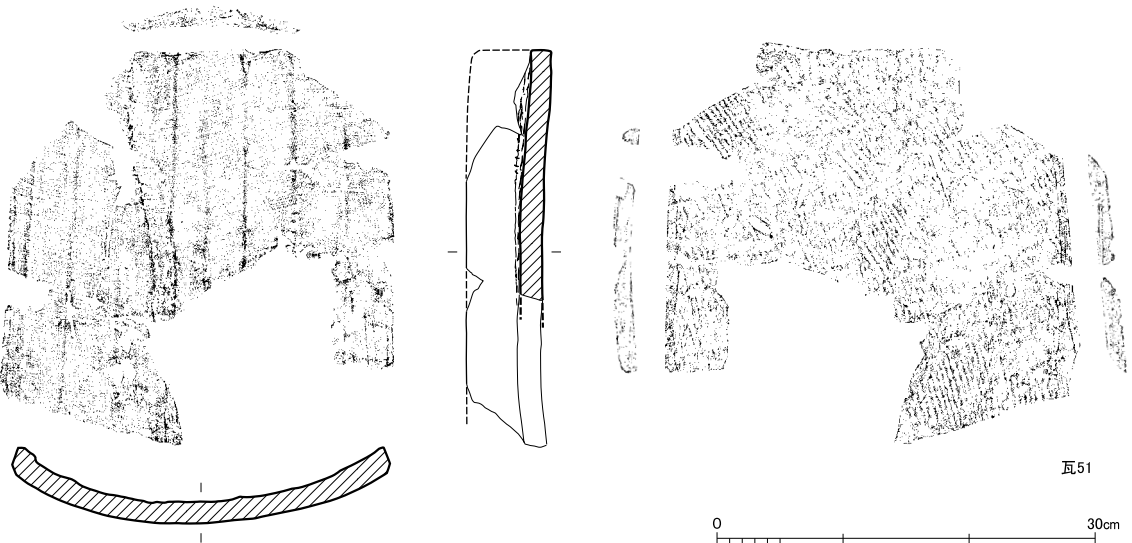
瓦47

瓦48



瓦49

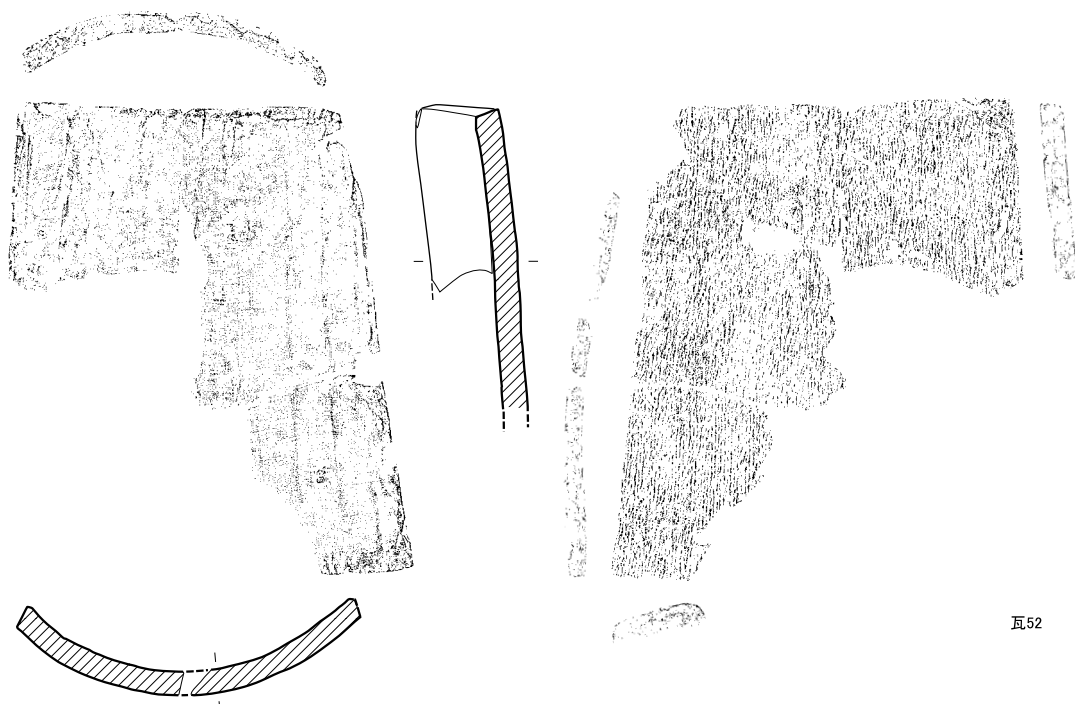
瓦50



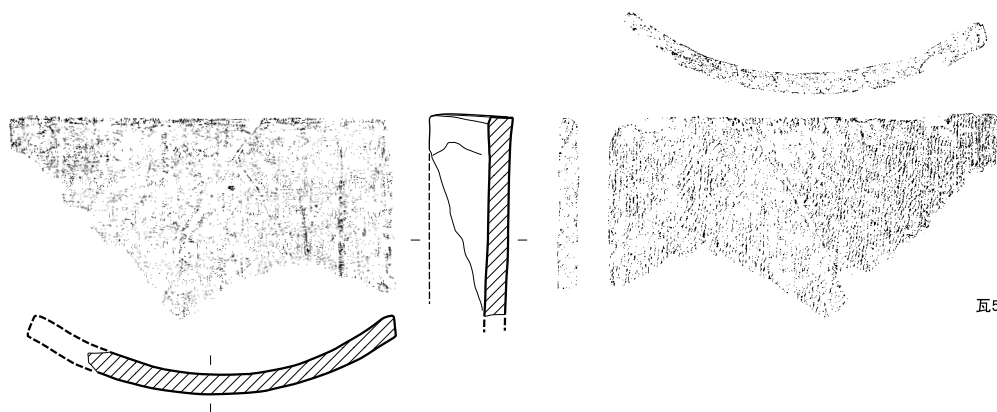
瓦51



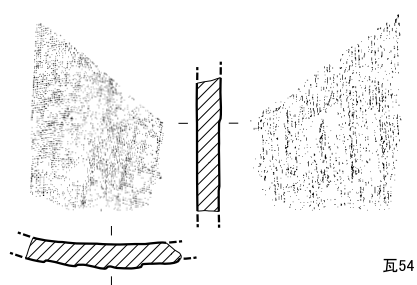
瓦類拓影及び実測図11 (1 : 6)



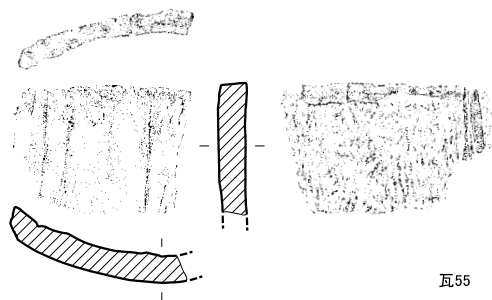
瓦52



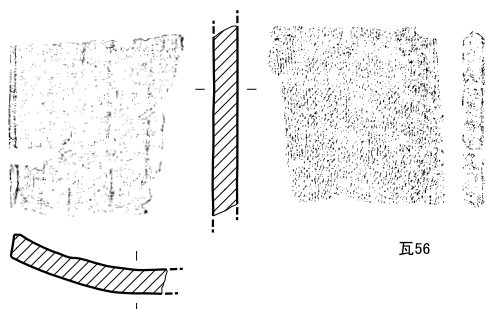
瓦53



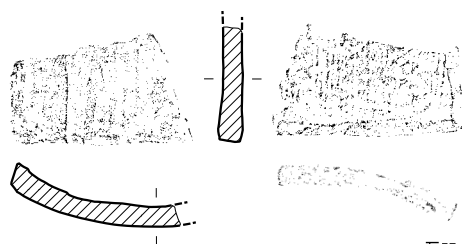
瓦54



瓦55



瓦56

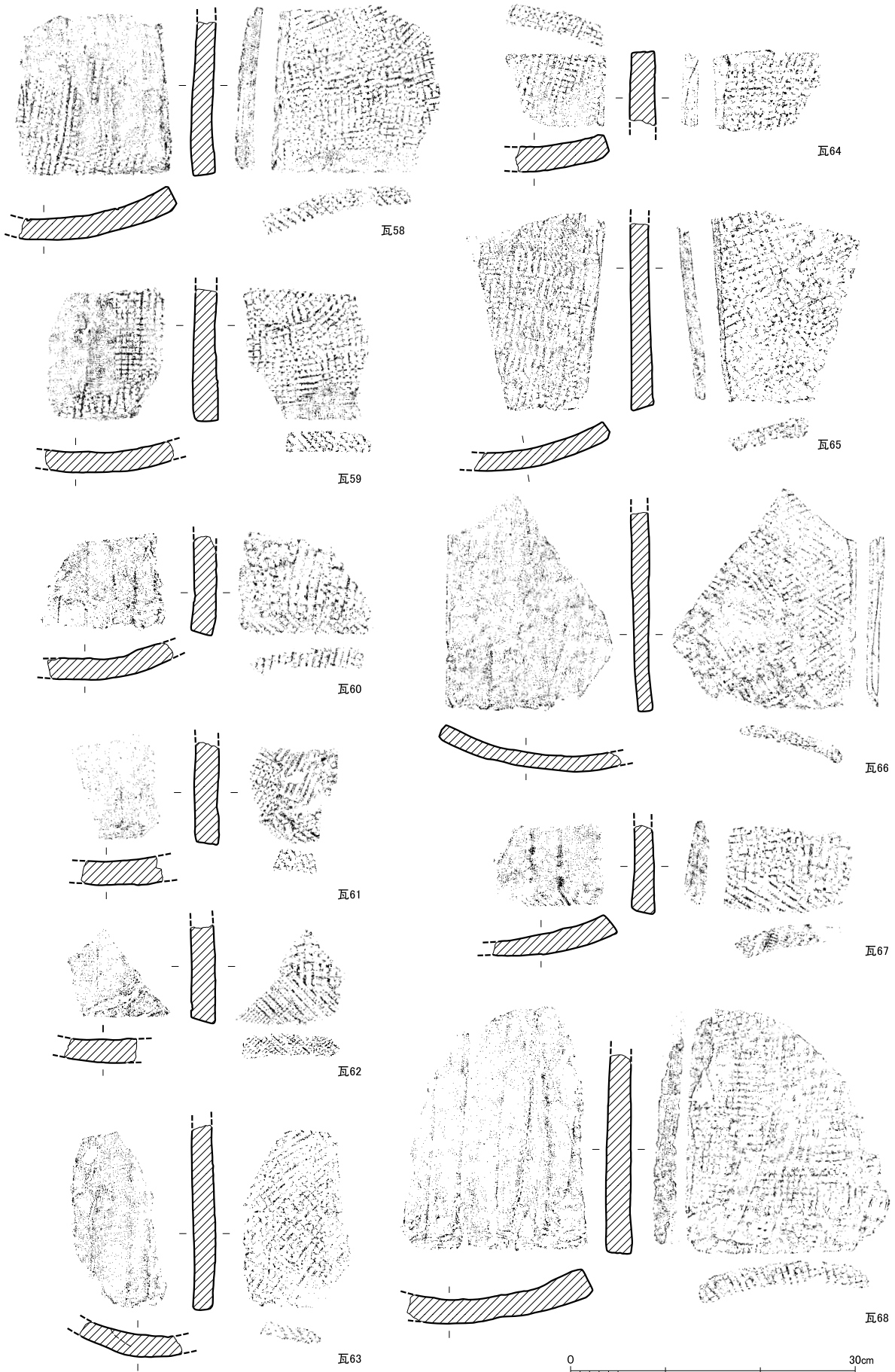


瓦57

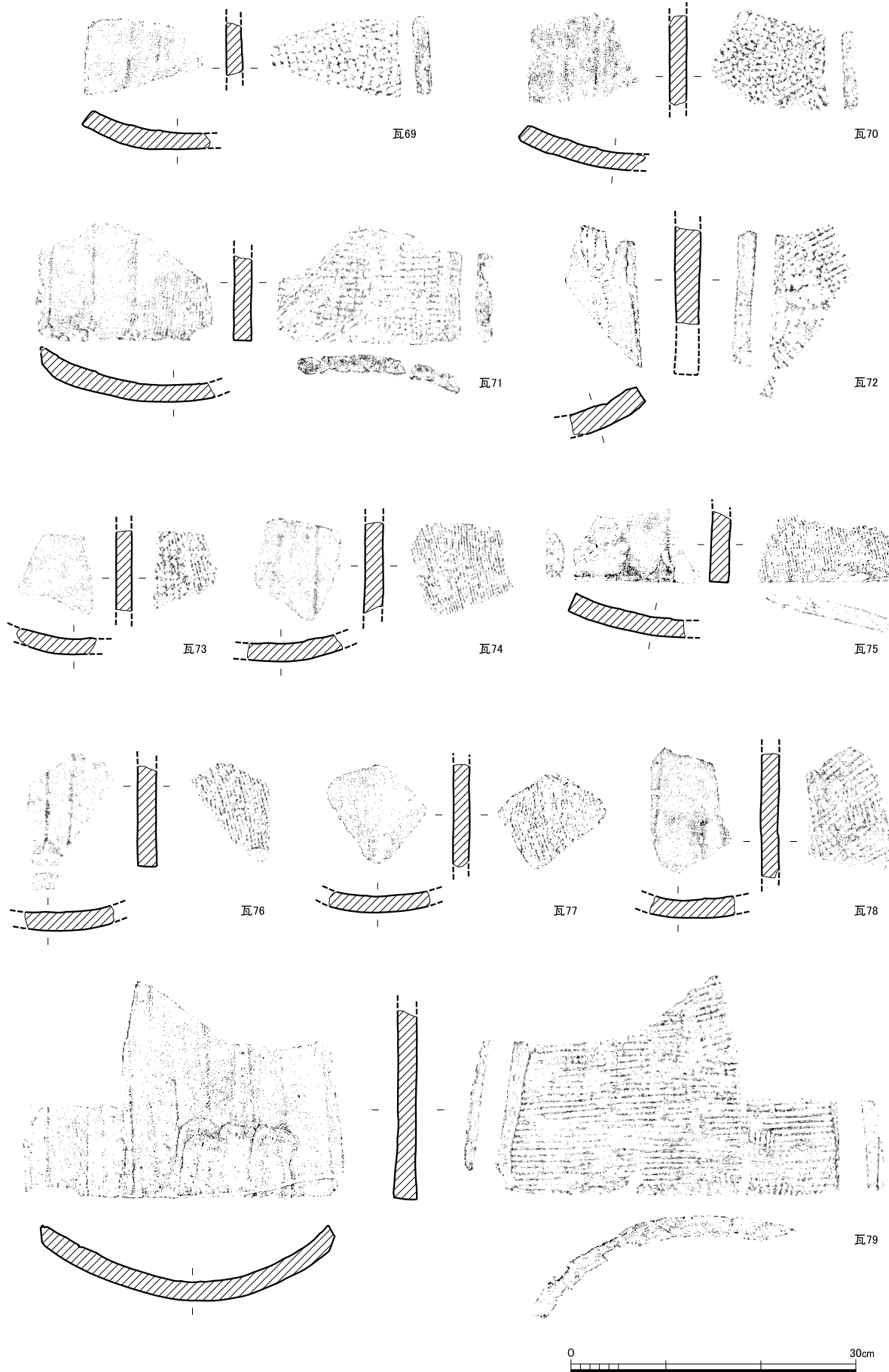


瓦類拓影及び実測図12 (1 : 6)

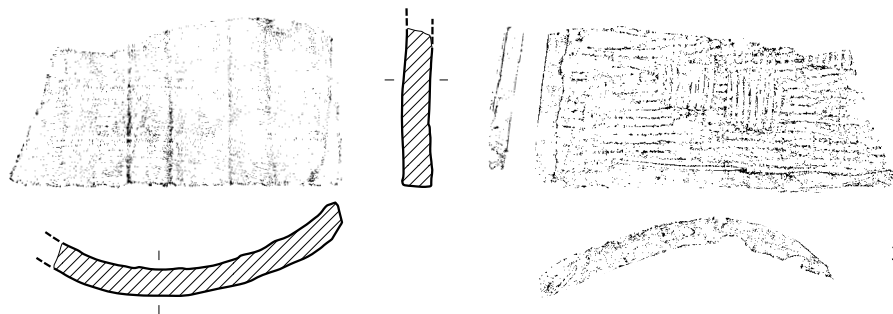
図版
18
遺物



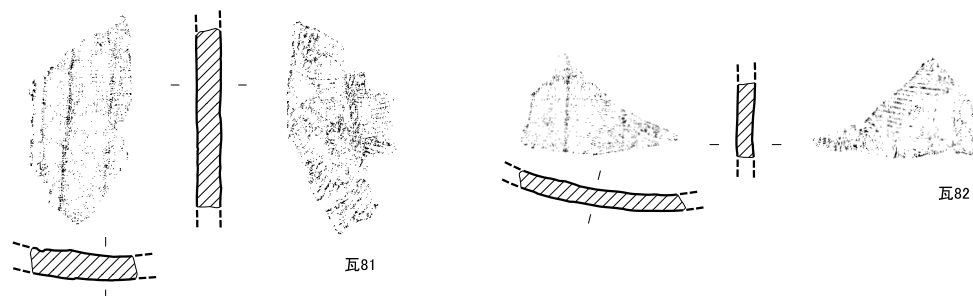
瓦類拓影及び実測図13 (1 : 6)



瓦類拓影及び実測図14 (1 : 6)

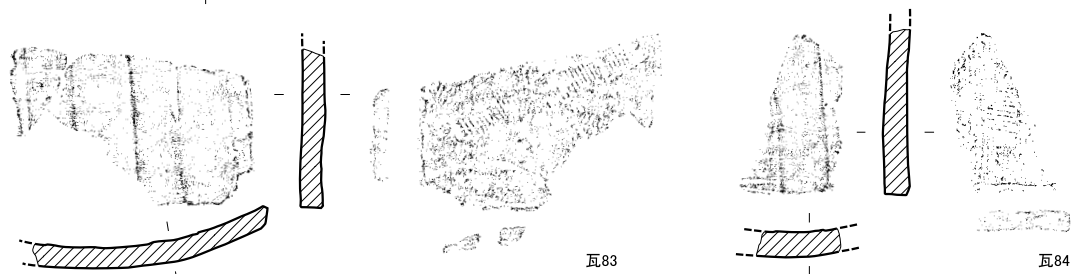


瓦80



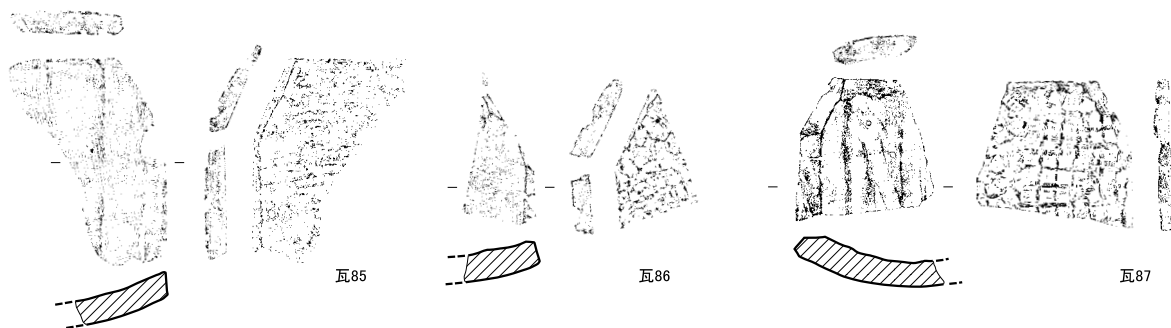
瓦81

瓦82



瓦83

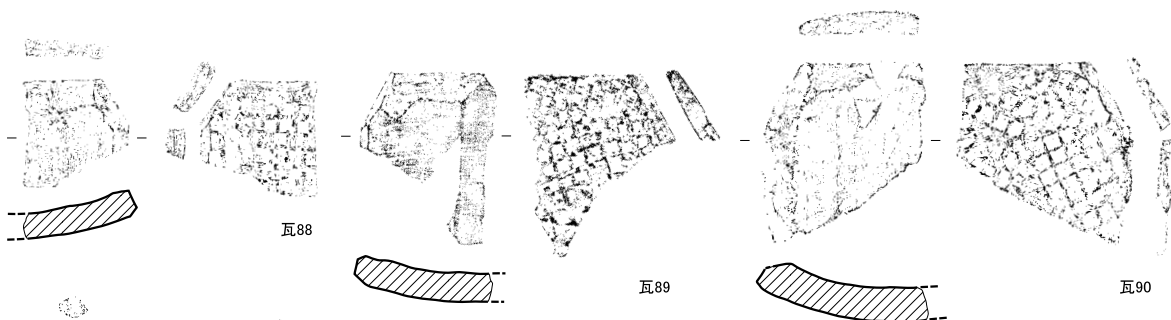
瓦84



瓦85

瓦86

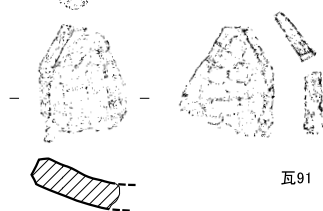
瓦87



瓦88

瓦89

瓦90



瓦91



瓦類拓影及び実測図15 (1 : 6)



1 1区全景（西から）



2 礎石建物1（東から）



1 1区礎石5・抜取穴2の断ち割り（北東から）



2 礎石2（南から）



3 礎石5（東から）



4 抜取穴1（北から）



5 抜取穴2（東から）



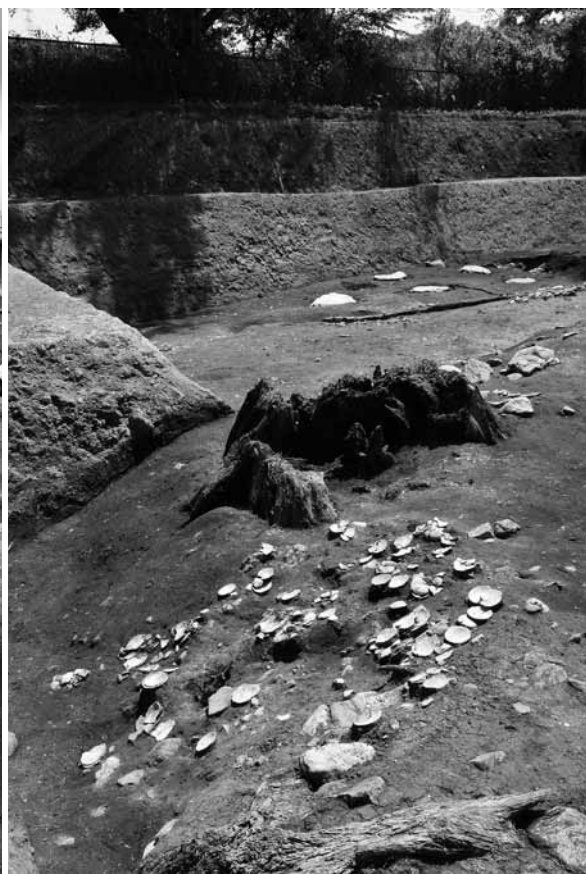
1 1区排水溝70西部（北から）



2 1区堀1・2、竪穴建物100（北東から）



3 1区平坦面1・2と瓦溜り20（南東から）



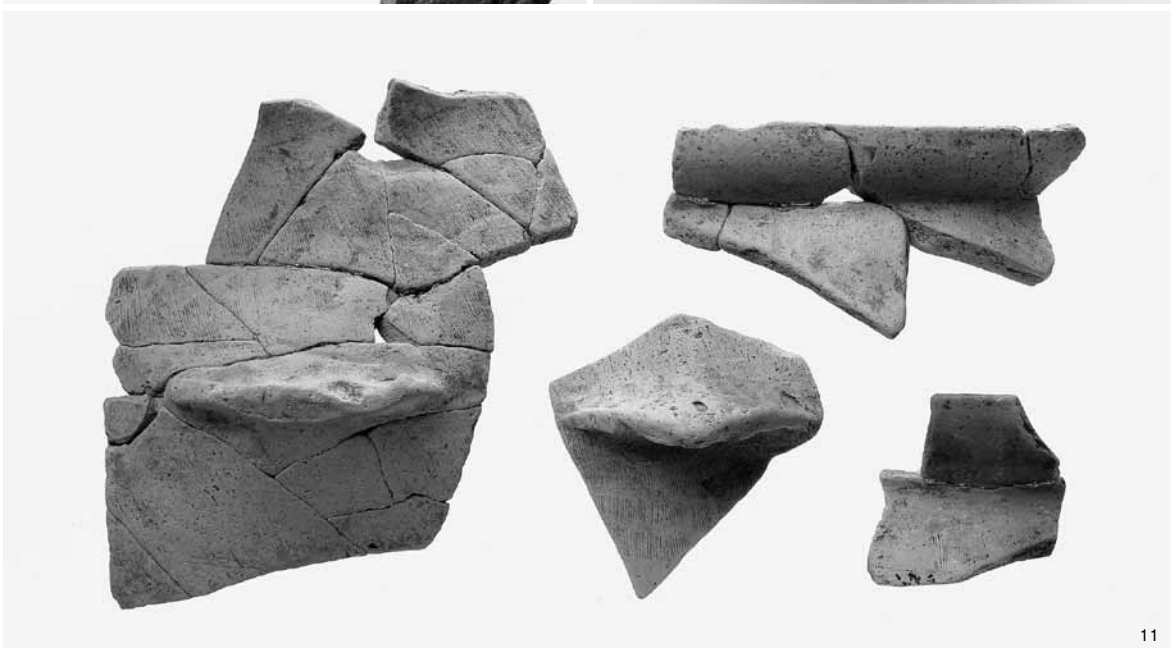
4 1区土器溜り2・3（北東から）



1 2区全景（西から）



2 3区全景（西から）



土器類



瓦1



瓦2



瓦3



瓦6

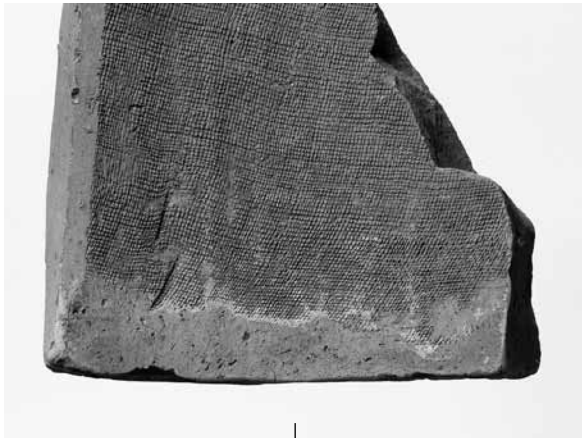


瓦4



平瓦部凹面：粘土紐痕

瓦12



瓦7



瓦10



軒瓦類

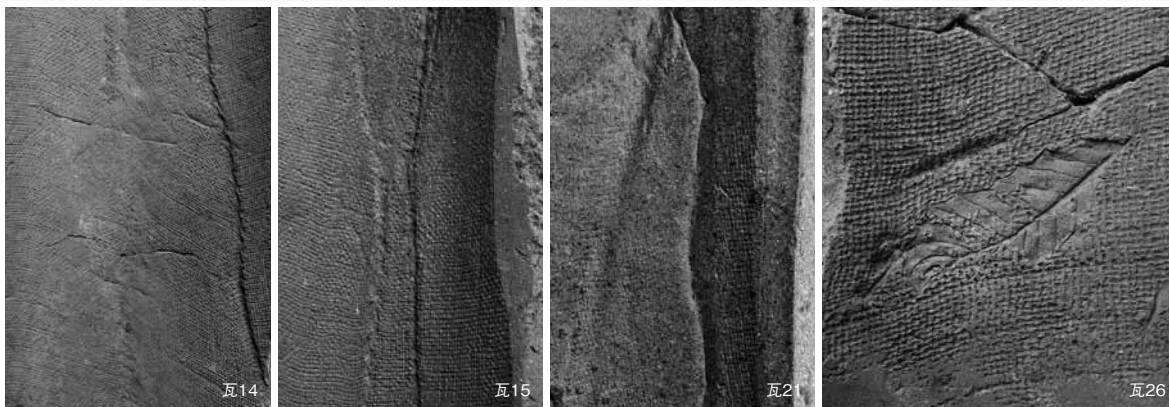




瓦18



瓦23



瓦14

瓦15

瓦21

瓦26

凹面に粘土紐繫ぎ目（一部）

凹面に布織合わせ目（一部）

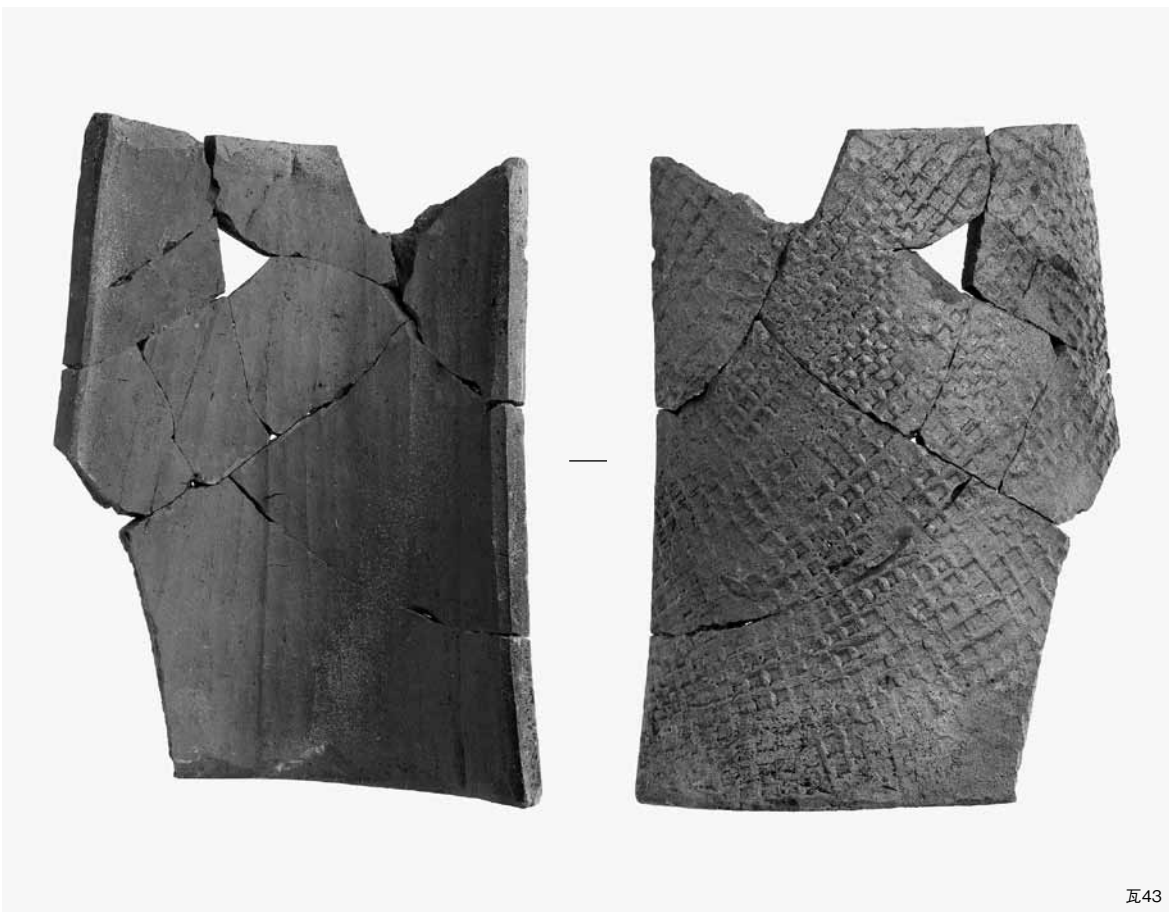
凹面に粘土板合わせ目（一部）

凹面の葉っぱ圧痕

丸瓦 I 類



瓦31

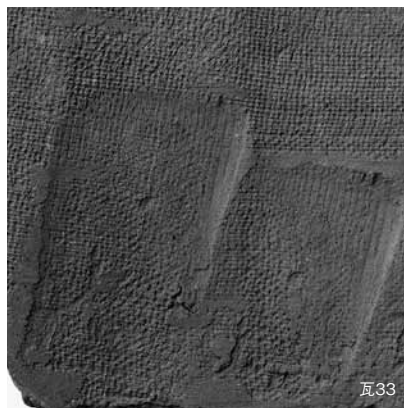


瓦43



瓦32

凹面に布織合わせ目（一部）



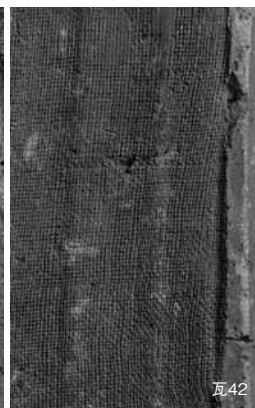
瓦33

凹面に道具の当たり痕（一部）



瓦37

凹面に粘土板合わせ目（一部）



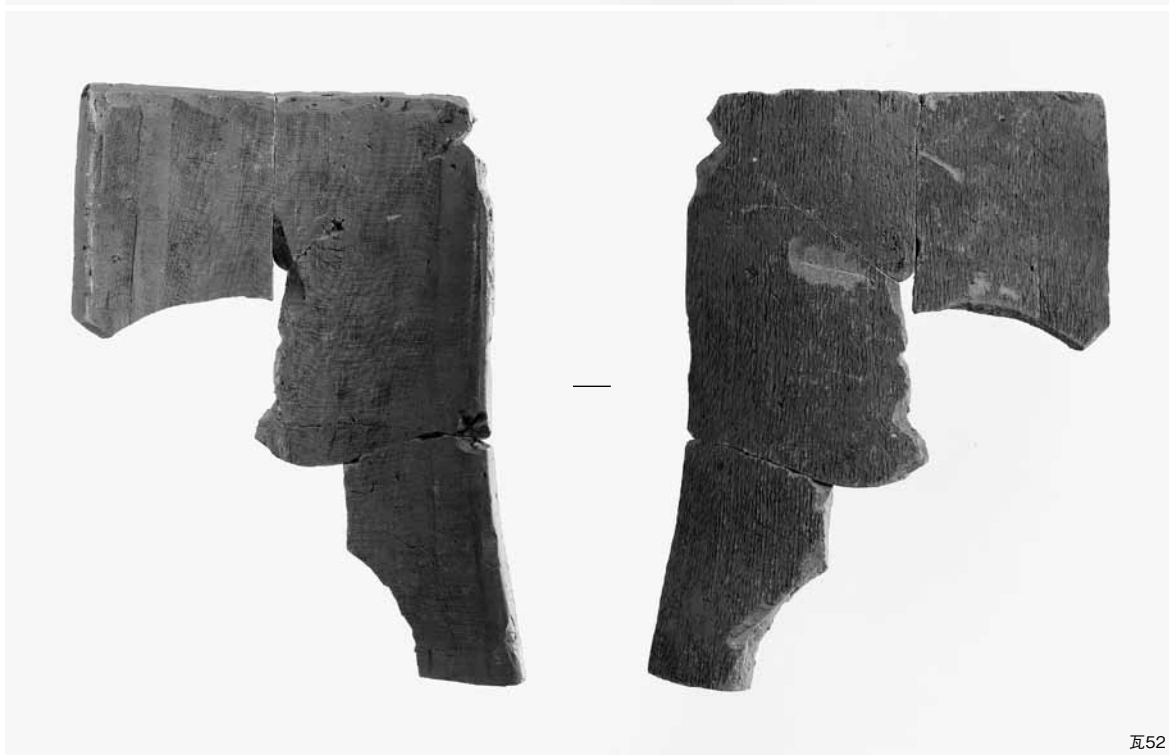
瓦42

凹面に分割突帯（一部）

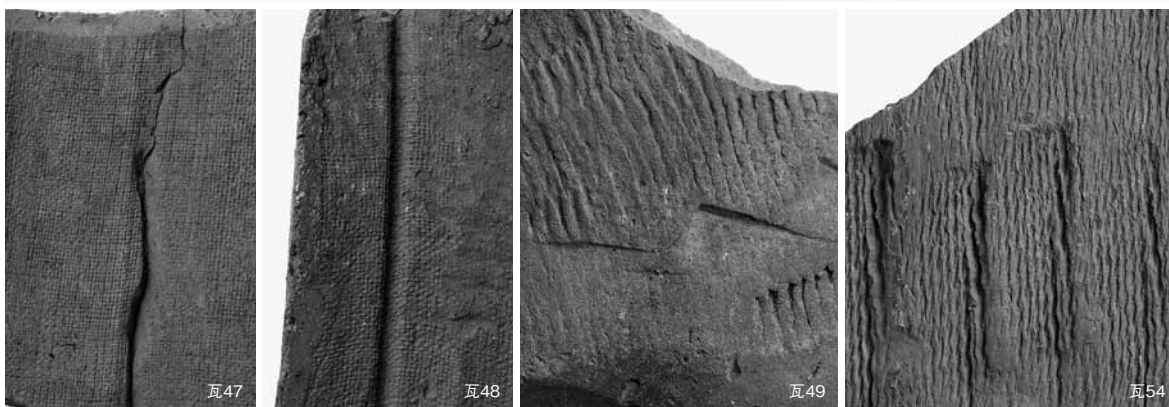
平瓦 I 類



瓦51



瓦52



凹面に粘土板合わせ目（一部）

瓦47

凹面に分割突帯（一部）

瓦48

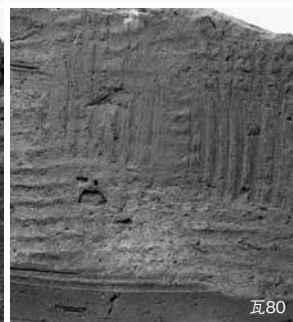
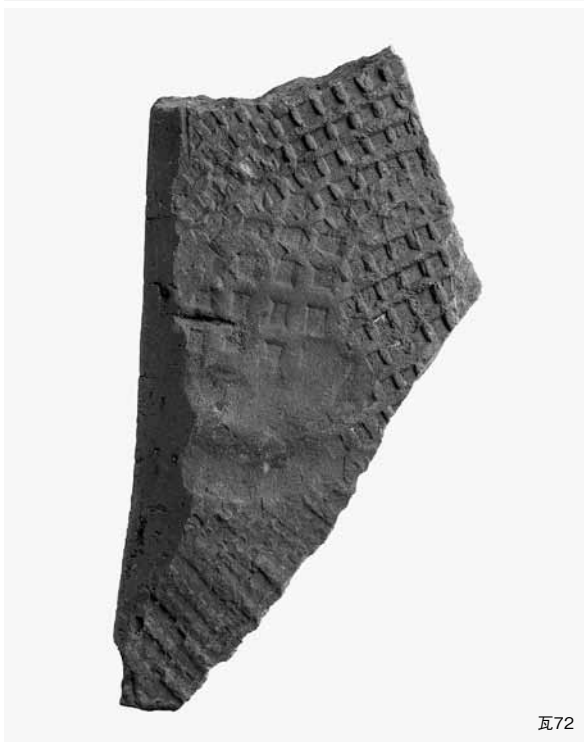
凸面に道具の当たり痕（一部）

瓦49

凸面に道具の当たり痕（一部）

瓦54

平瓦Ⅱ類



平瓦の広端面叩き・重複叩き、隅切平瓦

報 告 書 抄 録

ふりがな	しゅうざんはいじ							
書名	周山廃寺							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2018-6							
編著者名	李 銀眞							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2019年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しゅうざんはいじ 周山廃寺	きょうとしうきやうく 京都市右京区 けいほくしゅうざんちやうなかやま 京北周山町中山 はんち 39番地の4ほか きやうとしりつしゅうざん (京都市立周山 ちゆうがっこう 中学校)	26100	2084	35度 09分 26秒	135度 38分 07秒	2018年4月 9日～2018 年8月23日	1,319.6㎡	小中一貫 教育校 施設整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
周山廃寺	寺院跡	飛鳥時代後期 (白鳳期) ～奈良時代	礎石建物、排水溝、 塀、竪穴建物、瓦 溜り、平坦面、ピ ット	土師器、須恵器、瓦器、 瓦類、金属製品		礎石建物(西堂跡) の礎石6基を再検 出し、それに伴う 排水溝や塀、また 竪穴建物などを検 出した。 礎石建物の北側で 平坦面や瓦溜りを 検出し、もう一つ の建物が存在した 可能性が高くなっ た。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-6

周 山 廃 寺

発行日 2019年3月31日

編 集 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発 行

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961